
修羅の巫女 1 《靈鬼編》

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

修羅の巫女1 『靈鬼編』

【Zコード】

Z8454A

【作者名】

暁

【あらすじ】

全寮制の女子校にかよう天獅子小町は、学校での野試合の日々を送っていた。しかし小町の前に一人の奇妙な男性が現れる、その男性のせいで小町の人生は大きく狂つた。『バイバイ小町ちゃん』それが意味する未来とは？

1：神と悪魔

Italy

血で染まつた真つ赤な大地。

パズルのようにバラバラになつた死体。
意識はあるが体の一部が無い人。

地獄絵図、そこに不相応な一人の女性。

真つ赤な髪の毛、血に染まつたモノではない。

真つ赤な瞳、猫のように瞳孔は縦に割れている。

真つ赤な着物、朱に染められた着物の帯は白、そこには長い鬚を生
やし、長い髪の毛の古代ヨーロッパの初老の男性が刺繡されている。
真つ赤な長刀、その赤は血、切つ先から滴り落ちるも血。

対峙するは、赤黒いローブを着た人、フードを被つていて顔は確認
出来ない。

分かる事は、この地獄絵図はこの人物によつて描かれたモノ、得物
は大剣クレイモア、そして、敵。

二人の男が片膝を付いた状態で女性の後ろに現れる、顔は下を向き、
女性より下の階級だということが分かる。

「阿修羅様、あのお二人は？」

阿修羅と呼ばれたその女性は、意識は敵に、顔半面は後ろに向かってた。

「ジャパンに、そして別々の場所に」

その言葉を聞くと同時に二人は消えた。

残されるは阿修羅と敵、阿修羅は刀を斜め下に構えると、目を瞑り集中した。

二人の間は静寂、そして一触即発、水が張ったコップのように、何か衝撃が加われば始まる、張り詰めた空気が支配した。しかしその衝撃は外部の者によって加えられた、阿修羅の隣に現れる一人の男、得物は十字槍、ブルージーンズに白いTシャツといらフなスタイル、右半分には阿修羅の帯と同じ刺繡、それが示すのは仲間。

「神徳は護法神・名は毘沙門天、只今参上! テメエがルシファーと見た」

「空気を詠みなさい」

毘沙門天の乱入により、空気は一気に冷めた。

「面白い、阿修羅に毘沙門天とは、我也幸福だ」

「不幸の間違いだろ?」

「どちらでも構わない、天竜の巫女の血、それだけが欲しい」

毘沙門天は頭の上で槍を構えた、阿修羅は切つ先を斜め下に向け、ルシファーは切つ先を後ろに向け半身になる。

この戦いが神と悪魔の最後の戦いになるハズだった、しかしこいつ

もの屍を踏み越えた」の不毛な戦いの序章にしかすぎなかつた。

赤子を抱きながら歩くは阿修羅の部下の男、しかし命は死きていた、意識が朦朧とする中歩く、腰は折れ、膝を付き、赤子を投げ出して倒れ、命が尽きた。

Japan

男が動かなくなると赤子は大きな声で泣き出す、その瞬間、男の死体は光り始め、水のように溶けると、赤子の手首に巻き付き、腕輪と化した。

もう一人の男も赤子を持ち歩いている、この男も同じように倒れ、命が消えた。

倒れた男に赤子、通りかかった人は慌てて助けを求めた。

「誰か！ 救急車を呼べ！ 外人と赤ん坊が倒れてるぞ！」

男は日本人ではない、それは一目で分かる、しかし赤子は日本人に限りなく近い顔立ち、異様な光景である。

神に愛された赤子、悪魔を愛した赤子、この二人が世界を再び朱に染める。

1：神と悪魔（後書き）

新連載始まりました、『修羅の巫女』は続編モノです、最初は『靈鬼編』、もし良かつたらコメントや評価、アドバイス等を頂けると光景です。

2：興味

16年後

Japan Girls' high school

「天獅子小町、いざ勝負！」
あまじしこまち

場所は廊下、敵は空手の胴着にベリーショートの髪の毛、得物は拳。対峙するは天獅子小町、真っ黒な腰まで届く髪の毛、Yシャツのボタンを第三ボタンまで開け、短い灰色のスカートの下にはスパッツ、得物はこちらも拳、しかし戦意はゼロ。

「辞めませんか、木野先輩」
「つむせー、いざ勝負！」

空手部の主将こと木野は小町の言ふ事など無視して正拳突きを放つ、小町は首を左右に傾けるだけで軽々と避ける。木野は何発もの攻撃を繰り出すが、かすりもしない、腰に巻くは黒帯、それが示すは絶対的な力、そしてそれを上回る小町の身体能力。小町は正拳突きを手でいなすと、ミドルキックで木野を一撃で仕留める。

「はあ、また保健室か」

小町は肩に木野を担ぐと保健室に向かう、口々は3階、突き当たりにある階段を一番下、1階まで降り渡り廊下を通る、突き当たるは体育館、体育館の隣は剣道場。

そこに佇むセミローングの少女、袴に胴着、胴と垂と小手を付け、面

はつけていない、得物は竹刀、その手に持つもう一本の竹刀を小町の前に投げる。

「小町さん、今日こそは勝たせてもらいます

「はあ、またですか、柳井先輩？」

小町は体育館の横に木野を座らせ、地面に転がる得物を手にする、敵は剣道部大将柳井、柳井は正眼に構え、小町は切つ先を斜め下に向けて背筋を伸ばす、凛と立つその様は不動の真理、小町は動かず相手の攻撃を待つ。

「面！――！」

柳井の面を体を横に動かし避ける、すれ違ひ様に胴を打ち抜き再び構えなおす、勝敗は歴然、しかし引き下がらないのが柳井。再び面を打とうとした柳井の竹刀を弾き、体を一回転させて背後に周りこみ、後頭部を打ち抜き気絶させる。

「はあ、増えた」

木野を肩に担ぎ柳井と竹刀を脇に抱えて保健室に向かう、体育館から保健室は約5m、眼前に広がるゴール。

小町は足で保健室の扉を開け、慣れた手付きでベッドに一人を放る。疲れたとソファーに座り対峙するは保健室の先生、妖しい美貌とはだけた胸、ミニスカートはが更に妖しさを増す、得物は色気。

しかしここは生糸の女子高、男子禁制の教員から清掃員にいたるまで女性、色気はただの趣味、女色がいるのも女子高、保健室の先生と小町は絶好の相手。

「また喧嘩？」

「違います、一方的な果たし状を半強制的に執行されてるだけです
「小町ちゃんは運動神経が良いからねえ、それに……」

先生は立ち上がり小町の隣に座る、手の平で小町の顔を舐め回すよう触り、顎を掴み顔を自分に向けた、相手が男ならば手の平で踊つているだろ？。

「物凄く可愛い、食べちゃいたいくらい」

「はあ、私はノーマルです」

「でも男を知らないんでしょう？ 16歳になつてもキスもしたことない女の子なんてダサいわよ」

先生は小町の組んでる足を躊躇ぎ、上から見下ろす、小町ソファーに背を預け先生を見上げ、クール、悪く言えば冷めた目で見る。

「興味がないんです」

「つまらないわね」

先生は前髪を持ち上げ、小町の額に軽く唇を当てた、小町は顔色一
つ変えずに先生を下ろし、保健室を後にした。

一年の小町は女色の強いお嬢様学校のこの燈泉女子学園高等部（セ
ン女）で既に的になつていた、スポーツ万能でクールな風貌、お嬢
様達には男よりも興味を奪われる、そして強いが故に闘技系の部活
からの野試合がたえない。

しかし小町は女も男も闘技も興味がない、今までに興味を持つたモノなど皆無に等しい、所属している陸上部は体を動かすのが目的。
セン女は山を切り開いた土地に作った女子高、初等部から高等部、
グランドや競技場、寮やコンビニに至る全てが一つの敷地に納めら
れいる、故に皆初等部の頃から男に触れる機会が無く、男と話した

事すらない生徒が大半を占める。

プライベートは全てが自由なのだが、彼氏持ちといつのはほんの一握りの生徒だけ。

小町は部活が終わると一人の同級生に呼び止められた、真っ黒な髪の毛のポニー・テール、制服は小町よりちゃんと着ているが今時の服装である。

「小町、これから街に行かない？」

「何しに？」

「ちょっと買い物」

「まあ良いわよ」

小町の心許せる数少ない親友の志穂、小町の事を友達として見てる数少ない人物である、他の人間は憧れや好意の眼差しで見る、小町はそれがたまらなく嫌だった。

セン女の生徒が遊ぶ時は電車に乗つて遊びに行く、小町と志穂も例外ではない。

セン女の生徒は他校の生徒の憧れの的である、電車に乗つていても男性の視線が突き刺さる、二人はそんな事にも慣れ、全く気にしていない。

「小町つて養子だったよね？」

「うん、小さい頃道に捨てられていたのを孤児院に引き取られて、今の親に養子として迎えられた。」

今の親は子供が出来ないから世間を気にしてなんだけどね、厄介払いに全寮制のセン女に入れられたって訳」

小町は育ててくれた両親に感謝はしても、尊敬はしていなかつた、生きさせてもらつてているだけでそれ以上でも以下でもない、その事を引け目に感じた事も無かつた。

「健氣ねえ」

「そうでもないわよ」

「何かしんみりしちやつた！着いたから行くよー！」

志穂は小町の手を引いて電車を降りよつとした、しかし志穂が掴んでいるのは小町の手だけ、小町の手には志穂の手と一人分のバッグが掴まれていた。

街に行くと徐々に学生が集まり、活気を帯てき、その中でも一人の姿は人の目をひく。
志穂は誰もが認める美人顔、アイドルのような笑顔が周りの目をひく。

小町は真っ黒な長い髪の毛が凛々しさを際立たせる、ラフな制服とスパッツがボーライシューさを加える。
二人は服等を見て回つていた。

「ねえ小町、これ可愛くない？」

「似合つてるわね」

「小町も似合うんじゃない？」

志穂は自分に合わせてた服を小町に合わせてみた、志穂はそれを見

るところはしゃいで喜んだ。

「小町可愛いよー。」

「私はいいよ。」

「何で？小町も女の子っぽい服装すればもっと可愛くなるよ。」

小町は、も、というのが引っ掛けたが、あえてシッコリはしなかつた、志穂が自分の事を可愛いと自覚してるのは、小町も知っていたからだ。

「何で可愛いしないの？」

「他が騒ぐし私の趣味じゃないから」

「ええ、つまんない」

「はあ、私は志穂の着せ替え人形じゃないのよ」

「へへへ、すみません」

志穂は頭を搔きながら舌を少し出す、そのまま志穂は手に持つていた服と一緒にレジに向かった。

志穂と小町は人通りが少ない道を歩いている、これから志穂はバイトで帰り道と被らせるために、あえて人通りの少ない道を選んだ。二人は楽しそうに話していると止まる小町、そして電柱を見る、その表情を見て志穂は小町の後ろに隠れた、志穂には電柱しか見えないが小町が見ているモノが何かは知っている。

「小町、いるの？」

「子供、泣いてる」

小町には靈がハツキリと見える特異体質、この事を知っているのは

志穂ただ一人。

小町には何も出来ないのでその場から立ち去ろうとした。

その時、小町の向かう先には白いロングコートを来た男性、右の裾には長い口を覆う髭を生やし、パーマのかかつた長い髪の毛の中世以前の初老の男性の刺繡、長い髪の毛に冷たい瞳。

その男性は見た途端、小町は動けなくなつた、男性は一人を無視して靈の前に立つ、志穂は何ともなく小町にずっとしがみついている。男性は袖を捲るとそこからは不気味な腕輪が現れた、その腕輪の中にある赤い宝石のようなモノに触れる、その瞬間銀色の液体のようなモノが現れ、得物と化す、得物は大剣。

大剣が現れたのと同時に靈は歪な形をした化け物と化した、小町はあまりの光景に指一本も動かない。

男性は大剣を構える事もせずに一瞬で化け物を切り裂く、化け物は血を吹き出して消えた、男性の大剣も同時に消え、何事も無かつたかのように歩き去つた。

小町は緊張の糸が切れ、その場に座り込んだ。

「小町！どうしたの！？」

「志穂は今の人見てなかつたの？」

「人？誰もいなかつたよ」

小町は人と靈の区別は出来る、今の男性は確かに人間だ、しかし何故か志穂には見えない、小町は男性に興味を抱いた。

「志穂ゴメン、私用事思い出した」

「あつ、小町！」

小町は志穂を置いて走り出した、男性を追いに、方向は分かる、それにあれだけ派手な服は他にいない。

小町は大通りに出ると小町は一発で白いコートの男性を見つけた、異様な光景だが誰も振り向かない、肩が強く当たつても何も言わない、小町はその光景に疑問と興味を抱いた。

小町はバレンタインのように自然を装い後ろを付けた。

「（はあ、私ストーカーみたい）」

小町は自分が悲しくなった、しかし始めて他人に感じた興味、それを封じる事ができなかつた。

男性は駅に入つていく、しかし男性は改札に切符を通さず、駅員の横を普通に素通りした、小町は駅員がよそ見していたのと判断して、一番安い切符を買って男性を追い掛けた。

駅のホームは禁煙なのに男性はタバコを吸つてゐる、駅員は見て見ぬふり。

「（おかしい、この人絶対におかしい、服装も周りの反応も。もしかして私つてヤバい事に首突つ込んでる？）」

小町は必死に目の前の光景を理解しようとしたが可能性が思い浮かばない。

電車が来ると男性はタバコを吸つたまま電車に乗り込んだ、男性はボックスに一人で座り、前の席に足を置いた、小町はボックスの隣の二人掛けの席に座つて、男性の行動を観察する。

「（非常識な人、でも不思議な人）」

暫く観察していると頭をつけていたボックスの背持たれに強い衝撃が加わつた、小町は頭を付けていたために、頭に痛みが襲う、男性は足を置いてる側の背持たれを蹴つた

『おい！女』

「（英語？もしかして日系とか？）」

『英語しゃべれねえのかよ、こつちはこれしか知らないのに』

『喋れるわよ』

セン女では英会話に力をいれているので、小町は英語が話せた、外国人教師にネイティブに近いと言われたくらいだ。

男性は小町の前に立ち、壁に手を付けて覆い被さるように見下した、小町は見上げる、冷たい二人の目が睨みあう。

「これやるから着いて来い」

男性はポケットからネックレスを取り出した、そのネックレスを小町が持つた瞬間、ネックレスが強く光り液体のようになつて小町の手首に巻き付き、腕輪と化した。

「やつぱりな」

「やつぱりって何よ！？何なのコレ！取れない」

小町は腕輪を必死に外そうとするがビクともしない、そしてこの腕輪、男性の腕輪と同じモノ。

「とりあえず来い」

「えつ？あつ…ちょっと…」

男性は無理矢理小町の手を引っ張り電車を降りた、小町の手を引く男性は再び改札を通らずに駅員の隣を通り、その時小町は駅員と目が合つたように思えたが、何故か見られていないように思えた。

男性はひたすら小町の手を引いて歩いている、何が目的なのか、何がしたいのか小町には理解出来なかつた。

「ちょっと…貴方誰なの！？」

小町は無理矢理手を振りほどいて、その場に立ち止まつた、感情を表に出さない小町が怒る事など皆無に等しい。

「神徳は護法神・名は帝釈天たいしゃくてん、これで満足か？」

「護法神？帝釈天？」

小町には男性もとい帝釈天たいしゃくてんが言つてゐる事が理解出来なかつた、そして小町の中で帝釈天たいしゃくてんは痛い人の部類に入つたのは言つまでもない。

帝釈天たいしゃくてんは山の中に入ると立ち止まつた、小町にも立ち止まつた理由が理解出来る、そこには男性の靈がいる。

「見えるな？」

「見えるわよ」

「コイツらは武器を向ければ本性を現す」

「武器？」

「得物の事だ」

「はあ、そうじゃなくて」

「見てる」

帝釈天たいしゃくてんは腕輪の宝石に手を当てた、その瞬間、腕輪からは銀色の液体が現れ得物、大剣と化す、そしてその瞬間靈が化け物と化した。小町は先ほどと同じ光景に後退りして、身構える。

「何コレ！？」

「ダークロードの一種だ、これは靈の部類、見れば分かるな
分かる訳ないでしょ！早く倒してよー！」

「頼んだぞ」

帝釈天たいしゃくてんは手を上げて立ち去る、帝釈天たいしゃくてんの進む先には丸く黒い大きな穴が生まれ、その中に入つて行つた。

化け物は敵を小町に定める、得物は大きな爪、身体能力その他は未知数。

化け物は手を大きく振り上げ、爪を剥き出しにして小町に振り下ろす、小町は何とか震える体を動かして避けた。

「（何よコレ、任したつて無理に決まつてる……、ちょっと待つて、この腕輪、帝釈天たいしゃくてんとか言う奴のと同じ、ていうことは私もあるわデッカイ剣が使えるの？ダメ元ね、やってみるだけの価値はあるわ）

小町は腕輪の宝石に手を当てた、何か武器になること願つて。

2：興味（後書き）

遂に本編が始まりました、主人公の小町がこれからどうなつて行くのか？楽しみにしてて下さい。

それとコメントを下さりありがとうございます、まだまだ評価など待ってますので皆さんよろしくお願ひします。

3：ホーリナー

Japan Mountain path

小町は腕輪の宝石に触れる、帝釈天たいしゃくてんと同じように銀色の液体が現れた、細くて長く変形し得物と化す、得物は長刀、小町の背よりも長い長刀。

小町は驚き長刀を見回す、何故か手にしつくりとくる、昔から使いこんだような握り心地、腕のように使い易い。

小町は切つ先を斜め下に向け背筋を伸ばし凛と立つ、目を閉じて全てを目の前の化け物に集中する。

地面を蹴る音を聞き小町は目を見開く、化け物は振り上げた爪を小町に向かつて振り下ろす、小町は頭上で爪を防ぎ弾こうとした、しかし爪はあっさりと切れ、大きな弧を描き切つ先が斜め上を向いた時、化け物の肩口から脇腹にかけて長刀を振り抜く。化け物のは綺麗に斬れ、血を吹き出して消えた、残ったのは小町と手に持つた得物のみ。

「何コレ、刀？」

小町は長刀を目の前に掲げて眺めた、小町は目の前の化け物を軽々と斬つたその刀を、見た目よりも軽く、切味は異常なモノ。

小町が呆気にとられていると後ろから足音と話声が聞こえた。

「緊那羅きんなら、この辺だよな？」

「はい、最後に信号が消えたのは…………、そここじるのは誰！？」

「（はあ、また英語？）」

小町は後ろの女性、緊那羅の声に肩をすくめた、長刀を持つた小町も異常だが、先ほどからの変な名前、帝釈天や緊那羅も十分異常である。

「はあ、また変な名前」

「新入りか？名前は？所属の隊は？」

「名前は天獅子小町、それ以外は正しい答えが思い浮かばない」

「一般人！？貴方、ホーリナーじゃないの？」

「ホーリナー？」

小町は異様な名前の数々に頭の整理がつかないでいた、難しい人の名前、ホーリナーなる者、新入りや隊、小町にはそれが変な団体という事しか分からなかつた。

「もしかして新しいホーリナーじゃないのか？」

「そうかもね」

「貴方達で納得しないで、私に分かるように会話して」

小町は今の状況に着いていくので精一杯だった、目の前に化け物が現れ、武器を持ち化け物を斬つた、何故自分がそのような状況に陥つたのか、それが知りたかつた。

「俺達は『Vatican churchman subjugation organization』、日本語に直訳すると『バチカン聖職者討伐団』、俺達は『VCSO』って呼んでる、神父やら牧師やら神主がいるだろ、その武闘派集団だ、『VCSO』は一国に一支部ある、俺達は日本支部員。」

俺達の目的は人間界にさ迷う、……日本では靈や鬼、妖怪とかの化け物等を文字通り討伐するのが目的だ、化け物は総称して『ダークロード』って呼んでる、外国だと龍とかその他亞人、精霊なんかも

場合によつてはダークロードだな。

次はホーリナーについてだ、ホーリナーツてのはこの腕輪、正確には『ディアンギットの腕輪』に選ばれし者、つまり神に選ばれた者の総称だ、例外はあるがな、この腕輪を着けている以上『VCSO』の加入が絶対だ、拒否した場合は強行手段をとらせてもらひ。最後に自己紹介だ、俺は迦樓羅からる、コイツは緊那羅きんなり・神徳は音楽神、小町ちやんだつけ？君の、天獅子小町てんじし こまち、つて名前は今日で捨ててもらうから、その事はまた本部で、本部つて言つても俺達が、本部つて呼んでるのは正式には日本支部なんだけどね。じゃあ質問や要望、コメントから愛の告白まで何でも聞いちゃうよ

真面目な顔で説明していた迦樓羅からるが、一瞬でおちゃらけモードに入した、小町はそれをシカトして今までの話を整理する。

「VCSOはバチカンが本部なの？」

「そう、表向きはキリスト教だけど、神の總本山みたいな感じだね、親分はローマ法王ね」

バチカンはキリスト教で有名な場所だが、裏ではこんな武闘派集団が構えている、小町は今ので余計に頭がパンクに近付いた、恐らく今までの教養を全て無くしてから聞かないと頭には入らないだろう。

「靈まで殺す理由は？お坊さんとかに任せれば良いじゃない、それに49日とかお盆とかいう可能性もあるじゃない」

「それは宗教的価値観だろ、49日もお盆も仏教だろ、天国も地獄もありやしない、だから人間界にいるのは全てがダークロードと判断する。

お経や塩、聖水とかその他諸々は一応効果はある、でも人間にとつての公害みたいなもんだ、嫌がるだけで殺せはしない、希に人間が襲われる事もある、最終的に処理するのは俺達ホーリナーだ」

小町は今までの常識を捨て去り、やつと迦楼羅の言ひ事が頭に入るよになつた、しかし頭が痛くなるような内容に変わり無い。

3人は小町を日本支部に送るついでに小町の質問に答える事にした、日本支部は京都にある、他の国もその国の宗教の中心地にあることが多い。

移動手段は車、異常な速度で走る車に小町は不安を感じていた、法定速度を軽々越している、警察に捕まる事が不安だった。

「警察になら捕まらないよ」

「えつ？」

「俺達は神に限りなく近い存在だ、そんな人間の記憶にいちいち残る事してたら今頃宗教は潰れてる、この腕輪を着けている限り記憶には残らない、便利なもんだろ？」

「悲しい、友達も親も全てを失うつて事でしょ？」

「みんな辛い、私も記憶があるだけ最初は辛かつた、迦楼羅は記憶は無いがな」

小町は驚いて運転席に座る迦楼羅を見た、迦楼羅の顔はいたつて普通、後ろの座席で女らしからぬ格好で寝転がる緊那羅も普通だ。

「さつき言つただろ、入団しないなら強行手段で連れていくつて、記憶を消して人生をリセットするんだ、多分俺は入団を拒んだんだろうな」

「でも、そっちの方が楽そうね」

「そもそもわよ、記憶の消し方は脳の細胞を封印するの、だから短命になるし戦闘能力も下がる、だから迦楼羅は私より弱い」

小町は複雑な心境だった、コレからなるであろう先程のよつた戦いの毎日、その世界に興味を抱けたが、前の生活にも未練がある、それなら記憶を無くした方が楽かもしれないといふこと。

「記憶が無いのは辛いぞ、俺の知ってる世界はこの生き死にの世界だけだ、他を知らない、有つて邪魔になるよつたモノじゃないよ、記憶つてのは」

「分かつたわ」

小町は今も過去も背負う事に決めた、迦樓羅の顔かろいがとても悲しい顔をしてたからだ、こちらの世界に興味があるのなら未練もいつかは無くなる、その時まで我慢した方が楽だらう。

「じゃあ質問に移るわよ、この腕輪は何？」

「IJの腕輪は俺達の武器でありホーリナーの証、コレは腕を切つても離れないからな、これから出てくる武器は無限物質だ」

「無限物質？」

「そう、人間界のモノは全てが有限物質だ、髪の毛や傷などが回復するのは他のモノをその形に変えてるだけ。

でもこれは違う、折れたら再生する、武器によつては一度にいくつも出せるもある、普通は一度に一つの武器だから。

それにこの腕輪は絶対に壊れない、ディアンギットつていう神様の片割れらしが、本當かどうかは分からぬけどね、それに俺達の武器も人間界のモノでは破壊出来ない、ディアンギットの鉄はディアンギットの鉄でしか壊せない」

長い話で緊那羅きなんのは既に寝ている、もう夜も遅い、小町は寮に電話を入れようとしたが自分の存在が消えた事を思い出し、悲しみが押し寄せた、志穂も小町の事を覚えていない、その代わりに隣にいる迦か

楼羅なる男性と、後ろで寝ている緊那羅といつ女性、この二人が仲間。

「じゃあこの刺繡は？」

小町は迦樓羅の真っ白なTシャツの右側にある黒い刺繡を指差した、長いパー・マの髪の毛に、口を覆う長いヒゲ、中世ヨーロッパの初老の男性、恐らくこれも神の一種だろう、帝釈天のコートにも同じモノがあつた。

「このおっさんはカミウマーマーン、神様の中の神様みたいなもんかな、俺達のお父さんとかそこらへんじゃない？」

白い身に付けるモノにこの刺繡を入れるのが決まり、小町ちゃんも本部に行つたら希望聞かれるよ、今から決めときな

迦樓羅はハイアムの髪の毛に、真っ白なTシャツの右側に刺繡、黒いジーンズといつらつなスタイル。

一方緊那羅は、和風のポニー・テール、真っ白な道着の肩から袖にかけて刺繡、紺色の袴といつ和風の風貌、小町は自分の動きやすい格好と、自分の好きな格好を考えていた。

そして先程から気になっていた事、帝釈天と緊那羅が名乗る前に言つたあれ。

「神徳って何？」

「神徳はその神が何の神かつてこと、例えばアフロディー・テとかは愛の神様だろ。

神徳がある奴は比較的に強いってのもあるし、ちなみに俺は無いけどね。

では問題、アヌウビスは何の神様だ？

「死神？」

「正解！何となく分かつたでしょ？」

「死神までもホーリナーなんですか？」

「死神って言つてもいろいろあるしね、‘死’そのものを司る神や、‘死’を操る神、ワルキューっていう女神も死神の部類に入るし」

小町は何となく楽しくなつてきた、自分が足を突っ込んだ世界は愛や音楽など綺麗なモノを司つてると考えると。

「緊那羅は音楽神、帝釈天は護法神みたいな感じか、私はなんだろ？」

「帝釈天の事知つてるのか！？」

「うん、私にこの腕輪になる前のネックレスをくれた人、何か黒い穴に消えて行つたけど」

「黒い穴！？ちとヤバめだな」

迦樓羅は携帯を取り出した、電話をかけると真剣な顔で話あつてい

る、小町は自分が大変な事を行つた事を理解出来た。

迦樓羅は携帯を閉じると後ろの緊那羅に投げつけた、緊那羅は明らかに怒つているが、迦樓羅は無視して話だした。

「帝釈天が悪魔に堕ちた」

「やつぱり」

「帝釈天が悪魔つて何？あの人は腕輪着けてからホーリナーじゃないの？それに人なのに悪魔？」

「まだ説明してないのか？」

迦樓羅は苦笑いを浮かべながら謝つた、不機嫌な緊那羅は背を預けながら小町を呼んだ。

「悪魔つてのは神に愛された私達みたいな奴が神を裏切ると悪魔に

なる、外見的には変わらないけど私達の敵だ。

厄介な奴が裏切ったな、帝釈天たいしゃくくんは日本支部で最強だ、『神選10階』っていうホーリナー最強の10人にも呼ばれた化け物、それが悪魔に堕ちたって事は

「最悪の場合16年前の一の舞いだな」

小町はこれ以上首を突っ込まない事にした、まだ新人の自分には関係ない事、そう思っていた、日本支部に着くまでは。

3：ホーリナー（後書き）

やつと本題に入つて来ました、今回はじの作品を読むタメの予備知識みたいなモノです。

評価やコメントを頂けるとありがたいです、どうぞこれからも修羅の巫女をよろしくお願ひします。

Japan VCSO Japan branch office

小町が連れて来られたのは、山の中にあるコンクリートといつよりは石で出来た塔、いかにも怪しいが、この山に普通の人間は近付かない、これも神の力の一種だ。

中もゴツゴツとした感じで、一階には受け付けのような場所とエレベーターの乗り口しかない、エレベーターは剥き出しになっていて遺跡のような印象だ。

エレベーターに乗り最高層に行くと、そこだけは一つの層がまるまる部屋になっている、エレベーターを降りるとすぐに階段があり、10段ほど登るとカーペットがひかれたお偉いさんの会議室みたいになっている、一番奥には大きなデスクに大きな椅子、反対側を向いていて顔は見えない。

「ボス、新入り連れてきたよ」

「ボス？」

「ああ、正確には日本支部長の金色孔雀って名前なんだけど、本人がボスって呼べだつて」

ボスこと金色孔雀は椅子を180度回転させて小町を睨んだ、襟が高い白いコートの襟に刺繡、逆立つた銀色の髪の毛に銀のフレームの眼鏡。

金色孔雀は小町を自分の元に呼んだ、デスクの目の前まで来た固まつた小町の前に、デスクの上に立ちしゃがむと同時に顔を近付け睨んだ、この時点で小町の金色孔雀の印象は、怖い人。

「迦樓羅」

「はい？」

「！」の娘メチャメチャ可愛い！俺気に入った！』

金色孔雀はテスクの上にしゃがんでも小町を抱き締めた、小町は状況が理解出来ずにただ呆然とするのみ。

「あつ、緊那羅、君も可愛いよ」

「うるさい、女つたらし」

「酷いなあ、小町ちやんだつけ？バイバイ小町ちゃん」

「えつ？」

小町は今の金色孔雀の一言が理解出来なかつた、強制入団なのに、バイバイ、は矛盾である。

「バイバイって何ですか？」

「、小町ちゃん、とはお別れ、今日から神様の名前を名乗つてもらうから」

金色孔雀はテスクの上のボタンを押すと部屋全体が暗くなつた、そしてモニターが降りてきてモニターが光りだす。

映つたのは金髪オールバックで金色孔雀と同じコートを着た外国人男性だつた、チーズケーキを頬張つたまま椅子に座りひょうきんな顔でモニターに映る。

「はあ、迦樓羅、VCSOにはこんなのがしかいないの？」

「奇人変人の集まりだな、俺達見れば分かるだろ？」

「私を貴様と一緒にするな」

緊那羅は迦樓羅の頭を思いつきり叩いた、いや、殴つた、迦樓羅は

部屋の隅で頭を抱えて悶絶している。

「久しぶり！」

「金色孔雀つて事は日本か」

「カミウムマーク使える?」

一 大丈夫だ。 新入りか?」

モードの娘

金色孔雀は小町を前に出した、画面に映った外国人男性は画面いつぱいに顔を近付ける、チーズケーキを食べるクチャクチャという音が大音量で聞こえ、小町はため息を一つついた。

「金色孔雀」

「何？」

「コイツ超可愛いい！神選10階に欲しい！」

ダメ!!」の娘は日本支那に置こむるお！」

二人の男性はクネクネと奇妙な動きをしながら小町を取り合つてい
る、小町は頭が痛くなり、緊那羅きんならに助けを求めたがスルーされた。

「じゃあ診断するから頼んだよ」

「了解了解！じゃあ『』に得物を解放して乗つて」

小町は丸い板のような乗り腕輪の宝石に触れた、長刀が現れそれを握る。

「じゃあ行くよ！」「キャッ！何これ？」

小町の足元が光り始め、全身を光りが包みこんだ。

暫くの間光り続けると光りは治まり小町は開放された、小町は板から降りるとモニターでは男性がパソコンで何かをしている。

「金色孔雀（こんじきくじやく）、帝釈天（たいしゃくてん）といい、もしかしたら大変な事が起るかもな「何何？どんな名前？」

モニターの男性はパソコンのキーボードを押すと、画面に文字が現れた。

《戦闘神・阿修羅・夜叉丸》

小町以外の全員が驚いた、あのおちゃらけていた金色孔雀（こんじきくじやく）までも険しい表情をしている、迦樓羅（かるのら）は苦笑いを浮かべ、緊那羅（きんなら）は呆れた表情だ。

「もしかして阿修羅（あしゅら）？」

「いや、発音が違う阿修羅（あしゅら）だ」

「それに夜叉丸って、こんな事あり？」

「ちょっと、私に説明してよ」

モニターの男性が近付いてきた、チーズケーキは置いて、本田一番の真剣な顔だ。

「君の名前は今日から阿修羅（あしゅら）だ、神徳は戦闘神、そして得物の名前は夜叉丸。

これは16年前に起きた事件に登場するメインキャラクターにそつくりなんだ」

「事件？」

「それは俺が話とくよ、バイバイ！」

金色孔雀はモニターを切つて部屋を明るくした、そして金色孔雀椅子に座り、両肘をデスクにつき手を合わせて顎を置いた。

「16年前、悪魔と神の大きな戦争が起きた、その戦争で悪魔は尽きたが神選10階は壊滅的打撃を受けた、VCSCO史上最悪の戦いだ。

その時の戦争の引金となつたのが『天竜の巫女・阿修羅』だ、目的は分からぬが悪魔は阿修羅を求めた、天竜の巫女の情報は何も残っていないので詳しい事は分からぬがな。

そしてその阿修羅の得物の名前は『夜叉光』、長刀だ、君に全てがそつくりなんだよ」

小町もとい阿修羅は絶句した、本人も少なからず分かっていた、これが意味するのはただ事ではない、自分が何か大きな流れに巻き込まれている事が分かつた。

「でも私は何も知らない、天竜なんかも聞いた事がない、タダの偶然でしょ？」

「そうだと良いね」

金色孔雀はスキップしながら阿修羅を見回した、その光景は実に邪魔。

「あのモニターの人は誰ですか？それとカミウムマーンって神様の名前ですよね？」

「あの人は通称『元帥』VCSCOの最高指令官、そして名前は『カミウムマーン』、カミウムマーンは最高指令官の名前でもあり、さつきの神を識別するマシーンの名前もある、みんなあの人のことは元帥、識別機の事をカミウムマーンって使いわけてるけどね」

阿修羅は「」が徐々に軍隊に思えてきた、元帥に指令官、完璧に軍隊用語である。

「阿修羅か、ボス、帝釈天がいなくなつたから阿修羅は俺達の隊だろ？」

「そうだね、迦樓羅が隊長で良いでしょ？」

「私は隊長向きではない」

阿修羅は迦樓羅と同じ隊、毎日この3人で一緒にダークロードと戦う事に、阿修羅は完全に抜けられなくなつた。

「迦樓羅、まだまだ先の事だ、私達はまだ一人だけだ」

「どういう事？ 試験でもあるの？」

「違うよ、阿修羅にはこれから修行をしてもらう、進み具合にもよるけど大体3ヶ月、靈とみつちり戦つてもうつよ」

阿修羅は練習や努力、そういう地道なモノが大つ嫌いだった、実戦あるのみ主義の阿修羅には苦痛な3ヶ月が約束された瞬間だ。

「でも靈と戦うのと実戦に出るのは変わらないんじゃない？ビリせ外に出るんでしょう？」

「いや、この下に道場があつてそこに貯めてるよ、戦う時は一匹ずつだけどね」

阿修羅は地獄への階段を登り始めた、密閉空間で体を動かすのが嫌いな阿修羅は、開放感が無いとノイローゼになる。

しかし、日本支部のホーリナーは戦闘神の力を思い知る事になる。

4：阿修羅（後書き）

『バイバイ小町ちゃん』の理由が分かつて頂けたでしょうか？ ようこそ阿修羅^{あしゅら}みたいな感じですね、今後は阿修羅^{あしゅら}で話が進みます。評価、コメントなどを頂けると感謝です、作者の励みとなりバネとなるのでお願いします。

5：双子

1ヶ月後

Japan VCSO Japan branch office

真っ白なYシャツの袖を3回折り七分にし、第3ボタンまで開けている、それに合わせて白いカミウムマーンの刺繡^{あしゅう}が入ったネクタイ、黒い制服のスカートの下にスパッツ、それが阿修羅の団服。本人曰く『制服ほど動き易く様になるモノはない』らしい。

阿修羅は道場に籠つていた、得物は夜叉丸、石に囲まれた広さだけが取り柄の部屋。

対峙するは靈、得物は鋭い爪、形だけが人間で風貌はお世辞にも人間とは言えない。

阿修羅はイライラしていた、毎日毎日ほとんどの時間をココで過ごし、詰まらない相手とひたすら戦わされる、何度も金色孔雀に不満をぶつけたがノラリクラリと流される。

その金色孔雀は上から窓越しに眺めている、端から見たら阿修羅はモルモット。

「阿修羅、あと20体で終わりだよ、頑張れ」

「はあ、全部いっぺんに出して、多少は運動になるでしょ」

「大丈夫? 下手な鉄砲数撃ちや当たるつていう

「うるさいわね、私がそつしきつて言つてるの、言われた通りにして

「ハイハイ、戦闘神の神徳は伊達じゃないですねえ」

金色孔雀^{こねいじきくじやく}がボタンを押すと20体の靈が現れた、その光景に動じる事無く、むしろ口角を上げて喜んでいるようにも思える。

阿修羅は背筋を伸ばして凛と立つ、切つ先は斜め下、目を瞑り全神経を戦闘に注ぐ。

5体の靈が爪を振り上げ飛びかかってくる、阿修羅はギリギリまで引き付け、自分の間合いに入った瞬間体を一回転させて一刀で5体を斬った。

目の前から走ってきた靈は突き刺し、後ろから来た靈は逆手に刀を持ち変え、そのまま脇を通して突き刺した、横から来た靈は持ち変えるのと同時に斬り、反対側の靈はその遠心力を殺さずに斬った。残る靈は11体、9体倒した今でも汗一つかいていない、阿修羅の中ではこれは運動にもならない、それが阿修羅の機嫌を損ねている。

「一体ずつ来ないで全員で来なさい、じゃないと私がつまらない」「怖いねえ阿修羅、戦うのは悪い事じやないけどハマり過ぎちゃダメだよ」

「はあ、違う、私は運動したいだけ、コイツらその欲求すら満たせない、欲求を満たす事の何が悪い?」

「まあいいや、それなら全員で行くよ、頑張つてね」

何か超音波のようなモノが発せられると靈が一斉に襲いかかってきた、阿修羅は口角を上げて前に走る、一回で3体を斬りそのまま踵を返した、それと同時に2体を斬り残りは6体。

阿修羅が半身になり突くと2体を貫き、そのまま横に振ると1体を巻き込んだ。

靈が爪を剥き出しにして振り上げようとしたとき、胴の位置で受け止めると、そのまま強引に切り裂き回転と共に残りの2体も斬った。

「凄い凄い、修羅とよく言つたもんだね」

「はあ、讃めるならもう少し手応えのある奴を連れて来なさい」

「これでもステージ3なんだけどな、でもコレだけは知つてて、ステージ4から全く別世界、正直強いよ」

阿修羅は多少興奮している、強い者を求める興奮よりも更に体を動かせる楽しみ、それが周りからは戦い好きに間違われてる。

「靈の最強は？」

「ステージ5、日本でコイツを倒せるのは緊那羅と毘楼勒叉毘楼博叉ペアくらいかな、それくらい強い、神選10階になる条件の一つになるくらいだからね」

阿修羅は軽く汗を拭くと道場を出ようとエレベーターに乗ろうとした、しかしエレベーターは使われていて下から上がってくる、阿修羅はそれを待つているとエレベーターには既に人が乗っていた。

「なんだ、阿修羅か？」

「阿修羅だ、毘楼勒叉、阿修羅がいるよ」

「つむせえな、黙れ毘楼博叉」

毘楼博叉と毘楼勒叉は双子である、顔は全く同じなんだが性格が正反対、キツイ性格の方が毘楼勒叉、優しい性格の方が毘楼博叉、二人は個々の能力は高く無いが一人一緒にだと神選10階レベルまで跳ね上がる。

「阿修羅、僕達と戦え、丁度暇してたんだ」

「貴方達じや強すぎるでしょ」

「僕達じや不満？僕は阿修羅と戦いたいんだけどなあ」

「はあ、やるわよ、運動にもなるし」

阿修羅達は腕輪に何かを付けた、腕輪を覆うようなモノ、コレを付けるとディアンギットの腕輪は靈体に当たらなくなる。

靈体とは全ての生物と靈にあるモノ、人間はこの事を魂と呼んだり

する、靈を斬ると出る血は靈体が吹き出しているから。

「毘楼勒叉、毘楼博叉、いくら阿修羅が強くなつたとは言え、まだ任務に参加してないんだよ、ちょっと無理があるでしょ」「ひるせえ女つたらし！テメエは見てろ！」

日本支部長とは名ばかり、実質権限はゼロ、強く言われると萎縮してしまう。

毘楼勒叉と毘楼博叉は同時に腕輪に触れた、腕輪から銀色の液体が現れ、得物と化した、得物は2本のハンドアックス、小振りで持ち手も細い、名は毘楼勒叉が右京、毘楼博叉が左京。阿修羅も腕輪に触れる、得物は長刀、名は夜叉丸。

「行くぞ！」

阿修羅はいつものように構えた、一人同時に地面を蹴り、左右に別れた、阿修羅は毘楼博叉の方に跳ぶ、横薙に斬るが毘楼博叉は軽々と防御する、阿修羅は毘楼博叉を軸にして背後を取つた。

しかし毘楼博叉はしゃがみ、上からは毘楼勒叉が右手を振り上げて

いる、阿修羅は頭の上で防ぐが右から毘楼勒叉の左手が飛んできた。

「取つたあ！」

「甘いわね」

阿修羅は毘楼勒叉を直接蹴り飛ばした、毘楼勒叉は宙に浮くが毘楼博叉が受け止めた。

毘楼勒叉と毘楼博叉は、お互いのハンドアックスの刃の付け根を引つかけた、そのまま走つて阿修羅に突つ込む。

「行くよおー！」

「おつー！」

毘楼博叉が軸となり毘楼勒叉を大きく回して投げ飛ばした、毘楼勒叉は阿修羅の頭上を飛び越え着地する、それと同時に阿修羅は横薙に斬りかかるが、受け止められた。

「阿修羅、僕達の勝ちだな！」

「はあ、当たり前でしょ、2対1なんだから」

阿修羅の首元には毘楼博叉のハンドアックスが突き付けられている、傷付かないとはいえ振り抜く必要性が無い。

「毘楼勒叉、僕は死んだよ」

「どういう事だ！？刀はこっちに向いてるぞ！」

「それは俺が説明しちゃうよ！阿修羅は毘楼勒叉を斬るまえに毘楼博叉の足を斬つてるんだ、だから毘楼博叉は戦闘不能。

毘楼勒叉も分かるだろ、タイマンでやつたら阿修羅に勝てない事くらい

毘楼勒叉は右京を投げ捨て、その場にふてくされて座つた、そしてイライラしてゐる毘楼勒叉を毘楼博叉が慰める、それがいつもの光景だ。

「阿修羅！調子乗るなよ！僕達は本気を出してないんだからな！」

阿修羅は毘楼勒叉の前にしゃがみ、毘楼勒叉の頭に手を置いた。

「分かつてゐるわよ、子供だけど氣を使つてくれたのよね？」

「僕は子供じゃない！13歳は立派な大人だ！」

「そうね、大人よね」

阿修羅は汗を拭いて道場を出た、二人との戦いに笑が溢れそうなの
を抑えて。

阿修羅がいるのは脱衣所、汗を洗い流すタメに風呂に入る、先客が
二人、阿修羅は団服から誰だか判断出来た。
中に入ると髪をほどいた緊那羅と、元気な女の子が一人、女の子は
阿修羅を見つけると胸に飛び込んで来た。

「阿修羅！アタシは会いたかったぞ！」

「ありがとう、摩和羅女」

摩和羅女と呼ばれた女の子、短い髪の毛に真ん丸の目、そして屈託
の無い笑顔、若干歳相応に見られない事がある。

「阿修羅、今日の訓練はどうだった？」

「つまらない、双子が来なきや運動にもならなかつた
「双子ちゃんと戦つたのか！？どうだった！？」

「一応勝つたわよ」

「本当に？貴方どれだけ強くなるのよ」

「阿修羅は凄い！アタシも見習わなくてわ！」

阿修羅は摩和羅女を引き離し体を流した、阿修羅が髪の毛を洗つて
いると摩和羅女が背中を洗つてくる。

「阿修羅は頑張った！だからアタシからのご褒美だ！嫌か？」
「ありがとう嬉しいわよ」

阿修羅は気にせずに続けた、摩和羅女は背中だけではなく全体を洗い始める、阿修羅はまだ我慢し続けた。

「ちょ、ちょと摩和羅女ーそこは念入りに洗わなくていいー」「ダメだ！かか様が「口はよく洗えと言つていた！」

抵抗する阿修羅を見かねて？緊那羅が摩和羅女に耳打ちをした、その瞬間、摩和羅女の手が止まる。

「本当か？」

「本当だよ、阿修羅も喜ぶぞ」

「阿修羅が喜ぶのか！？それならやるぞー！」

摩和羅女の手は徐々に上に行き、胸で止まつた、頭を洗つている阿修羅に抵抗する手段は無かつた。

「ー、こりー揉むな！緊那羅ー何を教えたの？」

「谷間とかは蒸れるから洗つてやれと言つた」

「阿修羅、気持良いか？」

「摩和羅女、阿修羅は喜んでるよ、だからもつとひやつてやれ」

阿修羅は手で摩和羅女の手をどけようとしたが、緊那羅に手を捕ま
れ抵抗できなくなつた。

「あ、ちょ、ちょとーお願いーやめ、辞めてー」

「分かった、阿修羅がそこまで言つなら辞める」

「つまんないわね、摩和羅女、出るわよ。」

それと、今日はホーリナーが全員集まつたから貴方の歓迎会やるから、団服で食堂に集合よ」

毘楼勒叉毘楼博叉戦より汗をかいた阿修羅は、肩で息をしている、
それを横目に笑いながら風呂を出る緊那羅、不安になりながらも緊
那羅に手を引かれて摩和羅女が風呂をでた。

5：双子（後書き）

最近必死に書き置きを作つてます、学校が始まつたらあまり時間が割けないので今のうちに、目標としては毎日更新するので楽しみにしてて下さい。

評価、コメントもお願いします。

6：食事会

Japan VCSO Japan branch office

最後に食堂に着いたのは阿修羅あしゅらだつた、約一名を抜いて全てのホールナーが椅子に座っている。

座つていなあ一名は扉の隣で犬のように座り、阿修羅を見上げある、阿修羅あしゅらはあえて気にせずに席に座つた。しかし犬みたいな男性は阿修羅あしゅらに着いてくる、それを見かねてフードとサングラスの覆面男性まくめんが立ち上がつた、覆面男性は犬男性の隣に立ち見下す。

「摩侯羅迦まきゅうらか、席につけ」

「いやあ、阿修羅あしゅらは今日も可愛いよな、

摩醯首羅まけいしゅら、俺はコレで飯3

杯はいけそうだぞ」

「すまない阿修羅あしゅら、邪魔は排除する」

覆面男性まくめんこと摩醯首羅まけいしゅらは摩侯羅迦まきゅうらかの首元を持ち、そのまま持ち上げて摩醯首羅まけいしゅらと摩和羅まわいら女めのの間に座らせた、椅子に座つても犬座りは変わらない。

「じゃあ阿修羅の迦樓羅隊入隊祝いという事で

「ちょっと待て！阿修羅が俺の隊に入隊つてどういつ事？まだ一ヶ月しか経つてないよ」

「だつて阿修羅強いんだもん、個人だつたら摩醯首羅まけいしゅらと同じくらい強いよ」

全員驚きの表情を隠せなかつた、帝釈天たいしゃくてんが抜けて今の日本支部最強

は緊那羅、その次に摩醯首羅といふ順番だ、故にこの時点でトップ3に入っているという事。

「だから、次の迦樓羅隊の任務が終わつたら阿修羅は迦樓羅隊入り決定、異例の速さだけど大丈夫、本気じやないとはいえ毘楼勒叉毘楼博叉ペアを倒してくるから」

一名を除き驚きと納得の表情のオンパレード、その一名とは摩侯羅迦、待てが出来ず既に食事に手を付けている、身を乗り出してあちらこちらの食べ物を食いあさる。

「まあ犬が我慢を出来ないみたいだし、食べようか！」

その合図と同時に全員が食事に手を付け始めた。

迦樓羅は丁寧に色々な食材を取り、その隣から緊那羅に横取りされる、毘楼勒叉は毘楼博叉に取られて自分は王様気分、侯羅迦の暴走を止めつつついでに自分も食べている、修羅に取り分けてそこから自分も食す。

「摩和羅女、いつもこんななの？」

「そうだ、楽しいだろ、特に摩侯羅迦とかは楽しい」

「隊は3つだけ？」

「そうだ、アタシと摩侯羅迦と摩醯首羅の摩醯首羅隊、迦樓羅と緊那羅と阿修羅で迦樓羅隊、あとは毘楼博叉毘楼勒叉ペア」

計8人のホーリナー、金色孔雀もホーリナーだが戦う事はほとんど無い、緊急事態や人手不足の時にしか戦ないのでカウントされていない。

「アタシは阿修羅と同じ隊になりたかった、でも我が儘は言つてら

れない、「ここに来れば阿修羅に会えるんだから」「ありがとう、嬉しいわよ」

阿修羅は摩和羅女の頭を撫でた、摩和羅女は小動物のようになんて小さくなり満面の笑を浮かべる。

「阿修羅は姉様みたいだ！」

「緊那羅は？」

「緊那羅も姉様だ！アタシは嬉しい、入団出来て良かつた！」

「ここにいる者達はこの世界を楽しんでいる、阿修羅はまだ今までの生活に未練があつたが、摩和羅女のお陰でそれが無くなつた。」

「摩和羅女、嫌だつたら答え無いでいいわよ。
摩和羅女には記憶がある？」

「あるぞ、アタシは11歳までかか様と山で暮らしてた、でもかか様はある日病氣で死んでしまつた、その時にかか様はアタシの腕輪になつたんだ、だからアタシは悲しくない、いつもかか様と一緒にだ。それに一人だつたアタシを拾つてくれたココにも感謝している、アタシは今の生活が楽しい、阿修羅は嫌か？」

「ううん、私も楽しい、摩和羅女がいれば楽しいよ」

「そうか！阿修羅も楽しいか、それは良いことだ、うん！」

阿修羅の迷いは完全に無くなつた、摩和羅女の迷いの無い笑顔や、皆の楽しそうな顔、自然と阿修羅の顔にも笑が浮かんだ、溢れるような笑、それは今まででは無い事だつた。

突然、摩醯首羅の携帯が鳴つた、摩醯首羅は摩侯羅迦を抑えながら携帯に出る、あいすちだけの会話、そして携帯を閉じた。

「摩侯羅迦、摩和羅女、任務だ」

「了解！」

「ちよつと待つた！まだ満腹じやないぞ！ダメだ、戦えないぞ！」

「つるさい、大皿でも持つていけ」

摩醯首羅はそのまま摩侯羅迦を背中に抱えた、摩侯羅迦は大皿を抱えながら摩醯首羅の背中で食事を続いている。

「阿修羅、帰つて来たら話そう、アタシは阿修羅の事も知りたいぞ！」

摩和羅女も摩醯首羅の脇に抱えられ部屋を出た、阿修羅はそれを小さく手を振りながら見送った。

「毘楼勒叉、僕達も任務の時間だ」

「チツ、分かつたよ」

毘楼勒叉はふてくされながら部屋を出た、既に食べ終えていた他の4人も部屋を出る準備をする。

「阿修羅、今日は俺も用事があるからホーリナー一人になっちゃうけど大丈夫だよね？」

「特にやる事は無いでしょ？」

「モウマンタイ！暇だつたら科学班の人と言えば道場使わしてくれるから」「分かつた」

科学班、日本支部が集めた有能な科学者達、いろいろな乗り物や建物自体の機能、そして神の力の多目的な使用方法などを研究している。

阿修羅は支部の中を探索していた、一ヶ月間ひたすら道場にこもつていたタメに中を見る機会がなかつた、だから迷いながらも支部を見ている。

今は迷いながら行き着いた先は研究所、色々な乗り物やよく分からぬものが沢山ある、阿修羅は気にせずに中に入った。

「あ、阿修羅様！何かご用でも？」

慌てて科学班の人あしゅらが立ち上がり、阿修羅に向直つた、阿修羅はビックリして思わずお辞儀をしていく。

「ちょっと迷っちゃって、見ちゃダメですか？」

「大丈夫です、触らなければ見てください」

阿修羅は色々見て回つた、研究員の後ろに行くと研究員は手が止まり阿修羅に一礼する、阿修羅はそれがいやだった。

阿修羅はガラス張りの前で足が止まる、中には真っ赤なオートバイがあつた、阿修羅はそれに目を奪われ手をついて覗き込んだ。

「どうしました？」

「ヒツ！すみません！」

阿修羅は悪い事をした気分になり、いつのまにか謝つていた。

「いえいえ、コレは現在開発中のモノです」

「……綺麗ですね」

「それなら阿修羅様、使いますか？」

「良いんですか！？」

「はい、ホーリナーの方々に使ってもらつのが目的ですから、今から地下で乗つてもらつても結構ですよ」

「じゃあお願ひします!」

阿修羅はバイクと共にエレベーターに乗り込んだ。

阿修羅が地下の多目的スペースに入ると、上部のモーターに説明が映し出された、阿修羅はそれを全て理解しエンジンをかけた。

「…………凄い」

『阿修羅様、何かご不満等がありましたら申し付け下さい、ビのよ
うな事でも直しますので』

「はい」

阿修羅はバイクに股がり走らせた、バイクに乗つた事が無い阿修羅でも簡単に乗れる。

阿修羅が完全に慣れ遊んでいた時、大きな音でサイレンが鳴り響く。

『阿修羅様！お戻り下さい！靈が敷地内に侵入して来ました、ステージ4の強敵です』

「はあ、ココから靈の所まで直接出れないの？」

『しかしこまだ阿修羅様は』

「命令です、早くそこまでのルートを出して、あるんでしょ？」

『お気を付けください』

多目的スペースの壁の扉が開いた、阿修羅はバイクに乗りフルスロットルでソコに入る。

中は緩やかなカーブの登坂になっている、そして徐々に田の前が明るくなり、外に飛び出した。

6：食事会（後書き）

やつとホーリナーが全員出てきました、隊もメチャクチャに決めてる訳じやありません、何となく気づいて頂けたでしょうか？評価、コメントをよろしくお願いします。

Japan VCSO Japan branch office

阿修羅が地下室からバイクで飛び出ると、最初に目に映るは靈、阿修羅は飛んでいる途中に腕輪に触れる、得物は長刀、名は夜叉丸。靈は体の骨格が変わり、今まで阿修羅が戦ってきた靈とは違う変化を見せる、2mくらいの巨人となり、空間に出来た黒い穴から得物を取り出す、得物は大斧。

「楽しそう」

阿修羅は空中ですれ違い様に斬りつけた、しかし靈は軽々といなす。阿修羅はそのままバイクを横になりながら停止させ、バイクから降りて構える、しかし阿修羅が構える寸前に靈は大斧を振り下ろした。阿修羅は間一髪で避けると今度はちゃんと構える、そして阿修羅が靈の振り下ろした大斧を見た瞬間固まつた。

「あ、貴方、私のバイク……」

靈の大斧は阿修羅のバイクを両断している、阿修羅はつつ向いたまま震え、何かをブツブツ喋つてる。

「せつかく貰つたのに、気に入つてたのに、私のバイクだつたのに、貴方が入つて来なきや良かつたのに、貴方なんて死んじゃえば良いのに。」

完全にダークサイドに入った阿修羅の独り言に靈も固まる事しか出来ない。

阿修羅は夜叉丸を右腕一本で持った、そしてそのまま力が抜けたようだランと腕を垂らす、体をフラフラと揺らし前に倒れそうになるのと同時に地面を蹴つた。

阿修羅が走った跡は刀傷がついている、阿修羅は靈の前に行くと全体を使い、そのまま切り上げた、靈が受け太刀すると、阿修羅は夜叉丸を右手から左手に持ち替え、一回転して靈の腕を斬つた。

「ギャアアアアアアアアアア！」

つんざくような悲鳴が日本支部の森にこだまする、しかし靈の腕は完全に斬れていない、腕一本故に力が入らないからだ。

阿修羅は間合いを取ると、背筋を伸ばし切つ先を斜め下に向ける、目を瞑り全ての神経を靈に向けた。

靈は大斧振り上げながら走つて来る、阿修羅はギリギリまで引き付け胴を切り抜こうとした、しかし大斧の引っ掛けかり止まつてしまつた。

「ヤバい」

阿修羅は夜叉丸から手を離し避けようとした、しかし靈は左手で阿修羅を薙払う。
阿修羅は地面に体を擦りながら止まつた。
脇腹は大きく切り裂かれ血が流れ出す、阿修羅は腕輪に触れ夜叉丸を出した。

「ハアハア、ちょっと痛いわね」

靈は大きな音を立てながら阿修羅に向かつて走つて来る、阿修羅は

構える事が出来ずに靈の大斧を防ぐので精一杯だつた。

阿修羅は踏ん張りきれずに吹き飛ばされた、夜叉丸を地面に突き刺しブレーキを踏むが、体中が軋み体制を崩した、うつ伏せに倒れ、右手で持つてある夜叉丸と握りながら傷口を押さえた。

靈は容赦なく阿修羅に向かつて走つて来る、阿修羅は立ち上がる力もあるかないかの状態だつた。

ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ。

阿修羅と夜叉丸が強く共鳴する、そして阿修羅の視界はスローモーションとなつた。

「（何これ？…………夜叉丸？…………うん、分かつた、やってみる）」

阿修羅は右足を引き左足を前に出した、大きく沈んで夜叉丸の切つ先は左後ろを向く、そして阿修羅は夜叉丸を両手で強く握り靈を睨んだ。

阿修羅は一閃となり靈の横を抜けた、あまりの速さに靈も監視カメラで見てた科学班も阿修羅を捉えられなかつた。暫くすると靈の体に亀裂が入り、上半身がズレて地に落ちた、いつの間にか靈は両断されていた。

「何これ？」

『阿修羅様！今の技はいつ習得なされたのですか！？』

「今、夜叉丸に語りかけられるような感覚の後、気付いたらこんな事してたの」

阿修羅は状況把握は出来ていたが、何故自分がこういつ事が出来たのかは理解できなかつた。
そして身体中ボロボロの阿修羅はその場で氣を失い倒れた。

『阿修羅様！医療班を直ちに向かわせろ！患者のレベルは4、重傷ないし重体、速やかに処置しろ！』

科学班の班長が医療班に命令する、医療班はスタンバイしていたタメにすぐに駆けつけ、ストレッチャーに阿修羅を乗せた。
阿修羅の脇腹は大きく切り裂かれ未だに出血している、身体中擦り傷だらけで危険な状態なのは一目瞭然だ。

3日後

阿修羅は真っ白ベッドの上で寝て居る、あれから一度も目を覚まさずに眠つたま。

昨日任務から帰つて来た摩和羅女は阿修羅の横に付きつきり、シーツのシミは摩和羅女の涙である。

「う…………ん…………うう…………」

「阿修羅ー?」

阿修羅が弱々しく目を開けると、目の前には目を腫らした摩和羅女がいる、摩和羅女は阿修羅が起きたのを確認すると、阿修羅に抱きついた。

「阿修羅ー!アタシは心配したぞ、無事で良かった!」
「摩和羅女、痛…………くない?」

阿修羅は傷口に摩和羅女が乗つていたので退けようとした、しかし傷口は全く痛まない、それどころか傷口が無いように感じられる。

「傷口は完治したぞ!」
「これも神の力?」
「そうだ!神様が阿修羅を守ってくれた」

摩和羅女が大声で喋つてゐるせいで、金色孔雀が病室に入つて来てたのに一人とも気付かなかつた。

「もうそろそろ良いかな?」

「うわっ! いるならいると言え! 驚くだろ」

「驚かそうと思つた訳じゃないんだけどな。」

それより阿修羅、話が聞きたいんだけど、良いかな?」

阿修羅は無言で頷いた、摩和羅女まわらひめは金色孔雀こねいきくらげのタメに阿修羅あしゅらと話せるスペースを作り、自分は隅の方に行つた。

「神域に達したって本当かい?」

「神域?」

阿修羅は初めて聞いた言葉に首を傾げた、金色孔雀はそれを見て頭を搔きむしる。

「ベロシティ【光速】って使つたでしょ?」

「ああその事ね、何なのそれ?」

「俺達は、神技」と呼んでる、神技っていうのは神域、つまりある程度の力に達した者だけが使える技だ、普通神域に達するには1・2年かかるもんなんだが、どういう訳か阿修羅は一ヶ月でやつてのけた。

ちなみに神選10階の条件の一つに『神技を2つ習得していること』つてのがある、神技2つとかは化け物だ、まあ俺はその資質が阿修羅あしゅらにはあるとふんでるけどね』

阿修羅あしゅらにこの申告は嬉しい半面微妙な気分でもあつた、更に激しい運動が出来るのは楽しみもある、しかし化け物よばわつされるのは嫌だった。阿修羅あしゅらはステージ4との戦いを思い出し興奮していた、しかしあるシーンを思い出すのと同時に深く落胆する。

「阿修羅、どうした？」

「はあ、バイク貰ったのに壊された」

「そんな事か！それなら科学班の人達に言えば一週間で新しいのを作ってくれるぞ！」

「本当に？」

「本當だ！」

阿修羅の顔はパアツと晴れた、その笑顔を見て摩和羅女も笑顔になる、忘れられた金色孔雀はノソノソと部屋を後にした。

「やつぱり阿修羅は凄い！こんなに早く神域に達するなんて、アタシでもつい最近やつと神技が使えるようになつたばかりだ」

「そりなんだ、そんなに凄い事なんだね」

「そうだぞ！でも前に神選10階の人が日本に来た時、あの人は怖かつた、大鎌をもつて敵を楽しそうに殺すんだ、ステージ4の群れがゴミのように斬り刻まれるあの光景は今思い出しても怖い、アタシは阿修羅にあんな風になつて欲しくはない」

阿修羅は摩和羅女の言つた事を想像して、鳥肌が立つた、阿修羅は戦闘 자체を楽しんでいるのではなく、戦闘の過程、そこで行われる運動をたのしんでいる。

しかし摩和羅女の言つた神選10階は敵を斬る事を楽しんでいる、強大な力に溺れてその力を使う事で自分の欲求を満たす、それが阿修羅とシンクロする事を想像した摩和羅女は不安にさいなまれていた。

「大丈夫よ、私は強くなりたいんじゃないの、もっと動きたいだけ、それを叶えるのが力つてだけでそれ以上の欲求はない、相手を傷付けずに運動出来るなら私はそっちを選ぶよ」

「やつぱり阿修羅は阿修羅だ！強くなつても阿修羅に変わり無い、良いことだ！」

阿修羅は抱きついてきた摩和羅女の頭をそつと撫でた。

阿修羅が求めるは動、利用するは力、望むは和、そして行うは戦。全てがサイクルし、全てがお互いを殺す、何処に身を置くかで、鬼神とも女神とも化す。

7：神域（後書き）

戦闘シーンが短くなってしまった事をお詫びします、作者の力不足です。
評価、コメントをよろしくお願いします。

Japan VCSO Japan branch office

迦樓羅と緊那羅は任務から戻り各自の自由な時間を楽しんでいた。
阿修羅は地下の多目的スペースで体を動かしていた。
スピーカーのスイッチが入る音が聞こえると、いつもの声が日本支
部全体に響き渡る。

『迦樓羅、緊那羅、阿修羅、今すぐ部長室に集合、これから任務だ
よ』

阿修羅はその言葉を聞くと走つてエレベーターに乗つた。阿修羅が
いるのは最下層、部長室は最上層、阿修羅は剥き出しのエレベータ
ーに座つた。

部長室に着くと既に全員集まっている、阿修羅は軽く謝つて金色孔
雀の前に行つた。

「阿修羅、初任務だよ」

「はあ、やつとね」

「これでも早いんだけどね。」

じやあ今回の任務内容を説明するよ、今回はどこかのいんちき陰陽
師が取り付いた悪霊を祓つらしに、その尻拭いを頼む

緊那羅はつまらなそうな顔で返事をした、迦樓羅はいつものよう
ボーカーフェイスで返事をする、阿修羅は初任務に心踊り何も返事
はしていない。

「面倒な任務だ」

「何が？靈を倒すだけでしょ？」

「金色孔雀、あんた戦いしか教えて無いでしょ？」

金色孔雀は明後日の方を見て知らないふりをした、緊那羅からはかなりの殺気が金色孔雀に向けて放たれている。

「人間に取り付いた靈つてのは逃げるの、だからそれを追わなきゃいけないから面倒なのよ」

「それは確かに面倒ね」

「まあ阿修羅のバイクもあるし、追うのに苦労はしないでしょ、バイクは車に乗せられるようにしてもらつたから」

迦樓羅はそういうとエレベーターに乗り込んだ、阿修羅もその後を追つ、緊那羅は金色孔雀を思いつきり睨みエレベーターに乗つた。

地下の車庫に行くと迦樓羅の車がある、そしてその後ろには阿修羅のバイクが付いてる。

緊那羅は迷わず後部座席に横になつた、阿修羅は助手席、迦樓羅は運転席に乗るとけたましいエンジン音が車庫に響く、壁の一ヶ所が開くとそこに向かつて車を走らす。

小さな山間の村、そして一つの家の前に大勢の人が集まっている、明らかにそこがおかしい、いや、この村の空気がおかしい、どんよりとしたていて任務以外では近寄りたくない村だ。

「俺はココで待ってるよ、二人は行つてくれば?」

「命令でしょ?」

「バレた? 行つてきくんない、俺お払いのあの空気大つ嫌いなんだよね」

「分かったわよ、行くよ阿修羅あしゅら」

緊那羅きんならは人を搔き分けて家に入つていいく、阿修羅あしゅらもその後ろを追つて人を搔き分ける、誰も気にしない事に少し悲しさを覚えながら家に入った。

居間に行くと準備万端といつた感じだ、緊那羅きんならは冷蔵庫から勝手に飲み物を取り出し飲んでいる、記憶に残らないのを良いことにやりたい放題だ。

「阿修羅あしゅらも飲む?」

「はあ、それ他人のでしょ?」

「良いのよ、コシチは命がけでココに来てるんだから『コレくら』」

阿修羅あしゅらは苦笑いを浮かべた、前々から自分勝手な人だと思っていたが、ここまでとは逆に誇るべきモノだと思えてきた。

始まつても緊那羅きんならは緊張感の欠片もない、今はお菓子をあさつている。

「おつ、みたらし団子がある」

緊那羅きんならの一言に阿修羅あしゅらの顔がピクリと動いた、阿修羅あしゅらは生睡を飲み

ながら緊那羅を見た。

「食べる？」

阿修羅は無言で頷きみたらし団子を取つた、一口食べると満面の笑みになる。

「おいひ～」

「あんこもあるよ」

「本當だ、『コマは無いの？』

「『コマだあ？』コマなんて邪道よ、団子はみたらしかあんこが通例で

しょ？」

「緊那羅つていちご大福嫌い？」

「あんなもんは大福じゃない、プラスとマイナスでマイナスだ」

阿修羅は力説する緊那羅を横目に団子をひたすら頬張つている。

しかし一人の甘い時間は引き裂かれた、ビリビリと肌を突くように空気が張りつめる、そして靈が体から引き離されると丸くなつて山の方に飛んで行つた。

「はふら、ほうわよ（阿修羅、追うわよ）」

「はほひほふ（あと一つ）」

二人は団子を頬張りながら片手に団子を持ち窓から外に出た、車の所まで行くと既にバイクの準備をしてあたる。

「お前ら口元に色々付いてるぞ」

二人は手に持つた団子を全て食べ、口を拭いてバイクに跨つた。

「私と阿修羅は先に行つてゐる、後から追つて来なさいよ

「了解」

「緊那羅、しつかりつかまつてー！」

阿修羅がアクセルを入れると前輪が軽く上がる、阿修羅は靈を見ながらバイクを走らせた。

山道に入ると舗装されてない道をフルスロットルで走る、阿修羅は靈を追つてゐる、ただそれだけで楽しかつた。

「阿修羅、何か感じない？」

「居心地は良くないわね、何か引き寄せられてるみたい」

「私もよ」

阿修羅と緊那羅は嫌な予感がしてい、村に入った時から感じた不安、最初は悪靈祓いの空氣だと思った、しかしこれは何かがおかしい。

平地に行くと靈は止まつた、一人はバイクを降りて靈の近くに行くとある事に気付く。

「阿修羅、困まれたわね」

「殆んどはステージ3、ステージ4が……3体、厄介ね」

「先に雑魚を片付けるよ」

「はい」

阿修羅と緊那羅は腕輪に触れる、得物は阿修羅が夜叉丸、緊那羅は

羅刹、緊那羅の得物は納刀された刀。

阿修羅と緊那羅は背中合わせになる、背筋を凜と伸ばし切つ先を斜め下に向けるのが阿修羅、腰を低く落とし柄を握つて抜刀の瞬間を伺つているのが緊那羅。

「多く倒した方がこの団子を食べる権利が貰える、それで良いわね？」

緊那羅胴着の懷からタッパに入った団子が出てきた。

「はあ、いつの間にそんなの？」

「そんな事は気にしない、来たわよ」

緊那羅はギリギリまで靈を引き寄せると鞘走りを利用して両断する、一回斬ると納刀して再び同じ構えをとる。

「私に納刀させなかつたら誉めてあげる」

靈が3体同時に襲いかかってくる、緊那羅は真ん中の靈を斬ると納刀し、逆手で柄を持つと右の靈を抜刀と同時に斬る、左の靈は回し蹴りで倒すと鞘で頭を碎く。

その間の時間は4秒、羅刹といつも前の通りである。

「弱いんだから逃げてれば良いのに」

靈が5体同時に阿修羅に襲いかかって来る、阿修羅は右足を軸にして一回転する、5体の内3体が両断された。

勢い余つて靈に背を向けたところで、背中に夜叉丸を添わせ、大きな弧を描きながら振る、背中に回りこんでた靈が股から頭にかけて両断され、振り向き様に横薙に斬つて全てを殺した。

「はあ、つまらない」

阿修羅は先程から何体もの靈を倒しているが、汗一つ流れていない。ある程度倒して阿修羅の近くに緊那羅が来た。

「私は12、阿修羅は？」

「勝った、14」

「あなたの無駄にリーチが広いのよ」

「はあ、それより厄介者が3体残ったわよ」

「先に2体倒した方が勝ちよ」

「はあ、話しが違う……つてもう行つてるし」

緊那羅はステージ4の1体に向かつて走つて行つた、懷に潜り込もうとするが棍棒が振り下ろされる、緊那羅は鞘さやごと受け止めるとそのまま抜刀して腹を斬ろうとした、しかし手の平で軽々と刃を握られる。

「頑丈な手の平ね」

緊那羅は無理矢理引き抜き靈の手の平を斬つた、そして納刀と同時に間合いをとる。

靈は全く怯む事なく走つて來た、上段から振り下ろされた棍棒を避け、左腕に鎧と鞘の間の抜き身の部分を当てる。

「左腕、貰うわよ」

そのまま抜刀する、鞘走りと押す力をフルに受けた左腕は、堅い装甲など無かつたかのように斬れた。

大きな左腕は地面に落ち、靈は声にならない声で叫ぶ。

「もつと良い声で奏でなさいよ、死ぬときくらい美しくなければあんたも悲しいでしょ？」

緊那羅は走り出す、靈はがむしゃらに棍棒を振るが既に緊那羅は背後に回りこんでいた。

緊那羅は首めがけて抜刀するが少し入った所で止まつた、緊那羅はそのまま羅刹に鞘を当てて蹴り飛ばして首を切断した。

「一丁上がり」

阿修羅は田の前にいる靈に的を定めた、敵の得物は大斧、ドスンドスンと大きな音をたてながら走つてくる、阿修羅は切つ先を斜め下に向けて構えた。

「はあ、遅い」

阿修羅は靈が振り上げた腕に夜叉丸を突き刺す、つんざくような悲鳴を無視して首を斬りうとした、しかし空いてる左腕が阿修羅を難拵おうとする。

「ワンパターンね」

夜叉丸を地面に刺して左腕の攻撃を防御した、阿修羅は一寸間合いを取り相手の出方を伺う。阿修羅は呆れながらも構える、そしてギ

あじゅら

あじゅら

あじゅら

リギリまで引き付けると靈の上段からの攻撃を避け、靈の背後に回り込み背中合わせになる。

靈は振り向き阿修羅を両断しようとした、それより先に夜叉丸が靈の喉元に突き刺さっている、阿修羅は背中を向けたまま靈の首から頭にかけて両断する。

「行動パターンが同じなら一度戦えば何をするか分かる、ステージ4も頭があれば強いのに」

阿修羅が残りのステージ4に目をやると緊那羅も丁度終わり狙いを定めていた。

「阿修羅、スピードなら負けないわよ

「私にもどつておきがあるんだから」

「ふんっ、一発勝負ね」

緊那羅は腰に納刀した羅刹を当て、低く構えた、阿修羅は夜叉丸を左後ろに向け、低く構える。

「「ベロシティ【光速】」」

二人同時に神技を放ち靈は全く反応出来ずに腰から下、胴から上へと別れ、3つになり地面に転がる。

「阿修羅も同じなんだ」

「みたいね、それより、これは私の勝ちよね？」

「しょうがないわね、ホラ、食べなさいよ」

阿修羅はタッパを貰うと美味しそうに団子を頬張る、しかし緊那羅は阿修羅に背を向けて何かしている、阿修羅は緊那羅の肩を掴み振

69

り向かせた。

「はあ、やつぱり」

「……………バレた」

緊那羅はもう一つのタッパを開けて団子を食べている、阿修羅に負けたら保険、勝つたら総取りするつもりだつたらし！」

「まあいいよ、帰るよ、迦樓羅は山に入れないだろ?」

「はいよ

阿修羅がバイクに跨ると後ろに緊那羅が乗る、阿修羅はフルスロットルで山を降りた。

村に着くと車の中で迦樓羅が寝ている、緊那羅は青筋を立ててキレると、迦樓羅の頭を思いつきり殴つた。

「……………痛い」

「痛いじゃないでしょ！？あなた私らがどれだけ苦労したと思つてるの！」

「口の周りにあんこ付けて言われても説得力が無いんだけど」

二人は真っ赤になりながら口を拭いた、そして緊那羅は頭に血が上つたのか、恥ずかしいのか分からぬが顔を真っ赤にしながら迦樓羅に怒鳴り続けた。

「奴らは群れだつたんだよ！ステージ4も3体、これで余裕に思える？」

「服に埃ほ一つ付いてないよ、どうせ一人なら余裕ゆうよだろ」

「緊那羅きんなら、次の任務は迦樓羅かるら一人にやつてもらえれば良いんじゃない?」

私達は傍観者ぼうくわうしゃの立場で

「もしもステージ5とか出てきたらどうするんだよ?」

「死んで」

二人の爽やかな笑顔に迦樓羅は死を覚悟した、確実にこの一人なら自分を見捨てかねない、心底簡単な任務を祈つた瞬間かのじゅんまんだつた。
阿修羅あしゅらの初任務、思い出は団子、成果は休暇。

8：初任務（後書き）

突然タイトルを変えた事を謝罪します、続けるタメに分かり易くしただけです。

作品をより向上させるために評価、コメント、アドバイスをお願いします、どんな事でも作者のプラスになります。

9・温泉

Japan VCSO Japan branch office

阿修羅は最近、日本支部にある隠し通路を見つけた。

まだまだ知らない事の多い日本支部を探検している時、行き止まりに行き着いた、普通行き止まりには扉か何かが近くにあるはず、しかしそこには一面壁、何も無くて逆に怪しいと思い壁をよく観察した、そうすると一つだけおかしな箇所を見付けてそこを押したら行き止まりの扉が開いた。

一人で入ろうとした阿修羅に声をかける摩和羅女。

「阿修羅、何だコレは？」

「隠し通路？」

「何か楽しそうだ！ 行ってみよう！」

阿修羅は摩和羅女に手を引かれて中に入った。

中は薄暗く何故か足下に灯りがある、不思議がる阿修羅をよそに摩和羅女はどんどん中に入つて行く、ジメジメして埃っぽい空気が不気味さを際立たせる。

「何か肝試しみたいだな！」

「そうね」

「阿修羅、別れ道があるぞ！」

一手に別れた道、阿修羅の不安は積もるばかりだが、摩和羅女の好奇心を抑えるに値しない。

「はあ、どうちがい？」

「もうううううう、コツチ！」

摩和羅女は阿修羅の手を引いて右に行つた。
どのように盛り、どのように曲がったかもう忘れている、今の現在地の予想すら出来ない阿修羅を尻目に摩和羅女は迷路気分で足を進める。

ガタン！ドスン！

大きな音が聞こえた、何かが開き何かが落ちる音、摩和羅女は怖くなり阿修羅の後ろに隠れた、阿修羅は全く気にせず進み続ける。音の根源は砂埃に包まれている、今までと同じような道に現れた奇怪な光景、摩和羅女は阿修羅の服を強く掴み阿修羅の陰に隠れた。

「痛たたた、何よコレ？」

「誰？」

砂埃が晴れかけた時、埃を叩きながら土煙の中から出てくる人？

「緊那羅？」

「そうよ、あんた達何してるの？」

「私達は隠し通路を見つけたから探険、緊那羅は？」

「壁に手を付いたら壁が凹んで足下が開いて落っこちた」

緊那羅は明らかにイラつきながら言い放つ。

「それもこれもあんた達探してたからこうなったのよ

「私達を探してた？」

「そう、何だか知らないけど今回は女だけの任務だつて、呼んでも

来ないから私が捜してたらこれだ、早く出て部長室に行くわよ

阿修羅はばつが悪そうな顔をして頬を搔いた、緊那羅はその表情を読み取りフリーーズする。

「もしかして」

「迷った！アタシ達は帰り道が分からぬぞー！」

阿修羅を代弁して摩和羅女^{まわらじょ}が言い放つ、その無神経さに緊那羅は頭を抱えた、阿修羅も合わせる顔がない。

「しようがない！根性で抜け出すわよー」

「おー！」

「…………お

やけくそ^{やけくそ}の緊那羅と楽しんでいる摩和羅女^{まわらじょ}に阿修羅は着いて行くので精一杯だった。

道は果てしなく続き流石の摩和羅女^{まわらじょ}も事態を把握しあじめたその時。

「緊那羅、何か肩に付いてるぞ」

「何？」

緊那羅^{きんなら}は肩に付いている何かを手に取った。

「イヤアアアアアアー！」

物凄い声で叫ぶと何かを投げ捨てて摩和羅女^{まわらじょ}に抱きついた、阿修羅^{あしゅら}は気になり緊那羅^{きんなら}が捨てた何かを見た。

「クモ？」

「お、お願ひ、クモ！クモだけは、ダメ！」

阿修羅は「」の非常時に緊那羅の驚き方を楽しんでいた、いつになく女子の子っぽい反応を見せた緊那羅に阿修羅は近づく。

「」の子がダメなの？」

阿修羅は手に持ったクモを緊那羅の皿の前に差し出す。

「イヤー！お願い、辞めてぇ、お、お願い阿修羅、やだあ、怖いよお！」

泣き出した緊那羅が可哀想になり遠くに投げた、そして残ったのは摩和羅女に抱きつき、いつもの欠片も無く女子の子のように無きじやくの緊那羅。

「わあわあわあ！」

「緊那羅、もういな！」

「グスンッ、ほ、ホント？」

阿修羅は同性ながら緊那羅が可愛く見えた、今なら女子校の生徒の気持ちが分からなくもない。

再び摩和羅女が先頭に立ち歩き始めた、緊那羅は未だに阿修羅にしがみついている。

「緊那羅、もうクモ出でこないから離れて」

「でも、でも、もしかしたら出でてくるかも、そしたら…………」

また泣き声になる緊那羅、いつもの緊那羅の威勢はない、そこにはいるのは怯えた女子、世の中の男が見たら一発で惚れるような甘い声を出して。

「緊那羅は何でクモがダメなの？」

「く、クモ！？」

「はあ、クモはいないよ、クモが嫌いな理由が聞きたいの」「小さいころご飯を食べる時にクモが上から落ちてきて、私のご飯の上に乗ったのを気付かずに一緒に口に入れちゃったの、そしたらクモが口の中で暴れ回つて……、吐き出したけどそれがトラウマになつて見るだけで意識が……」

阿修羅もその話を聞いただけでトラウマになりそうだった、その点阿修羅は苦手なモノが少ないのでそういう気持ちが分からない。

3人は行き止まりに着いた。

「もしかしたら出れるかもね」

「ホントか！？」

「多分ね」

「クモクモバイバイ」

阿修羅達は壁を触つて何かが無いか確かめた、摩和羅女^{まわらじょ}が一ヶ所おかしながら所を押すと3人の足下の床が抜けた。

下は滑り台のようになつていて3人は下り続ける、ある程度滑ると落ちて何かに乗つた、3人が落ちた所はゴンドラのように上昇している。

「はあ、何これ？」

「何か上がってるーアタシ達上がってるぞー！」

「もう何も無いわよね？」

ゴンドラは上昇しきり止まる、そして目の前の扉が開くとゴンドラは傾き3人は外に放り出された。

「イヤアアアアアアア！」
「ワアアアアアアア！」
「キヤアアアアアアア！」
「ドスン！！」

3人は何とか隠し通路から脱出出来た、多少手荒いがこの際出れば関係ない、そして3人の目に最初に映つたのは……。

「お疲れさま、皆楽しかった？」
「「「ボスー？」」
「いやあ、全部見させてもらつたよ、きんじきくじやく緊那羅きんならとか可愛かつたね」

こんじきくじやく金色孔雀は大きなモニターを指差すと、そこには今まで阿修羅達あしゅら達が通つて来た道。

「おー、どういう事？」
「はあ、見てたの？」
「どういう事何だ！？」
「コレはダークロードを追い詰めるタメの迷路だよ、本来はホーリナーに無線機付けて放り込むんだけど、今回は君達の遊びだから見学してようかな、つて」

きんなら緊那羅は完璧にキレた、相手が支部長という事をすっかり忘れて胸ぐらを掴んでいる、さつきまでの怯えを全て怒りに昇華した。

「中にスピーカーくらい付けなさいよ、それと助けに来るとかしないでいい」「まあまあ…………ホレ」「キヤー！！」

金色孔雀はポケットからクモ……、の人形を出した。

「お願いお願い！もう怒らないから、く、クモは辞めて！」

「緊那羅、人形よ、人形」

「ニンギョウ？」

「そう、ボスのイタズラ」

何かが切れる音と共に緊那羅が無言で立ち上がった、後ろで笑つて
る金色孔雀に回し蹴りを放つ、そして倒れた金色孔雀ボコボコに蹴
り飛ばす。

「死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね
！つてか殺す！」

その光景に阿修羅と摩和羅女は言葉を失つた、緊那羅の顔がトラウ
マになりそつなくらい恐ろしい顔、負のオーラが部屋全体を包みこ
んでいる。

「すみません！もうしません、だから許して下さい」

「緊那羅、任務聞く前に殺したら任務に行けなくなるでしょ？」

「阿修羅、それは任務を聞いたらボスは死ぬって事なのか？」

「そうね、あんたを殺すのは任務を聞いてからでも遅く無いわよね

支部長の権限が地に落ちたところで緊那羅の蹴りが止まつた、金色
孔雀は仁王立ちして緊那羅の足下に土下座しながら任務の内容を
話し始めた。

「今回の任務は大型温泉テーマパークの女湯の靈の退治です、温泉
が大好きな女の人でそこに居座つてゐるようですが

「温泉が、緊那羅、せつかくだから有休気分で行かない？」

「そうね、任務はサッさと終らして温泉を楽しんじゃおう」

「ヤツター！温泉だ！アタシは温泉は始めてだ」

3人は金色孔雀の事など忘れてエレベーターに乗り込んだ、金色孔雀は複雑な気持ちだった、死から免れたのは良し、忘れ去られたのは悲しかった。

Japan Large spa

その大きさに阿修羅と摩和羅女は呆気にとられている、緊那羅は色々と調達しに消えた。

「阿修羅！凄い大きいぞ！」

「そうね、早く任務終らせて楽しちつ」

「うん…」

緊那羅は浴衣やら何やらを一式集めてきた、そして3人は温泉に入る前に靈を探した、任務を早く終らせないと温泉を楽しめない、自分達の邪魔を排除するタメに靈を探している。

「いたわよ」

「はあ、あんなど真ん中に」

阿修羅が腕輪に触れると得物が現れる、得物は長刀、名は夜叉丸。夜叉丸に気付くと靈は歪に変化した、そして……逃走。

「はあ、何で逃げるの？」

「大丈夫！アタシに任せろ！」

摩和羅女は腕輪に触れ得物が現れる、得物は暗器の針、名は針鬼。摩和羅女は走りながら狙いを定めると靈の頭に当たる。

「ストライク！」

靈は倒れると消えた、一発で急所を突いたのである、針と同じくらいの急所を走りながら走つてゐる敵を一発で、それが示すは暗殺の天才、神に愛された暗殺屋、阿修羅は恐れから震えた。

「よし！温泉入ろう！」

「阿修羅、アイツはあんな性格でも最強のバツクよ、隠密では世界でも最強レベル、まあ接近戦なら最弱レベルなんだけどね」

阿修羅は苦笑いを浮かべながら摩和羅女の後を追つた、苦笑いの理由は摩和羅女よりもはしゃいでる緊那羅。

二人は先に温泉に入ると阿修羅は呆れながら後を追つた、摩和羅女と緊那羅は周りの迷惑を全く考えずに……。

「（迷惑つてかかるのかな？）」

飛込んだ、大きな水しぶきが他の客にかかるが、嫌な顔をするだけで誰がやったかは咎めようとしない。

「気持良い！」

「阿修羅、気持良いぞ！早く阿修羅も入れ！」

阿修羅はゆつくりとつかつた、摩和羅女はホーリナーなのを良いことに泳いでいる、緊那羅は周りの人を退けて自分だけのスペースを作った。

「はあ、職権乱用とはこの事ね」

「何してんだよ阿修羅、私達は生きる神よ、いちいち気にしたら

神に近付いた意味が無いじゃない」

「阿修羅！緊那羅！外にも温泉があるぞ！」

「行くわよ！」

緊那羅は阿修羅を担いで露天風呂に向かつて走った。
摩和羅女は思いつきり飛び込むと、続けて阿修羅を担いだ緊那羅も飛び込む。

「ひやー、極楽極楽」

「爺」

「つるさこ、温泉は日本人の心よ、あなたも日本人なら樂しみなさいよ

阿修羅はゆつくりとしたいタイプだった、温泉はゆつくりと一人でしたいという願望を二人は見事に打ち崩した。

その後も阿修羅は一人に振り回され続けた、楽しくもあるが温泉なのに疲労が溜る一方だった。

9：温泉（後書き）

いつの間にか10話をまとめてあと一話、早いですね、次回はついに物語が動き出します。
読んでいただけたら光栄です。

Japan VCSO Japan branch office

摩醯首羅、摩侯羅迦、迦樓羅は部長室に集められていた、女3人は任務を兼ねた温泉に行っているので変則的になつていて、3人は金色孔雀を見て固まつた、毛布にくるまりガタガタと震えている、顔には痣。

「どうんたんだよボス？」
 「き、緊那羅に……」
 「緊那羅にセクハラでもしたの？」
 「クモの人形を見せたら……」

迦樓羅だけ大爆笑した、この中でも迦樓羅は一際緊那羅の事を熟知しているからだ、クモが大つ嫌いなのも知つている。

「そりややつちまつたな、緊那羅にクモは扱い次第じやご法度だよ」「迦樓羅、そんな事はどうでもいい、ボス、任務の説明しろ」

摩醯首羅がいつものように前に出た、全てを簡潔にやりたい摩醯首羅は無駄な事を嫌う。
 迦樓羅は表情が分からぬ摩醯首羅が苦手だった、背中にしがみついてくる摩侯羅迦も。

「今回は楽しいよ、鬼退治だ」

「「「鬼?」」」

「そう、最近各地で鬼がやりたい放題でさ、双子ちゃんにも行つて

もらつてゐる、女3人も温泉が終わつたら直行してもらつ予定だし。それで君達にも鬼退治に行つてもらいたいと思います、各地にいる協力者を頼りながら旅して、今回は大仕事になりそだから隊編成その他は各自でやつてもらひ、近くにいる人と協力しても良いし一人ずつで相手してもらつても構わない。

火急的速やかに鬼を一掃する、親玉を見付け次第全員に連絡、軽く日本支部の威信をかけた戦いだね、よろしく…」

金色孔雀はそれだけ言つと3人に紙を手渡した、そこにはアバウトな日本地図と点、鬼による被害をポイントで示している。

摩醯首羅と摩侯羅迦は車庫に行くと無言で迦樓羅の車に乗り込む、既に迦樓羅の車と金色孔雀のバイクしか無いから当たり前だが、迦樓羅は引っ掛けた。

「お前らいつも任務行くとき誰が運転してるんだよ?」「摩和羅女」

摩和羅女は見た目も歳も阿修羅より下だ、それに運転させてる事に迦樓羅は呆れた。

「毘楼勒叉と毘楼博叉がバイクに乗ってるんだ、不思議ではない」「それもそうだけど」「早く行くぞ迦樓羅！俺は鬼と戦うのが始めてなんだぞ！」
（何で摩醯首羅隊はこんなのばっかりなんだよ）

日本支部で鬼と戦った事があるのは金色孔雀だけ、だから現場に出てるホーリナーで鬼と戦った事のある奴はない。

Japan mountain path

VCSOには各地に協力者がいる、協力者は人間の記憶に残るがホーリナーと普通に接する事が出来る特別な人々、主に食料は資材調達、そして様々な情報の収集源として使われている。

3人は協力者の情報をもとに山道を歩いている、情報によると大きな洞穴があるハズ。

「なあなあ！これじゃないのか！？ってかコレだ、決定！」

「摩侯羅迦の意見を取り入れる訳では無いが、コレだ」

錠前が付いている金網の奥にある洞穴、3人は警戒して腕輪に触れた、二人の手には得物が握られている。

摩醯首羅の得物は槍、名は胤舜、迦樓羅の得物は鎖鎌、名は首切、そして摩侯羅迦の得物は……、鋭い爪、これはかき爪ではなく指先に付いてるだけのもの、両手足にある、歯は全て牙と化している、名は狼嚇。

「グルルルルウ」

「まさに犬だな、コレは」

「とりあえず行くぞ」

3人は摩侯羅迦を先頭にして中に入った、4本足で歩くその様は犬

そのもの、迦樓羅は分銅をグルグルと回しながら警戒する。警戒に歩いていた摩侯羅迦の足が止まると摩醯首羅は足を止める。

「迦樓羅、その体制のまま右9度の位置にそれを投げる」

「何で？」

「いいから早くしろ」

迦樓羅は渋々摩醯首羅に言われた通りに投げた、そうすると何かに当たり絡まる。

「ガウ！ グルア！」

一瞬で摩侯羅迦が飛びかかった、それに続いて迦樓羅と摩醯首羅も後を追う。

気付いた時には人間に似たようなモノの首元を食い千切っている、しかし人間と大きく違うのは額に角がある。

「人間そのものだな」

「迦樓羅、まだだ、準備しろ」

そういうと摩醯首羅は天井に何か投げた、それは天井にくつつくと強く発光しはじめる、コレも科学班の作品だ。辺りが明るくなると周りを鬼に囲まれていた。

「ウウウウウウ」

「迦樓羅、大丈夫か？」

「タイマンより大勢向きだから大丈夫だ」

そういうと迦樓羅は分銅を思いつきり投げた、分銅は鬼の胸を貫き一列全てを一掃する。

分銅が手元に戻つて来ると同時に鬼が走つてくる、人間よりも多少速いくらいだがそんなのは関係ない。

迦楼羅は鎌を逆手に持つと鬼を横薙に斬り捨てた、振り抜いた所で持ち直し踏み出しながら奥の鬼を斬つた。

「鬼つて弱いんだな」

迦樓羅かるじやは分銅ではなく鎌を回し、そのまま投げ入れた。

「行きは良い良い…………」

一番置くに達すると思いつきり引き張る。

「帰りは怖い！」

鎌の通つた跡は両断された鬼で溢れてい、そして一体だけ残つている2mの巨体の鬼。

「親玉か」

「貴様ら何の用だ？」

迦樓羅かるじやはフリーズした、独り言のつもりが鬼が喋つた。

「喋れるんだ」

「目的は何だ？」

「君達の掃除、って言いたいんだけど悪さしないなら見逃すよ」

「笑止、仲間を殺した奴は仇、殺す」

「残念だな」

迦樓羅かるじやは分銅を鬼に向かつて投げた。

迦樓羅の戦いに安心した摩醯首羅は前方に目を向けた。

鬼の群れに飛び込む摩侯羅迦、摩侯羅迦は喉元を中心に攻撃している。

摩醯首羅も観戦は飽きたので槍を構えた、丁度逃げ出して来た鬼の頭を貫く、そして引き抜くと同時に走った。

目の前の敵を貫き、抜くと同時に右の鬼を薙払う、鬼の体は槍のスピードに耐えきれず脇腹がえぐれた。

大きく捻った体を戻すついでに目の前の鬼の頭吹き飛ばす、殆ど摩侯羅迦が倒してしまったので相手は壊滅。

二人が一息つくと何かがドスンと摩醯首羅の隣に落ちる、それは血まみれの迦樓羅。

「迦樓羅！」

「グルルルルルウ」

摩醯首羅が後ろを向くとそこには巨体の鬼がいる、摩侯羅迦は既に臨戦体制、摩醯首羅も迦樓羅の前に立ち構えた。

「貴様らも仲間を」

「喋れるのか、それなら話しさ早い、お前らが人間を襲う、だから俺達はお前らを殺す、何も無差別な訳ではない、むしろお前らが仕掛けってきた事だ、被害者面するな」

摩醯首羅の表情が分からぬ分余計に威圧感が増す。

「生きるタメに餌を食つて何が悪い？貴様らの好きな『弱肉強食』だ」

捕食される側も武力を行使する、食つ相手を間違えたな、人間には強い自我と高い知能がある、『目には目を、歯には歯を』って言葉があるんだよ」

摩醯首羅は飛込んだ、それに続いて摩侯羅迦も走る。

摩醯首羅は顔に向かつて胤舜を突き出す、鬼はサイドステップで避けるが、そこには壁を蹴つて爪を振り上げてる摩侯羅迦がいる。鬼は動じる事なく摩侯羅迦を薙払う、摩侯羅迦は地面に叩き付けられる前に受け身をとつた。

「ガウ、グルウ」

摩醯首羅は右脇腹めがけて突く、鬼は右足を引いて避けた、摩醯首羅はその瞬間右手を逆手に持ち替え、左手を軸にして右手を引いた、胤舜は弧を描いて鬼の腹を切り裂く。

「グガアアアアアア！」

摩侯羅迦は鬼の胸に飛び込み、胸を大きく切り裂き、間合いを取る。鬼はフラフラになり血がとめどなく流れ出す、その瞬間、摩醯首羅の隣を分銅が通り、鬼を完全に縛る。

「ハアハア、後は頼んだぞ」

「摩侯羅迦、準備しとけ」

「ワウ！」

摩醯首羅は左手を前に突きだし、右手で胤舜を持ち右手を大きく引いた、そして左手を軽く添えて体を沈める。

「エクステンション【延長】」

右手を突き出すのと同時に胤舜が伸びる、胤舜は鬼の胸を貫き鬼の動きを止めた。

「グルア！」

摩侯羅迦は胤舜の上を走り鬼に向かう、最速に達した時思いつきり胤舜を蹴つた、摩侯羅迦は右手を大きく引いて左手で鬼の口を掴む、勢いを殺さずに右手で鬼の頭をぶち抜いた。

摩侯羅迦は鬼の頭を貫通して真っ赤に染まつた自分の腕を舐めた、返り血等を浴びて摩侯羅迦の体は真っ赤になっている。

「こわつ

「迦樓羅、動けるか？」

「大丈夫だ、打撲と切傷だけだからね」

傷だらけの迦樓羅と血まみれの摩侯羅迦を従えて、埃一つ付いて無い摩醯首羅は洞穴を出た。

10・鬼（後書き）

ついに10話達成です、あつという間でした、この話は20話くらいで終わって次に続くと思います。

ラストスパートがんばるんとよろしくお願ひします。

11・下水道

Japan drainage ditch

毘楼勒叉と毘楼博叉は下水道を歩いている、ジメジメして臭くて暗い、最悪なう拍子が揃つた。

協力者からの提供で鬼がココに住み着いているとの情報が入った、下水道は思ったよりも広く、戦うには十分なスペースがある。下水道のせいでいつもよりイライラしている毘楼勒叉、そしてそれを抑えなきやいけない毘楼博叉もイライラしている。

「「あ～、ムカつく、何で僕達がこんな事しなくちゃいけないんだよ、あの女つたらしにやらせればいいだる」」

これだけの長文を一字一句間違えずにピッタリ合わせるシンクロ率、普段も合ひ事があるので性格が違うタメにそこまではない、ここまでシンクロは皆無に等しい。

「毘楼博叉、帰つたら猛抗議してやるう」

「でも帰れないんだよ、帰るには終らせるしかないんだ」

「やっぱりムカつく」

二人の怒りは頂点に達していた、しかしシンクロ率も頂点に達している、今なら声に出さなくても意思疎通が出来るくらいに。

下水道に入つて小一時間、やつと鬼が住んでいた痕跡を発見した、しかしそこには誰もいない。

毘楼勒叉と毘楼博叉はイライラしながら鬼が住んでた跡を探索してると後ろから鬼が近寄つて来た、鬼は息を潜め気配を消す、二人は全く気づいていない、そして鬼は毘楼博叉に向けて拳を放つた。拳は右京、毘楼勒叉のハンドアッ克斯に阻まれ、鬼の首元には左京、毘楼博叉のハンドアッ克斯が突きつけられている。

「「ねえ、君鬼だよね？僕達凄くイライラしてるんだ、君がもう少し気持ちの良い所に住んでたらサクッと殺してやろうと思つたけど辞めた、苦しみながら殺してあげるよ」」

毘楼勒叉と毘楼博叉の不気味なシンクロに鬼は身震いした、そこには神の代行人ではなく、悪魔の心を持つた天使、そう簡単に死を提供するほど出来た天使ではない。

毘楼勒叉は両手に右京を持ち、毘楼博叉は両手に左京を持った、横に並ぶ二人は全く同じ、そして全く同じタイミングで地面を蹴る。毘楼勒叉は右へ、毘楼博叉は左へ、鏡で映したように動き鬼の両サイドを固めた。

「「死へのサークスだ、僕達のジャグリング、これくらいで死なないでね」」

鬼は毘楼博叉を見た、左京を振り上げる毘楼博叉、毘楼博叉は左京を鬼の頭に向かつて投げる、鬼はそれを避けるが足元を右京がかする。

「「鬼つて馬鹿だな、わざわざジャグリングだつて言つたのに」」

二人は物凄い勢いでジャグリングを始める、得物が鬼の周りを飛び交う、ハンドアッ克斯は体にかかるくらいで行き交う、避けようすれば逆に刺さる、しかし避けなければ徐々に体は斬り刻まる。

「「アハハハ！どうしたの？死なないの？死んだ方が楽でしょ？」」

二人の笑顔は全く同じ、首の角度や口角の上げかた、えくぼの出来方までが全く同じ、笑つて無い本心までも。

鬼は既に片膝をついている、しかし二人の手は止まらない。鬼は神を恐れた、神が恐怖で屈伏させた瞬間だ。

「「そこにいるのは誰？」」

二人は同時に入口付近に右京と左京を投げる、地面に右京と左京が刺さると入口の陰から別の鬼が出てきた。

「「一人じゃなかつたんだ、丁度飽きたところだしいいや、君は死んで良いよ」」

二人の右京と左京は先ほどまで遊んでいた鬼の頭に刺さる、鬼は頭にハンドアックスを刺し、痙攣しながら倒れた、それが示すは死。二人は入口にいる鬼を不気味な笑みで睨む、鬼は無言で地面を蹴るとあつという間に一人の前まで来た、二人は軽々と避けるが地面に突き刺さった鬼の腕を見て苦笑いを浮かべた、地面はコンクリートでに殴つてもビビすら入らない。

「なあ毘楼博叉びるばくしゃ！これ可笑しいよな！？絶対に拳がいかれるよな！」

？」

「鬼つていうから人間より身体能力が高くても不思議じゃないでしょ」

「…………そつか」

一人の座談会は毘楼博叉びるばくしゃの冷静な見解で終つた、そして終わると一

人は同時に得物を投げる、得物が鬼に当たると金属音と共に弾かれた、二人の頭にクエスチョンマークが浮かんでいる。

「毘楼博叉！これはどう説明する！？」

「多分各自に進化するんだよ、この鬼は体が硬くなつたんじゃない？」

「…………そつか…………って今度は納得出来ない！コイツだつて一応生物だろ、生物が、キンッ、って音鳴らすか？」

「もうつるさいな！僕に聞くなよ！僕は鬼研究家じゃないんだよ！僕も毘楼勒叉と同じ知識なの！」

今回の座談会は毘楼博叉がキレて終つた、さすがの毘楼勒叉もありの事に黙つてる。

そして一人は双子特有のテレパシーで座談会を開いた、そして出た結果が……。

「「どうにかなる！」「

と言つて一人は思いつき突つ込んだ、一人は同時に薙払うが鬼の体に弾かれる、一人は尻餅をつき後ろに倒れ込んでしまう。上を見上げると鬼が拳を振り上げている、一人はお互いの足の裏を蹴り間合いを取り構えた。

鬼は毘楼博叉に拳を向ける、それを見て毘楼勒叉が飛込んだ、毘楼博叉が避けて前のめりになつた鬼の後頭部を毘楼勒叉が思いつきり振り抜いた、鬼は頭からコンクリートに突つ込むと毘楼博叉が首を斬り落とそうとする、首にめり込むだけで斬れはしない。

「あああ～、手が痺れる～」

「そつか！毘楼博叉、相手もあんなに力チカチなら右京と同じんじゃないのか？」

「そつか！」

二人は何かを気付いたようだ、頭をコンクリートから引き抜きフランフラになりながら立ち上がる鬼を天使の笑顔で見た、鬼の首元は大きく凹んでいる、普通の敵なら首は綺麗に斬り離れているはずだ、この傷の浅さが鬼の装甲の強さを示している。

「鉄板野郎！僕達を敵に回したのを後悔させてやる」

「叩いて殴つてジャンケンポンだよ」

二人は地面を強く蹴った、鬼は毘楼勒叉を殴ろうとする、毘楼勒叉も右京の刀を背にして鬼の拳を打つた、毘楼勒叉は右京を手放しながら吹っ飛ぶ、しかし鬼の動きも一瞬止まる。

「毘楼勒叉！今だ！」

「了解だよ！」

毘楼勒叉は毘楼勒叉と同じように鬼の頭を打つた、鬼はフランフラになりながら体制を崩すとそれを見計らって、毘楼勒叉が後頭部を打つた。

毘楼勒叉はそのまま後頭部をたこ殴りにする、ガンッ！ガンッ！と大きな音を立てて叩き続ける、そして大きく振り上げて刃を戻す、両手で握り先程付けた傷の所に振り下ろした。

「ギヤヤヤヤアアアア！」

金属を振動させたような叫び声が下水道全体に響き渡る、そして毘楼勒叉が突き刺さった右京の背を左京の背で思いつきり殴る、右京はそのまま地面に突き刺さった、鬼の首はペンチで切ったように薄くなっている。

「うわあ、何かグロ」

「いや、その前に腕が痺れるよ」

二人の腕は感覚がかなり薄くなっている、金属のように硬いということは骨格が金属に近いということ、頭蓋骨等はショックを吸収するタメにあるので、全ての衝撃を通す金属は最悪の頭蓋骨、故に叩いた事でのダメージはないが脳にダメージは与えられる。

「脳みそ揺れただろうな」

「考えるだけで酔いそう」

「毘楼博叉びのほくしや、帰るぞ、僕はもうそろそろ気持悪くなってきた」

「そうだね」

二人は鬼の死体二つを尻目に下水道を出ることにした、まだ痺れる手の震えを抑えながら。

Japan shrine

阿修羅、緊那羅、摩和羅女の鬼は神社にいるらしい、大きい日本でも有名な神社である、ココから鬼を探し出すのは至難の技、それに加え一般人が多い、圧倒的不利である。

神が神社で戦う等笑える話である、ホームだがアウェイのような不思議な気分だつた。

「はあ、何処にいるの？」

「第一鬼つてどんななの？」

「多分角が生えてるんだ！牙とかも鋭くて」

「だったら今頃大々的ニュースになつてるんじゃない？」

3人に再び沈黙が流れる、テーマパークばりの大きさに加え容姿の分からぬ敵、完全に敵の手の平で踊つている状態だ。

「どうしました？」

「……」

「ここの坊主か！良かつた、実は　　」

阿修羅は摩和羅女の口を押されて間合いと取る、緊那羅は間合いを取ると同時に腕輪に触れた、得物は納刀された刀、名は羅刹。

「どうした阿修羅！？坊主は親切に声をかけてくれたんだぞ！」

「それがおかしいのよ」

「飛んで火にいる夏の虫」

「お嬢さん方、どうされました?」

阿修羅は腕輪に触れた、得物は長刀、名は夜叉丸。

理解出来ていない摩和羅女と坊主、そして騒ぎを見て近寄つて来た下つぱ坊主達。

「阿修羅、コレは大乱闘だな」

「丁度良いわよ、最近運動不足でね」

「お嬢さん、そんな物騒なモノは！」

阿修羅は坊主の鳥帽子のようなモノを夜叉丸で飛ばした、坊主の頭には角、そうココにいる坊主全員が鬼、相手が飛んで火にいる夏の虫なら」ちらも然り。

「角だ！阿修羅、角があるぞ！」

「鬼つてのも知能が低いのね、私達は同じホーリナーと貴方達みたいなダークロードにしか見えないの」「チツ」

坊主達は徐々に体つきが良くなつてくる、そして顔はまさに鬼、鬼は人の中に隠れて過ごしているらしい。

「阿修羅、ココつて神社よね」

「そうよ」

「鬼に祟められる神つてのも滑稽よね、もしかして阿修羅だつたりして」

「鬼神つて言いたいの？」

二人はクスクスと含み笑いをする、阿修羅とは鬼神と呼ばれた神でもある、だとしたらココにいる阿修羅は鬼の神。

摩和羅女はやつと自体が理解出来て腕輪に触れる、得物は針、名は針鬼。

「じゃあ摩和羅女、援護を頼んだよ」「阿修羅に近寄る敵はアタシが全て殺す！」
「私は一人で戦うわよ」「緊那羅もだ！」

二人は口角を上げると左右に散る、阿修羅は敵の真ん中に飛び込み一回転する、その瞬間阿修羅の間合いでいた鬼は両断される、鬼が恐る程の存在、それが鬼神。

「はあ、私は貴方達の神よ、神に拳を向ける何て勇気があるわね」

鬼達は無視して阿修羅に向かつて走つて来る、人間よりも身体能力が高いが恐るるに足らず。

「聞く耳持たず、か」

阿修羅の広い間合いに鬼は近付く事すら出来ない。

阿修羅は目の前の敵にを突くと、抜くのと同時に反転してサイドの鬼と後方の鬼を両断する。

阿修羅に若干出来た隙を鬼は見逃さなかつた、鬼はあつという間に阿修羅の懷に潜り込むと拳を握る、しかし頭を針に射抜かれて倒れた、急所を一発だ。

「阿修羅、思いつきりやつて大丈夫だぞ！」「ありがとう」

摩和羅女はそのまま緊那羅の方に針を投げる、そして一人が安全に

戦っている時は遠くの鬼を射抜く、針は一度に何本も出せるので常に指の間に三本挟んでいる。

摩和羅女は遠くを気にしすぎて自分の近くを忘れていた、間合いで入ってきた鬼に気付くと、指の間に針を挟み、それを押さえるように針を握る。

「お前くらいなら近距離も大丈夫だぞ！」

摩和羅女は鬼の拳を避けて頭に針を直接突き刺した。

摩和羅女は周りを囲まれると、鬼を踏み台にして飛び上がり、上空で頭を下に向ける。

「ファイヤーワークス【花火】！」

摩和羅女の体から大量の針が放出される、それは摩和羅女の周りにいた鬼を全て串刺しにする。

しかし鬼の一体が残っているのに気が付かず、着地すると鬼の拳が振り上げられている。

「ベロシティ【光速】！」

一閃が鬼の後ろを通り鬼は両断される、そしてそれをやつてのけたのは。

「摩和羅女、注意を怠るな」

「貴方もね」

緊那羅の後ろにいた鬼を阿修羅が斬った、緊那羅は笑いながら知つてると一言。

「後は親玉だけね」

「はあ、運動にもならない」

「油断大敵だ」

最後に残したのは巨体の鬼、得物を持っていない代わりに鋭い爪がある。

鬼は一瞬で消えると阿修羅達の隣まで来ていた、しかし阿修羅は鬼の喉元に切つ先を当てている。

「速いけど見える

「チツ」

阿修羅達は何とか捉えられた、しかし鬼が異常に速い事には変わりない。

阿修羅と緊那羅が構えると、摩和羅女が鬼に針を投げた、鬼は軽々と避けるがそこには阿修羅が先回りしている、阿修羅の突きを爪でいなすと阿修羅は体制を崩した、鬼はは爪を振り下ろす、爪は阿修羅の腕をかすめたが大した事はない。

その隙に後ろに回りこんでいた緊那羅は斬ろうとするが、一瞬で鬼がいなくなる。

「キヤア！」

阿修羅と緊那羅が田をやると摩和羅女が背中から血を流して倒れている、鬼の爪には摩和羅女の団服の千切れた跡が。

「摩和羅女！」

「行くな阿修羅！」

「何で！？」

「今行つたらアイツに殺られるわよ

阿修羅は唇を噛み締め構えた、先に地面を蹴ったのは緊那羅、その後を追つて阿修羅が走る。緊那羅は間合いに入ると抜刀様に攻撃する、しかし軽々と避けられた、阿修羅は鬼が避けた所に横薙に斬るが爪で受け止められる、間合いを取ろうとした瞬間肩口を切られた。緊那羅は納刀せずに振り向き様に斬りかかる、鬼は避けると緊那羅の腕を掴んで持ち上げた。

バキバキバキバキ！

「グワアアアアアアー！」

緊那羅の腕の骨が砕ける音、阿修羅は肩の痛みを堪えて斬ろうとするが、軽々と弾き飛ばされてしまった。

緊那羅は離されたのと同時に脇腹から肩にかけて爪で切られた。

「緊那羅ー！」

「…………」

阿修羅の表情が怒りに歪む、先程弾かれた時に肋骨を折りフラフラの状態で、右足を引き左足を前に出し、切つ先を左後ろに向ける。

「ベロシティ【光速】ー…………ー！」

一瞬光速に達するタメに体が軋む、そして鬼の手前で減速してしまつた、鬼は阿修羅の両手をまとめて掴み、持ち上げる、鬼は人差し指を突き出すといったぶるよう腹に突き刺す。

「グハツ！」

とめどなく流れる血と吐血、鬼は爪を引き抜くと次は肩に突き刺す。

「ツ！」

阿修羅の意識は飛びかけていた、そして最後に指を向けた先は額、人差し指をが髪に当たると髪の毛が2、3本舞う、そして阿修羅が目を閉じ死を覚悟した瞬間、鬼の悲鳴と共に阿修羅は地面に落ちた。阿修羅が見ると腕には針が刺さっている。

「阿修羅、もう腕は、使えない、頑張れ」

「摩和羅女……」

鬼の両腕はブランと垂れている、阿修羅は腕輪に触れて夜叉丸を握る、そして立ち上がり夜叉丸を鬼の額に突き刺した。

鬼と同時に阿修羅も倒れる、そこに並ぶは大量の鬼の死体と3人のホーリナー。

真つ白な部屋に真つ白なベッド、そして真つ白な包帯で包まれた3人のホーリナー、最初に目を覚ましたのは阿修羅、痛むハズの体で軽々と起き上がる。周りを見渡す。

そして焦り隣にいる一人を起こした、一人も痛むハズの体で軽々と起きる。

「阿修羅、おはよう

「はあ、呑気ね」

「ココは何処だ？」

「私も今起きたから分からない、でも傷の処置がされてるから敵に拉致された訳じゃないと思つ」

そんな話をしていると扉が開き人が入つて来た、銀色の髪の毛にメガネ、そして真つ白なコートにカミウママークの刺繡。

「「「ボス！？」」

「おつはよ～、元気になつた？」

「その前に何でボスがこんな所にいるの？」

「阿修羅、その前にココは何処なの？」

「ココは協力者の家だよ、君達は神社で倒れてるところを協力者に拾われたんだ、幸いにもココの協力者が医者で助かつたよ」

金色孔雀は椅子に座りながら楽しそうに話す、確かに金色孔雀の言う通り不幸中の幸いだ。

「それで何でボスがいるの？」

「そうよ、あんたも私達ばかり使ってないで任務しなさいよ」

「だって心配だから医療班と一緒に来ちゃつたんだもん！俺の可愛い女の子が死にかけたとなつたら食事も喉が通らないよ」

3人は呆れて言葉を失つた、こんだけホーリナーが死にものぐるいで戦っているのに支部長はこんなにおちやらけている。

「はあ、馬鹿な上司を持つと苦労するわね」

「大丈夫か阿修羅あしゅろ?」

「大丈夫よ、それより早く任務に行かないと」

「そうね」

3人はベッドから下り、団服を取つた時にある事に気付いた、自分達は上半身は包帯と下半身は下着一枚ということに。

「大胆だね」

「はあ、最悪」

「死ね!この女つたらしが!」

緊那羅きんならが金色孔雀こんじきくじやくを思いつきり殴つた、金色孔雀こんじきくじやくは吹つ飛び、泡を吹いている。

3人は団服に着替えて病室をあとにした、重傷患者一人を残して。

12・神社（後書き）

最近書き貯めてる小説が減つてきました、色々と用事がありすぎて暇がありません、有言実行するために頑張ります。評価やコメント、アドバイスなど貢えると有難いです。

Japan center of Tokyo

阿修羅、緊那羅、摩和羅女は都心を散歩している、いや、正式には鬼を探している、しかし都心から人を真似た鬼を探すのは、砂浜からビーズを探すくらい気が遠くなる事だ、故に諦めて都心を楽しむという事になった。

阿修羅と緊那羅は以前に来た事があるので懐かしいといった感じだ、しかし摩和羅女は生まれた時から山で育つたタメにこんな所に来た事が無い。

「凄い！こんな人がいるぞ！」これから何が始まるんだ！？」
 「阿修羅、あんたのペットでしょ、首輪で繋いでおきなさいよ」
 「はあ、摩和羅女！迷子に…………、つてもういいない」
 「あの馬鹿雌！」

一人の任務は鬼探しと摩和羅女探しになつた、二人は頭を抱えて摩和羅女が行きそうな所をしらみ潰しに探す事にした。

「阿修羅！緊那羅！何か凄い…………、つて一人共迷子か？世話がかかるな」

馬鹿、口に自分の否を認めない馬鹿がいる、しかし馬鹿の良いところは超ポジティブシンキングということだ。

「くれーふ？ 何か美味そつだ！」

摩和羅女はカツプルが受け取ったクレープを横取りして一口で食べた。

「美味しい！コレ美味しいぞ！」

盗られた事に気付かない一般人は、その変化を埋めるタメに再びクレープが手渡される、しかし摩和羅女が再び横取りした。

「美味しい！ 美味すぎる！ 最高だぞ！」

摩和羅女は横取り作戦で食べ続けた。

阿修羅と緊那羅はイライラが治まらず途中のクレープ屋でクレープを調達していた。

「はあ、クレープでも食べなきゃやつてられないよね」

「摩和羅女の奴、何処行つたの？コレで鬼の首持つてくれれば帳消しにするのに」

「摩和羅女の事だから首を持つて来るといふか、生きたまま連れてくるんじやない」

「確かに」

二人は口の周りにクリームを付けながら摩和羅女の搜索をしている、周りから見れば変な一人だが見えないのを良いことにやりたい放題。

「阿修羅、アイスがあるわよ」

「はあ、食べに来たんじやないのよ」

「いらないの？ 積み放題よ」

「……………イチゴで」

緊那羅は普通に中に入り、コーンを勝手に取つてアイスを乗せた、阿修羅にイチゴのアイスを手渡すと自分のコーンを取る。

次々と重ねていき、最終的に5段になつた、阿修羅は開いた口が塞がらない。

「行くわよ」

「ホーリナーって便利ね」

「孤独に生きてるんだからこれくらいの楽しみがなきや」

阿修羅は納得してアイスをスプーンですくつて口に入れた、緊那羅は一口で半分、一口で一つを食べ終えた。

「ホーリナーになる前からそんなんだつたの？」

「何で？」

「一応私達女の子じゃない、少しは考えたら?」

「良いのよ、そんないちまちま食べてても味がないじゃない」

「彼氏とかいなかつたでしょ?」

「いたわよー! ホーリナーになるまではね

緊那羅きんなりが若干悲しい顔をしたので阿修羅あしゅらはこれ以上聞かない事にした。

阿修羅あしゅらはアイスを食べ終えて少し緊那羅きんなりのアイスを貰おうとした、しかし緊那羅きんなりのアイスは既にない。

「もう食べたの?」

「そうよ」

「太らないの?」

「別にあれだけハードな仕事すれば太るモノも太らないわよ

「確かに」

「阿修羅あしゅら、こんな所に団子があるわよ、ちゃんと邪道のゴマ味も」

「はあ、食べてばっかり」

摩和羅まわいら女の事も鬼の事も忘れて、一人は食べ歩きになつている。

摩和羅女はクレープ片手に阿修羅と緊那羅探し、あの後計10個のクレープを食べ終え、一つをお持ち返りしてその場を離れた。しかしクレープを食べ終え阿修羅と緊那羅の名前を叫んでる時、一つある事に気付いた。

「もしかしてアタシが迷子なのか？アタシが阿修羅と緊那羅に置いて行かれたのか？」

摩和羅女は立ち止まりその場でうつ向いてしまった、そして抑えきれずに目から大粒の涙が頬を伝つ。

「うわああああ！阿修羅あああ！緊那羅あああ！何処に、何処にいるんだ！？」

一人で泣いている摩和羅女を慰める者は誰一人いない、摩和羅女は手で涙を拭いながら歩き続けた。

阿修羅と緊那羅は団子の山を持ちながら食べ歩き、ではなく摩和羅

女探しと鬼探し。

「「ママつて美味しいの?」

「はべふ(食べる)?」

「一つだけ」

緊那羅は阿修羅の団子の山から一つ貰い頬張った、その瞬間手から
緊那羅の団子が落ち、フリーズする。

「そんなに美味しい?」

「.....」

「どうしたの?」

「飛鳥? 飛鳥じゃないのか? やっぱり飛鳥だ、久しぶり! 飛鳥がい
なくなつて心配してたんだぞ、みんな知らないつて言ひて、どうし
たんだ?」

阿修羅と緊那羅の視線の先には男性が一人立つている、緊那羅の口
から団子が落ち阿修羅は腕輪に触れた、得物は長刀、名は夜叉丸。

「おいおい物騒だな、飛鳥、この子は誰?」

「飛鳥つて、もしかして緊那羅の前の名前?」

緊那羅は無言で頷いた、そして男性が阿修羅と緊那羅に話しかけた
といふことは、鬼。

「飛鳥忘れたのか? 僕だよ、章吾だよ」

「わ、忘れるわけないでしょ、あんたは、私の、彼氏だった」

「嘘.....」

緊那羅は涙を流しながらその場に崩れ落ちた、阿修羅は気にせず

阿修羅は氣にせずに

構える。

「貴方、鬼でしょ」

「鬼？君大丈夫？」

私達は私達の仲間と貴方みだした魁魁魁魁にしか分かひなしの」

「あくまでシナリオのみのう

四
卷之三

阿修羅は拳を握り近くにいた一番怖そうな人を殴つた、しかしその人は何事も無かつたかのように歩き去る。

「分かつた？」

あしゅら
阿修羅は切つ先を鬼に向けた、鬼は徐々に顔の骨格が変わり犬歯が
長く、なり牙二七す。

あしゅう

ないで！」

「ハハ、は東よ！ 繫那蘇の御由はもういない。ここにいるのは父一
クロード、それくらい貴方なら分かるでしょ？」

緊那羅は阿修羅と鬼の間に体を入れた、鬼は不気味に笑い緊那羅を
盾にする、緊那羅の目からは大粒の涙が流れる。

「過去に未練があるのは貴方だけじゃないの！みんな過去を抱えてホーリナーになつてゐる、貴方もそうだつたんぢやないの！？」

「うぬやー、うぬやー、うぬやー、うぬやー、あんたに何が分か

「？」この人は鬼でも私が唯一愛した人、あんた何かに殺させない！

「新羅王」

阿修羅は鬼と緊那羅の光景を見て絶望に近い感情が湧いてきた、鬼は体を人間に戻り緊那羅を後ろから抱きしめる、緊那羅は後ろから回された腕に触れて笑みを溢す。

「…………緊那羅」

「阿修羅、あんたが章吾に刃を向けるなら私はあんたを斬る」

「悪魔に墜ちるつていうの！？」

「章吾のタメなら悪魔になれる、ねえ、章吾」

「大好きだよ、飛鳥」

緊那羅は鬼の方を向き、鬼に腕を回して顔を近付けた、鬼も緊那羅の顔に顔を近付ける、そしてそつとお互いの唇を合わせた。しかしその瞬間緊那羅の腕から崩れ落ちる。

「章吾ー。」

鬼の頭から血がながれ即死状態、小さな穴が貫通している、緊那羅はそれが何かすぐに理解出来た。

「摩和羅女！」

「大丈夫か緊那羅？ そいつは鬼だろ？」

摩和羅女は鬼を抱き抱える緊那羅のもとに走つて來た、しかし緊那羅は怒りに溺れた顔で摩和羅女を睨んだ、その顔に摩和羅女は一步退く。

「緊那羅、怖いぞ」

「緊那羅、そいつは鬼なのよ、私達は間違つてない」

緊那羅は鬼を抱き上げてその場から離れる、摩和羅女が追おつくるが阿修羅が引き止めた。

「何故だ！何故止める！？」

「今の緊那羅は冷静さを失つてゐる、少し頭を冷やさせてから連れ戻すわよ」

阿修羅は摩和羅女の腕を掴み緊那羅とは別の方向歩いて行つた、摩和羅女は戸惑いながらも阿修羅に従う。

亀裂、それは露骨な形でホーリナーを切り裂いた。

Japan park

阿修羅と摩和羅女は公園にいた、ホーリナーの携帯は全員の居場所が分かるようになつていて、阿修羅は摩和羅女を探す時にコレを使えば良かつたと後悔した。

公園にいる理由は緊那羅のGPSが公園の中にあるため、もしかしたら携帯を捨てたという可能性もあるが、それも足を追う一つの手となる。

阿修羅が携帯のGPSのポイントと田の前を見くらべる、そこには緊那羅が座っている、鬼の死体を前にして。

摩和羅女はその異様な光景に阿修羅の後ろに隠れた、阿修羅は険しい表情で緊那羅を見る。

「来たのね」
「冷静になった？」

緊那羅は腕輪に触れる、得物は納刀された刀、名は羅刹。
緊那羅は羅刹を左手で握ると、振り返り構えた。

「はあ、それが答えなの？」
「あんた達は私の仇よ」
「悪魔に墜ちるっていうの？鬼を愛した事は誰も咎めない、だから目を覚まして」
「愛した人を殺された悲しみがあんたに分かるの？」

阿修羅は黙り込んでしまった、確かに阿修羅に愛した人はいない、だからと書いて今の緊那羅のやつている事を否定する事も出来ない。

「摩和羅女、頼んだわよ」

「しかし阿修羅」

「もう緊那羅は緊那羅じやないの！分かつて、摩和羅女」

阿修羅は涙を流しながら腕輪に触れた、得物は長刀、名は夜叉丸。

摩和羅女は間合いを取り腕輪に触れる、得物は針、名は針鬼。

阿修羅は切つ先を斜め下に向け、背筋を伸ばす、緊那羅も構えると低く沈んだ。

先に動いたのは緊那羅、緊那羅は地面を蹴ると鞘走りを利用して横薙に斬る、阿修羅は軽々と受け太刀すると緊那羅は止まり、睨みあう。

「私は手加減しない、全力であんた達を殺すわよ」

「私達は貴方を全力で連れ戻す」

緊那羅と阿修羅は間合いを取ると同時に構える、阿修羅は地面を蹴ると半身になりながら緊那羅を突く、緊那羅は鞘で切つ先を受け止めると抜刀して斬りかかる、阿修羅は一步前に出て夜叉丸をずらして柄で羅刹を受け太刀する。

阿修羅は前蹴りし、緊那羅を突き飛ばす。

「やつぱり強いわね」

「そう？私は貴方と戦えて楽しいわよ」

「戦闘神さまは怖いねえ、戦いを楽しむなんて」

「運動を楽しんでるのよ」

緊那羅は鼻で笑うと抜刀した、そして左手に鞘を握り右手で羅刹を

持つ、阿修羅は緊那羅の抜刀の型を見たことがない、何故なら緊那羅は阿修羅の前で本気を出した事が無いから。

納刀は相手の出方を伺つた防御的な型、抜刀は両手を使えるタメ攻撃的な型。

「良いこと教えてあげる、この型はステージ5でしか使った事ないの、あなたの事認めてあげる」「はあ、認めなくて良いから戻つて来て」

「私の首を持ち帰る事ね」

緊那羅は地面蹴る、素早い動きで逆手で持つた左手の鞘で殴りかかる、阿修羅は軽々と夜叉丸で受けるが、阿修羅の左からは羅刹が斬りかかってきた、何とか腕輪で防御するが力押しられる。

「グツ！」

緊那羅は前蹴りで阿修羅を突き飛ばすと、鞘で阿修羅の頭を殴つた。

「クハツ！」

「殺氣がない、それじゃあステージ4も殺せないわよ」「緊那羅は、靈じや、ない、私達の、仲間」

阿修羅の頭からは血が流れる、殴られたせいで右目が見えにくくなつた。阿修羅は服の腕を切り、頭に巻いて応急処置をした。

「この期に及んでまだ仲間なんて温い事言つてるの？私の殺気が分からない訳じゃないでしょ？」

阿修羅が気付かない訳が無かつた、緊那羅の今までに感じた事の無

い殺氣。

緊那羅は阿修羅を睨み、構えよつとした時、いきなりバックステップをした、そして地面に針が突き刺さる、緊那羅が針の飛んで来た方向を見ると摩和羅女がいる。

「あんたはそりやつて章吾を殺した、味方になると心強いけど敵にすると卑怯の一言ね」

「頼む！田を覚ましてくれ、緊那羅！」

「正気よ、コレが私の選んだ道、ただそれだけよ」

「緊那羅、変わってしまったんだな」

「そうかもね」

緊那羅は今度こそ構える、阿修羅は右手一本で夜叉丸を持ち腕は力無く垂れた、そして体がフラフラと揺れ始める。

「諦めたの？構えなさいよ」

「貴方だけが力を抜いてたと思わない事ね」

「もしかしてそれが本気って事！？笑わせないで、そんな力の入らない無い構えで何が本気よ！」

「そう、それなら行かしてもらうわよ」

阿修羅は前に倒れるように地面を蹴る、夜叉丸を引きずりながら緊那羅の懷に潜り込む、阿修羅は右腕一本で全身を使いしなやかに切り上げる、緊那羅は軽々と鞘で防ぐと夜叉丸は弾かれた。

「こんな力の無い斬撃始めて！馬鹿にしないで！」

阿修羅は口角を上げると、弾かれた反動で左手に持ち変える。

緊那羅は变速的な動きに困惑うも、阿修羅のしなやかな横薙の攻撃を羅刹で防いだ。

再び弾かれたと左腕を大きく開いて遠心力を殺さずに、左足で回し蹴りを放つ、緊那羅は鞘で防ぐが鞘ごと頭を蹴られた。

「クアツ！」

切れではないが腫れている、緊那羅は間合いをとった、阿修羅の变速的な攻撃について行けてない。

緊那羅の型は防御と攻撃を一貫した型、しかし阿修羅の型は防御を捨て变速的な型で相手のペースを乱す型、それにまんまと緊那羅はハマってしまった。

「やりづらいわね」

「どう？ 本能で動いてる靈にはやりづらいけど、頭がある人間相手には抜群でしょ。」

それには人間は少しのキズでも動きはにぶる、力は無くても骨にまで達すれば動きに支障ができる、強いでしょ？」

「厄介ね、でもそんなにベラベラ喋つて良いの？ 敵に塩を送るようなモノよ」

「貴方の型は見きつた、私の型の種明かししなきやフエアじゃないでしょ？」

阿修羅は不適な笑みを浮かべる、緊那羅はその笑みに背筋が凍る思いをした。

「さすが戦闘神、戦いを楽しんでるのね」

「はあ、違つて言つてるじゃない、別に貴方を斬らないで済めばそれで良いのよ、でもこんなに頭を使って体を動かしたのは始めて、楽しい」

「それが戦闘を楽しんでるって言つのよ、戦闘神様」

阿修羅はそつかもねと一言いって再び揺れ始めた、緊那羅は阿修羅に先手を取られるまえに地面を蹴った。

阿修羅は右手に持っている夜叉丸を逆手に持ち変え、緊那羅の羅刹の攻撃を、体を後に向けながら腕から肩にかけて夜叉丸を沿わして防ぐ、そしてそのまま回し蹴りを放つた、しかし緊那羅は羅刹を納刀して防いだ。

「同じ攻撃は何度も通じないわよ」

「そう」

阿修羅はそのまま靴を左足で蹴り、右足を軸にして回転する、体制を崩した緊那羅に背を向けた時、夜叉丸を左手に持ち変え逆手で握る。

刀として羅刹で防いだ。

左足を大きく振って遠心力を付けて斬りかかる、しかし緊那羅は抜刀して羅刹で防いだ。
緊那羅は左手の鞘で殴りかかるつとする、阿修羅は左足を地面に付けて右足で緊那羅の手を蹴った。

「やるわね」

「ありがとう」

阿修羅は間合いを取り、緊那羅は腕輪に触れて鞘を戻す。

「摩和羅女、手出ししないでね」

「だけど阿修羅！」

「合図したらお願ひ」

「阿修羅……」

「あんたも戦いに溺れたのね」

阿修羅は笑顔を作ると涙を流した、その光景に摩和羅女も緊那羅ま

でも戸惑つた。

「「ほんな苦しい思い、摩和羅女にはさせられない」

「阿修羅、摩和羅女は頼んだわよ」

「阿修羅！緊那羅！」

二人は同時に地面を蹴つた、先に仕掛けたのは阿修羅、先に体を動かし右手は動かさずに回転を始める、緊那羅は羅刹で斬ろうとするが、右腕が凄まじい勢いで振られる、緊那羅は鞘で防ぐが阿修羅のしなやかな腕の勢いは止まらない、緊那羅は羅刹も使い阿修羅の攻撃を受け流す。

阿修羅は勢い余つて緊那羅に背中を向けた、緊那羅が斬ろうとした瞬間、阿修羅は半身になりながら緊那羅の喉元めがけて突きを放つ、緊那羅は間一髪の所で夜叉丸の切つ先を羅刹の鞘に納める。

「へえ」

「がら空きよ」

「どうかしら？」

阿修羅は夜叉丸から手を離し、左足で今までより速い回し蹴りを放つ、緊那羅は夜叉丸を抜き、羅刹を納刀させて阿修羅の足を防いだ。

「馬鹿の一つ覚え？」

「それは貴方」

阿修羅は足を曲げて、羅刹と腕で出来た空間に足を入れる、腕輪に手を触れ夜叉丸を地面に突き刺し、足を上げたまま踏ん張ると、羅刹を蹴り飛ばす。

「なつー？」

緊那羅が腕輪に触れるより速く緊那羅の左腕を掴む、そしてそのまま緊那羅の背後に回り込むと緊那羅の左腕の関節を外した。

「グワアアアアア！」

そして右腕を取り背後で関節を固めると左腕を緊那羅の首に回し動きを封じる、緊那羅は痛みで汗が流れ胴着がびしょびしょになつている。

「私の、負けね、殺し、て」

「摩和羅女！」

摩和羅女からの返事は無い、しかし針を投げる準備は出来ている。

「阿修羅、殺して、くれて、ありが、とつ」
「摩和羅女！早くして！……緊那羅が可哀想」
「でも！阿修羅の腕が！」
「場所は分かるでしょ！？大丈夫、緊那羅の苦しみに比べたら穴の一つや二つ」
「ゴメン！阿修羅！」

緊那羅は最後に微笑み、涙を流した。

針鬼は阿修羅の腕を貫き、緊那羅の首を貫いた、緊那羅の全身の力は無くなり、阿修羅の腕の中で人形のように倒れた。

「摩和羅女、どう？」

摩和羅女は傷口や脈、そして瞳孔などを見て阿修羅の目を見た。

「大丈夫、仮死状態だ」

「ありがとう」

「阿修羅の腕は大丈夫か？」

「神経もあるし動く、ちゃんと痛いから大丈夫よ」

阿修羅は緊那羅を抱きかかえて立ち上がった、阿修羅の腕の中で力無く腕を垂らす緊那羅、その表情は喜びに満ちている。その笑顔は愛する人がいない苦しみから解放された笑みか、仲間を傷付けずに済む安堵の笑みかは、まだ分からない。

Japan VCSO Japan branch office

緊那羅は自分の部屋のベッドに寝かされている、隣には阿修羅と摩和羅女、首元にはあえて傷を残している、阿修羅の腕も然り。金色孔雀への報告は人間を操る鬼に緊那羅が操られた事にしておいた、二人とも無理があるのは分かつていただが建前だけでも無いしめしがつかない。

緊那羅はあれから2日間ずっと眠っている、摩和羅女や医療班による蘇生術は終っているのでもうそろそろ起きる頃。しかし起きてから何があるかは一人には分からぬ、もしかしたら二人とも斬られるかもしれない、それでも二人は緊那羅を信じていた。

「う……、ううん」

緊那羅はゆつくりと目を開いた、摩和羅女と阿修羅は息を飲み緊那羅を見つめる。

緊那羅は一人を確認すると腕輪に触れようとしたり、しかしそれより速く阿修羅が口を開く。

「緊那羅、聞いて」

「何を? 分かつてるとでしょ、私は愛する人をあんた達に殺された、この世で一番大切な人を殺された気持ちがあんた達に分かるの! ?」

阿修羅はうつ向いたまま黙ってしまった、その時摩和羅女は勢い良く立ち上がる。

「アタシには分かる！アタシのかか様はアタシが殺した！」

「あなたの手で殺した訳じや無いでしょ」

「この手で殺した、かか様はある日いきなりアタシに襲いかかつて来た、アタシにはそれが理解出来なかつた、でも分かる、このままだと殺される、だからアタシは生きるタメにかか様を殺した。アタシは愛する者を殺す苦しみも、愛する人を無くす苦しみも一遍に味わつた、かか様が何故アタシに刃を向けたのか今だに分からない、殺した事を後悔してる、かか様を殺したアタシを恨んでる、でもアタシは必死に生きた、生きたからまた大切な姉様に会えた」

摩和羅女まわらによが意味する姉様、それは一人が痛いくらい理解している、
緊那羅きんならは腕輪から手を遠ざけると右腕で涙を拭つた。

「私は愛する人が死ぬ悲しみは分からない、でも一番大切な人を傷付ける苦しみなら分かる、緊那羅、貴方を殺さないように戦うのは大変なんだから、貴方は私より強い、だから私も本気を出さなきや殺される、でももしかしたら殺してしまうかもしれない、そんな中で頭を使つて貴方を挑発して、……動けないようにして、もうこんな苦しい思いさせないで、貴方を傷付けるくらいなら死のうとも考えた、それくらい辛かつたんだから」

阿修羅あしゅらはうつ向きながら涙を流した、涙はスカートを握つた手の甲に落ちる、姉妹のように仲の良い3人、お互おひがいを傷付ける苦しみはお互いがよく分かつている。

「『めんなさい、でも私はもう過ちを犯した、それでもあなた達は私を受け入れられるの？』

「何を言ひ、緊那羅きんならはアタシの姉様だ、受け入れるに決まつてるだろ」

「それに、緊那羅は鬼に操られてた、そつ報告書に書いてあつたわよ」

緊那羅は阿修羅に抱きつき大きな声をあげて泣いた、摩和羅女はそれを見て抑えていた涙が頬をつたう、それをみて阿修羅は摩和羅女を抱き寄せた、阿修羅は一人の頭に顔を埋めて涙を流す、殺しあつた傷を洗い流すように。

3人は落ち着くと身支度をした、まだ任務は残つてる。
3人が部屋を出ると壁に寄りかかってる金色孔雀がいた、3人は軽く目を合わせるだけで素通りしようとした。

「全部聞かしてもらつたよ」

金色孔雀はそう言つと阿修羅が提出した報告書をその場で破いた、3人の顔色は険しくなる。

「嘘は良くないな」

「何が言いたいの？罰なら私が受けれる、この二人はホーリナーとして正しい選択をしただけだ」

緊那羅は金色孔雀の前に立ち頭を下げた、プライドの高い緊那羅が「ひいう事をすることは皆無。」

「当たり前だよ、緊那羅、君はダークロードに加担した、その罪は

重い、それに君のした行為は神を侮辱する行為だ」

「殺すか？記憶を消すか？」

「そんな事は私がさせない、緊那羅は大切な仲間、場合によつては

生き残り

私は緊那羅を助ける

阿修羅は腕輪に手を近付けた、摩和羅女も同じ、緊那羅はそれを制止しようとすると、それよりも速く金色孔雀が前に出た。

「君達、自分の立場が分かつてないみたいだね、ダーコロードに加担した緊那羅を独断で追つた事、報告書に嘘を書いた事、それを大目に見てあげようと言つてるんだよ」

「そうよ、コイツも鬼じやない、記憶を消すくらいだろ？」

「それがダメなの！」

「どうやら君達にも罰が必要みたいだね」

3人は息を飲む、金色孔雀はポケットに手を突っ込み嫌な笑みを浮かべた、そしてポケットから鍵を取り出す、その鍵が示すのは罰への片道切符。

「備蓄倉庫の掃除頼んだよ」

「えつ？」

「だからあ、備蓄倉庫の掃除、これが君達の罰」

「本当にそれだけで良いの？」

「当たり前だろ、君達3人を失うのは日本支部にとつて大打撃だ、それにホーリナーも人間だもん、過ちの一つや一つ許すよ、死人も出なかつたし」

「良かつたね、緊那羅、摩和羅女」

阿修羅が笑顔で一人を見ると、床に座り込んで肩を抱き、歯をガチガチと震わせながら震えていた、顔は青ざめ、表情は恐れに満ちている。

阿修羅は不安になり一人の肩を揺らして問掛けるが返事はない、そして見上げると恐ろしい笑みを浮かべた金色孔雀がいる。

「君達に拒否権は無いよ、阿修羅、二人を連れてきて」

金色孔雀は鍵を人差し指で回しながら歩き始めた、阿修羅は緊那羅と摩和羅女に肩を貸して金色孔雀の後を追つ。

地下の多目的スペースの上にある備蓄倉庫、そこは扉越しでも分か
るくらいに異様なオーラを放つてゐる。

金色孔雀は鍵を開けると、扉を開けて3人に中に入るよう指示する。

3人が中に入ったのを確認すると鍵を閉め、外から灯りを付けた。

「「「イヤアアアアア！」」」

3人のつんざくような悲鳴、そして大きな物音、扉を必死に叩く音、
助けを求める声。

3人のトラウマがまた一つ増えた。

15・備蓄倉庫（後書き）

やつと仲直りしました、備蓄倉庫の中身は想像にお任せします、精
神力のあるあの3人がトラウマになるくらいの恐怖です。
評価やコメント、アドバイス等をいただけたと今後の励みになりま
す、良ければお願いします。

Japan VCSO Japan branch office

迦樓羅、摩醯首羅、摩侯羅迦は日本支部に戻つて来ていた、理由は鬼の情報を掴み、最後の戦いの邪魔となる鬼を排除しあえたため、着々と日本支部では鬼を一掃する準備が出来ている。

しかし部長室には誰もいない、「ここに迦樓羅達を呼んだのは金色孔雀、呼んだ張本人がいない事に摩醯首羅はイライラしていた。

「アーッは抜けている、緊張感が足りない」

「まあ良いんじゃないの、ゆっくり休んでようよ」

「そ、うだぞ摩醯首羅！ そんなにイライラしてたら将来つるっぽげ」

最初は摩醯首羅の出す負のオーラに着いて行けなかつた迦樓羅だが、最近はそれを受け流す事を覚えた、慣れとは怖いモノだ。

「何だよ、お前らもいたのか」「久しぶり！」

エレベーターからの階段を上がつて来たのは毘楼勒叉・毘楼博叉ペア、一人も金色孔雀に呼ばれた。毘楼勒叉は金色孔雀がココにいない事を聞いてキレた、そしてそれをなだめる毘楼博叉、いつもの光景だ。

「あの女つたらし、僕達を集めて自分が来ないなんて何様のつもりだ」

「そういえば摩和羅女の車はあつたよな、つていうことは摩和羅女・

迦樓羅の言つた事に全員が反応した、そして各々が各々の思考を廻らせる。

「（女だけに美味しいモノ食わしてるのか！？）」「（ついにホーリナーにも手を出したか）」「（もしかして僕達に内緒で秘密の特訓とか！？）」「（皆の考えに水をさすようで悪いけど帰つて来たよ」

迦樓羅が指差した方には笑顔の金色孔雀がいる、そして後ろからは衰弱しきつた3人が歩いて来て、真ん中で全員倒れた。

「（そんなに食わされたのか！？）」「（そんなにハードなのか！？）」「（（そんなに戦つたの！？））」「（何があつた！？）」「

金色孔雀は笑顔で座ると迦樓羅と女3人以外がデスクの前に集まる、その表情は全員が険しい。

迦樓羅は4人をシカトして倒れてる3人の方に行つた、3人は衰弱しきりピクリとも動かない、乱れた団服に髪の毛、そして頬の涙の痕。

「実は3人に備蓄倉庫」「「「イヤアアアアア！」」」

「備蓄倉庫」という一言で3人は起き上がつた、そして3人は抱き

会いお互いを慰めるように震えている。

「ボス、3人を備蓄倉庫に入れた?」

「掃除してもらつたんだあ」

迦楼羅は呆れて頭を抱えた、他の4人は備蓄倉庫を想像して震えている、全員が備蓄倉庫の事を知っているからだ。

「とりあえず、みんなに集まつてもらつたのは備蓄倉庫の話をするからじゃない、迦楼羅達が入手した鬼に関する情報の整理、考察、対象だ」

その瞬間部長室にいるホーリナー全員の顔が変わった、今まで脅えていた阿修羅達も、震えてあた摩醯首羅達も、頭を抱えていた迦楼羅も、おちゃらけていた金色孔雀も。

「鬼は全てを統括する親分が1体、そして四天王と呼ばれる鬼達、計5体で牛耳られている、そしてその四天王の1体は阿修羅達が倒してくれた」

阿修羅達は神社での戦いを思い出した、異常に強い鬼、それと同じようなのがあと3体にそれより強いのが1体、部長室に緊張が走る。の、VCSOの各國支部でも最強クラスだ。

「今から言つことを頭に入れて阿修羅達と鬼の戦いの結果を聞いて、阿修羅は既に日本支部最強だ、そして2番手だけど強さは明白な緊那羅、そしてこの最強の前衛にホーリナー最強クラスのバックの摩和羅女、この3人のグループは恐らく神選10階には及ばないもの

そして鬼との戦いの結果、確かに勝つた、鬼の群れと四天王を相手にしてだ、しかし摩和羅女は背中全体を負傷で重体、緊那羅は腕を

碎かれ重傷、阿修羅も脇腹と肩を突き刺され重体、分かるな？奴らの強さは異常だ」

全員が息を飲む、そして残りの鬼の多さと強さに絶望感が生まれた、いつになく真剣な金色孔雀の顔がそれを物語っている。

「IJの鬼共を明日殺す」

「ちよつとまてよ、それなら神選10階に頼んだ方が得策だろ、そんなんに急ぐ必要があるのか？」

迦樓羅が金色孔雀の提案を拒否した、それくらい今行くといふ」とは無謀な事。

「鬼は気付き始める、もう時間が無いんだ、神選10階の派遣には1週間以上かかる、このままだと総攻撃をされて日本支部は墜ちる、だから俺達でやるしかないんだよ」

神選10階は任務等が世界全土なタメに要請してから派遣までに時間がかかる、この自体に気付くのに時間を食い過ぎた。

「今回は2人一組で動いてもらいつ、これは俺が考えられる被害を最

小限に抑えるペアだ。

毘楼勒叉と毘楼博叉、緊那羅と迦樓羅、摩醯首羅と摩侯羅迦、……

……」

当然のペアだ、毘楼勒叉と毘楼博叉は言わずもがな、緊那羅には長年同じ隊の迦樓羅、摩侯羅迦の野生的な動きと連携が取れるのは摩醯首羅だけ、そして……。

「阿修羅と摩和羅女、それに俺だ」

全員驚きの表情を隠せない、金色孔雀が任務に出るのはしょうがない、しかしそれが何故このグループなのかだ。

「俺と阿修羅と摩和羅女は親分を相手にする、他の奴らは四天王を相手してもらひ」

最強の3人と呼ばれた阿修羅達でも瀕死だつた四天王にたつた2人で相手する、全員が息を飲み覚悟した、万が一を。

「つて事で今日は前祝いだよ！皆で食事会だ、そんで明日は後夜祭で食事会、遅刻者なし欠席者は備蓄倉庫の掃除、分かつたね？」

全員が返事をする、「コレは金色孔雀の遠回しの願いだという事が全員が分かつたからだ、そして全員はエレベーターに乗り込んだ。

食堂ではいつもの光景が広がっている、迦樓羅がとつた料理を緊那羅が横取りし、毘楼博叉が毘楼勒叉の分までとり、摩侯羅迦の制御をしながら摩醯首羅も食べる。しかし摩和羅女だけは違つた、阿修羅が取り分けた食事すら手をつけようとしない。

「どうしたの？」

「怖いんだ、阿修羅や緊那羅、他の皆がいなくなるかも知れない、もつ会えないかも知れない、それが怖い」

「大丈夫よ、私達があつという間に倒して助けに行けば良いじゃない」

「そうだ！ そうだな！ うん！ そうだ！」

摩和羅女は何かがふつきたように食べ始めた、全員が怖い、今隣にいる人が明日にはいなくなつてるかも知れない、しかし全員の答えは出でている、勝ち、それ以外の何物でもない。

「阿修羅！ 帰つて来たらくれーふを食べに行こつ！ 緊那羅もだ！」

「そうね、ゴマの団子も食べたいし」

「邪道じやないの？」

「邪道も一興」

3人はクスクスと笑つた、再び食べ歩きをする事を誓い。

16・前夜（後書き）

ラストスパートです、最後まで読んで頂けたらありがとうございます。

17・テレパシー

Japan shrine

毘楼勒叉と毘楼博叉は鬼に囮まれている、残りの鬼は全てが神社を拠点として、そこにいる者全てが鬼、力がある鬼をなんとしても守るタメだ。

鬼達は毘楼博叉と毘楼勒叉を待っていたかのように集まつて来た、一人は腕輪に触れて構える、得物は2本のハンドアックス、名は毘楼勒叉が右京、毘楼博叉左京。

「いっぺいいるね」

「量だけで僕達に勝てると思ってるの？」

「だとしたら笑えるね」

「アハハハハハ！」

二人は天使の笑みで笑つた、しかし中身は鬼をも恐る悪魔。

「殺し放題！」

「斬り放題！」

「逃げるなら今のうち！」

二人は同時に左右に走つた、物凄い勢いで鬼を斬つていく、毘楼勒叉が後方に物凄い勢いで右京を投げると血まみれで手元に戻つてきした、否、鬼を貫いた左京が飛んで來たのだ。

二人はテレパシーにも似た意思疎通で相手を見ずに得物を投げて、鬼を殺すのと同時に相手の投げた得物を受け取る、毘楼勒叉と毘楼博叉しか出来ない高速ジャグリングだ。

「毘楼博又！楽しい！？」

「楽しいよ！毘楼勒又は！？」

「最高…血の臭いでむせかえりそうだよ…」

「アハハハ！僕も！」

鬼達は目の前のホーリナーだけではなく、後ろや横から飛んで来る得物を気にしなければいけないので、相手が一人でも思うように動けずに入いる。

鬼が戸惑つてゐたせに一人の白かゝた団服は眞に赤に染まつてゐる。真つ赤に染まつた顔は無邪気な笑顔を浮かべ、鬼が近付くのを戸惑うくらい異様。

二人が徐々に近付くにつれ鬼が減っていく、最後の一體になつた鬼は逃げ出そうとしたが右京と左京が頭に刺さり倒れた。

「アーティスト！」

二人が背中合わせでガツツポーズをすると、境内から一番偉そうな坊主が出てきた、二人は笑顔で腕輪に触れて坊主を睨んだ。

「毘楼博叉、ラスボスだぞ」

「ホントだ、死にに来た」

坊主は鬼の死体の中に立つてゐる一人を見て迷わず鬼と化した、スラッとした人に限りなく近い鬼、鬼は黒い穴から刀を取り出すと構えた。

「何か楽しそう」

「どっちが殺せるか勝負だ！」

「良いよ」

鬼は一人の事を無視して地面を蹴つた、毘楼勒叉が横に避けると、毘楼博叉は鬼の上段からの攻撃を受け太刀する、鬼が一瞬止まった時に毘楼勒叉が横から走ってきた。

鬼はバックステップで避けるが毘楼博叉が前に踏み出しながら横薙に払う、鬼が左京を受け太刀すると右京が顔面めがけて飛んで来た。鬼は片手で得物を持つと右京をもう一方の手でキャッチした。

「ナイスキャッチ」

「アンドがら空き」

毘楼博叉は空いた脇腹をもう一方の左京で斬ろうとした、しかし鬼は掴んだ右京で受け太刀をしようとする。

「「残念だね」「

右京は銀色の液体になると鬼の手元から消えた、左京は鬼の脇腹に刺さるが鬼に腕を掴まれて振りきれなかつた。

鬼は毘楼博叉の腕を掴んだまま、毘楼勒叉の方に投げ飛ばした。

毘楼博叉は凄まじい勢いで毘楼勒叉に飛んで行くが、二人は目を見

て笑うと、毘楼勒叉が横に少しズレ、右京と左京をひっかけた。

毘楼博叉は毘楼勒叉を軸にしてそのまま鬼に方向転換する。

毘楼博叉は勢いを殺さずに地面を蹴ると、力一杯左京を振り下ろした。

鬼は圧されながらも受け太刀すると毘楼博叉を弾き飛ばした。

上空に上がった毘楼博叉の下から毘楼勒叉が現れ、横薙に斬りかかる、鬼はそれよりも速く毘楼勒叉の肩から脇にかけて斬つた。

「クハツ！」

「毘楼勒叉！」

毘楼博叉は鬼に左京を投げて毘楼勒叉から遠ざけると、毘楼勒叉の隣に行つた。

「毘楼勒叉！早くこれ飲んで！」

毘楼博叉はポケットから出した水薬を毘楼勒叉に飲ませた、それは医療班が作った止血薬、生き長らえるための悪あがきだ。

「休んでて、僕がアイツを殺してあげるから」

ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ

毘楼博叉の天使の笑顔が禍々しく歪む、それは身も心も惡魔に染めた神の怒り、始めて怒り溺れた神だ。

「エクスペンション【拡大】」

毘楼博叉の左京が巨大化する、その大きさは2mをゆうに越える大きさ、しかし毘楼博叉にかかる重量は全く変わらない。

「死ね」

毘楼博叉は地面を蹴った、毘楼博叉は巨大化した左京を振り下ろすが鬼に避けられた、しかし地面が砕けその破片が鬼の体を傷付ける。毘楼博叉は振り下ろした左京を持ち上げると同時に、もう一方の左京を横薙に払つた。

鬼は何とか刀で受けるがそのまま境内に突っ込んだ、埃などで鬼は見えないが、相当弱っているハズ、毘楼博叉は無表情で境内に近付いた。

毘楼博叉が覗くとそこには何もない、そして毘楼博叉がそれに気付くのと同時に隠れていた鬼が斬りかかって来た。

毘楼博叉は巨大化した左京で受けるがあつという間に鬼は後ろに周りこんでいた、鬼は突こうとしたが毘楼博叉がなんとか受けた、しかし不安定な体制で防御したために体制を崩し、鬼に蹴り飛ばされた。

「クツ！」

毘楼博叉は境内の壁をぶち抜き外に出た、左京を地面に突き刺しその上に乗つてブレークをふんだ。
しかし鬼はあつという間に毘楼博叉の目の前まで来ていた、毘楼博叉は片手で防御して、鬼を弾き飛ばすとそのまま鬼に左京を振り下ろした。

鬼は左京を避けて、地面に突き刺さつた左京の上を走つてゐる、片

方は自分の足場、もう片方は目の前で突き刺さっている、そして今から手を離し新しい得物を出したとしても遅い。

毘楼博叉は逃げる思考回路を無くした時、鬼は何かを見つけて左京から飛び下りた、そして鬼のいた場所をハンドアックスが素通りする。

鬼ど毘楼博叉がその方向を見ると毘楼勒叉が立っていた、顔には大粒の汗を浮かべている。

「毘楼勒叉、復活」

「良かつたあ、これで一気に有利になつたね」

「ふうん、神域に達したんだ」

「そうだよ」

一人は不気味な笑みを浮かべると横に並んだ、そして先に飛び出したのは毘楼博叉、毘楼博叉が巨大化した左京を振り下ろすと、既に鬼は上空にいた、毘楼勒叉がもう一方の左京に捕まると毘楼博叉は思いつきり左京を振った。

毘楼勒叉は鬼まで到達すると、空中で素早く斬りあつ、そして毘楼勒叉がわざと力を抜いて地面に落ちた時、鬼に向かつて巨大化な左京が飛んできた。

鬼は受けのと同時に強く弾かれ、地面に叩き付けられた。

「「双子を甘くみるな」」

二人は笑顔でハイタッチして鬼を見る、鬼はしぶとく立ち上がり懲りずに走つて来た。

毘楼博叉は引き付けて左京を振り下ろす、鬼は避けようとはせずにそのまま左京を掴んだ、そして力任せに左京ごと毘楼博叉を投げ飛ばした。

「えええええ！？」

毘楼博叉は地面に左京を突き刺してブレーキをしてそのまま走つて鬼に向かつた。

鬼は毘楼勒叉と斬りあつてゐる、純粹に斬りあえれば毘楼勒叉は不利だが、双子なら形勢逆転。

毘楼勒叉が口角を上げると鬼はバックステップをした、行き違つようには左京が目の前に振り下ろされる。

左京が持ち上ると毘楼勒叉は一目散に走つた、そして毘楼勒叉の間合いに入る前に毘楼勒叉は上に跳んだ、毘楼勒叉の足下を左京が通り鬼に斬りかかる、鬼は足を踏ん張つて受け太刀をした。

「力持ちだね」

「関心してゐる場合？」

「違うね」

毘楼博叉が左京を引くと、鬼は毘楼勒叉めがけて走つて來た。

毘楼博叉は毘楼勒叉の手前で鬼に左京を振り下ろすが避けられた。鬼は左京をジャンプして刀を振り上げてゐる、完璧なタイミング、

このタイミングならば左京に邪魔されずに毘楼勒叉を斬れる。

しかし鬼は毘楼勒叉を見て顔が引き吊つた、毘楼勒叉の右京が左京同様に巨大化している、毘楼勒叉は満面の笑みで鬼に向かつて右京を振り下ろす、鬼は受け太刀をするが、後ろから左京が來てゐる。

「死ねえ！」

鬼は一人の合わさつたハンドアックスの真ん中で斬られてゐる、二

人は得物を戻すと同時に倒れた。

「双子つて便利だね、なんでも共有できる」

「神域もね」

「アハハハ」

「「疲れたね」」

二人は目を瞑つた、子供のような寝顔、血で真っ赤に染まつた団服を華やかに見せる寝顔がそこにある。

Japan shrine

摩醯首羅と摩侯羅迦は神社にいる、例の如く一人のホーリナーは鬼に囮まれている、摩醯首羅は表情が見えないので心境は分からない、摩侯羅迦は口を大きく開けている、それが捕食か興奮かは分からない。

二人は同時に腕輪に触れた、摩醯首羅の得物は槍、名は胤舜、摩侯羅迦の得物は鋭い爪と牙、名は狼嚇。摩侯羅迦は低い声で唸ると四足になる、摩醯首羅は低い位置で胤舜を構えると腰を落とした。

「グルルルウ」
 「待てないのか？」
 「ガウ！」
 「なら残さず食えよ、残したら死ぬぞ」
 「グワウ！」

摩醯首羅の合図で摩侯羅迦は走り出した、地面を爪でえぐりながら突進する。

一体目は心臓を一突きして殺す、そのまま鬼を投げ飛ばすと右から来た鬼の喉元を搔き切つた。
 左の鬼は裏拳を放つように喉元を切り裂く、そのまま両手を地面に着き、前方の鬼の顔に噛みつくとそのままぐつた。
 摩侯羅迦の周りは喉元を切り裂かれた鬼、顔面をえぐられた鬼、心臓にぽつかりと穴を開けられた鬼、どれもが無惨に散らばる。

摩醯首羅は飛込んだ摩侯羅迦をばーっと眺めている、見慣れた光景、見慣れた朱に染まる摩侯羅迦、聞き慣れた雄叫び。

「えげつないな、…………お前も俺の楽しみを邪魔するな」

配合から近付いて来た鬼を何も見ずに射殺した、心臓を一突きされた鬼はぐつたりと倒れ込む。

それが合図になつたかのように鬼が突進して来た、摩醯首羅は広い間合いで次々と心臓を突き刺す、キツツキの如く動く槍、それは避ける事も止める事も受ける事も出来ない、キツツキもとい五月雨、出来るは鬼の山。

「グルア！」

摩侯羅迦は摩醯首羅の頭の上から摩醯首羅の前に飛び下り、摩醯首羅の鬼をも切り裂き始めた。

「人様の獲物まで盗るな、お前はお前の…………、つて終わつたのか」

摩醯首羅が後ろを向くとグチャグチャになつた鬼の山、そしても日の前にはグチャグチャになるであろう鬼達。

摩醯首羅

モケイショラ

モケイショラ

摩侯羅迦はめんどくさくなり摩侯羅迦が戦つてゐるのを観戦する事にした、凄まじい勢いで鬼が倒れていく、それと同時に摩侯羅迦の体は返り血で濡れる。

摩醯首羅が止まると周りには鬼の死体だけが転がつてゐる、真ん中で爪に付いた血を舐めて綺麗にした。

「摩侯羅迦、大将のお出ましだ」

「ウウウウウウ」

二人の前に現れたのは異常にデカイ鬼、2m50はありそうな巨体に異常なまでの筋肉、二人は気構えた。

「氣を付ける、今までの鬼とは違う、今までのが鰯だとしたらコイヤツは鮫だな」

「グルルルルウ」

「行くぞ」

「ガウッ！」

摩侯羅迦がスタートすると同時に摩醯首羅もスタートした。

摩侯羅迦は鬼の顔に飛びかかると鬼は手の甲で摩侯羅迦を弾いた、腕が開いた時に摩醯首羅は肩口に胤舜を突き刺すが途中で止まってしまった、理由はその強靱な筋肉。

「そういうこと」

「グルウ！ガウ！」

摩醯首羅は胤舜を引き抜くと摩侯羅迦が再び飛びかかる、鬼は再び弾こうとしたが、摩侯羅迦は腕にしがみつき腕を噛んだ、歯は刺さつたが噛み千切る事は出来ない、摩醯首羅が胤舜で摩侯羅迦を鬼から引き離すと間合いを取つた。

「キュウウン」

「落ち込むな、アイツの筋肉は異常だ」

「クウン」

「手は考える、それまで動けなくならない程度に頑張れ、俺もフオローする」

「ワウ」

「モード」

摩侯羅迦は地面をえぐりながら鬼に突進した、それに続いて摩醯首羅も走る。

摩侯羅迦は飛びかからずに足下に潜り込んだ、摩侯羅迦が足に爪をたてると足は浅く切れた、しかしそれと同時に鬼は摩侯羅迦を蹴り飛ばす。

摩醯首羅は思いっきり胤舜で薙払つた、一瞬鬼の動きがにぶつたのを摩醯首羅は見逃さず、一度胤舜を引いて鬼の股を突き刺した。筋肉と筋肉の間に入り込み骨まで達する、鬼は団太い悲鳴をあげながら胤舜を掴んだ、摩醯首羅は胤舜を離し再び腕輪に触れた。

「摩侯羅迦！」

「ガウ！」

摩侯羅迦は鬼の左側から鬼の顔に飛び付いた、右手首を左手で掴み力一杯顔をひつかく、鬼の左目は潰れてもがいでいる。

鬼は摩侯羅迦を殴ろうとするが拳を胤舜が遮る、鬼が胤舜を殴ると胤舜は鬼の首に打ち付けられた、鬼は自分の力が強い分首に加わるためダメージは大きい。

摩侯羅迦と摩醯首羅は横に並び鬼を睨む、摩侯羅迦の体は打撲が酷く肋骨等は折れている。

「大丈夫か？」

「クウウン」

「奴を倒す方法はあるがお前が危険になる」「ワウ！」

摩醯首羅は摩侯羅迦に説明を始めた、鬼はこれから起こる事に楽しみをつのらせ待っている。

摩醯首羅の話が進むにつれ摩侯羅迦の表情が曇つていいく、そして終わると同時に摩侯羅迦は息を飲んだ。

「出来るか？」

「ガウ！」

「悪いな、そしたら合図したらスタートだ」

摩侯羅迦は全力で鬼に向かつて行つた、摩侯羅迦は鬼の懷に潜り込んだ、下から突き上げるように喉元を狙うが軽々と弾かれる、摩侯羅迦は怯まずに再び跳びかかつた、しかし何度も同じ事。

摩侯羅迦は大きく間合いを取ると下から掬い上げるように砂を鬼の顔にかける、鬼は使えない左目に加え砂のせいで右目も見えなくなつた。

「今だ！跳べ！」

「グルア！」

摩侯羅迦がジャンプする前に摩醯首羅は右手で胤舜を引いている、左手は先に添える程度、そして摩醯首羅が向けているのは刃ではなく柄の方、つまり当たつても打撲程度だ。

「エクステンション【延長】」

胤舜を突き出すと胤舜は伸びた、そしてその先にはジャンプしてい

る摩侯羅迦がいる、摩侯羅迦は足の裏を胤舜に向けると胤舜に押さ

れるような形になった、胤舜に押されながら鬼に向かっている。

摩侯羅迦が右手を突き出すのと同時に鬼の肩を貫いた、しかし鬼は

摩侯羅迦を掴みそのまま地面に叩き付けた、摩侯羅迦はそこで意識

を失い力なく倒れる。

摩醯首羅は唇を噛み締めながらポケットに手を突っ込んだ、摩醯首羅が一番恐れていた状態、この状態になつた場合の対処法を摩醯首羅は一番嫌つていた。

「今度は何日かな」

摩醯首羅はポケットから取り出した薬を飲むと摩醯首羅の心臓のポンプ運動が急激に速まる、そして胸に手を当ててその場に膝を着いて倒れこんだ。

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア」

強く胸を押さえると吐血した、摩醯首羅はフラフラになりながら立ち上ると胤舜を構える、意識が飛びそうになるのを必死で堪え、鬼を睨んだ。

「体がもたない、速攻で終らせるぞ」

摩醯首羅は軋む体を無理矢理押さえ付け、地面を蹴った、振動が加わる度に体がバラバラなりそうになる、呼吸をする度に肺が破裂しそうになる。

内出血した箇所は皮膚から血が流れ出している、体は紅潮して体温は急上昇、この一手を外せば摩醯首羅は死ぬ。

摩醯首羅が鬼の懷に潜り込むと鬼は擁挙おうとした、しかし摩醯首羅が鬼の腕を殴ると楊枝のように折れてしまった。

摩醯首羅は鬼の喉元に胤舜を突き付け鬼を睨んだ。

「エクステンション【延長】」

胤舜が伸びると同時に鬼の頭が軽々と吹っ飛んだ、そのまま倒れると意識を失った。

摩醯首羅はそ

摩醯首羅が飲んだ薬、それは筋肉増強剤、しかも短時間で人間のそれを遙かに超える力を得られる、それ故に代償も大きい、ホーリナードといえど1週間は体が動かせない、摩醯首羅の最長記録は20日、それほどのリスクが伴う薬、脆刃の剣とはこの薬のためにあるようなものだ。

18・脆弱の剣（後書き）

大変です、書き済めが無くなりかけてます、もうそろそろ終わるの
で根性で執筆しますのでこれからもよろしくお願いします。

Japan shrine

迦樓羅は一人で敵に囮まれている、緊那羅神社の屋根から迦樓羅を観察してゐる、迦樓羅は緊那羅に逆らえず無理矢理放り込まれた。迦樓羅は毎度の事ながら緊那羅のスバルタは悩みの種だ、緊那羅は本当に死にかけ無いと手出しあしない。

迦樓羅は腕輪に触れた、得物は鎖鎌、名は首切。
迦樓羅は鎌の方を回しながら鬼を品定する。

「緊那羅、遊ばない？」

「あんたはこんなか弱い女の子を血で汚すの？」

「（か弱い女の子は屋根の上から觀戦なんてしないよ）」

迦樓羅は心に思つても決して口には出来ない、四天王が出てきても助けてくれない可能性があるからだ。

「迦樓羅、いきま～す」

迦樓羅は鎌を投げて戻す時に鬼を斬り殺す、次々と上半身だけの死体と下半身だけの死体が出来上がる、緊那羅は予想通りと欠伸をしながら眺めた。

しかし欠伸をしている緊那羅の後ろから忍び寄る鬼、緊那羅は眠そ
うな目をしながら迦樓羅を眺める、鬼が拳を振り上げるが体に鎖が
巻き付く、そのまま鎖に引きずられて地面に落とされた。

「自分の事くらい自分でどうにかしろー」

「守ってくれるだろ？」「

（可愛くねえ）」

緊那羅は腕輪に触れた、得物は納刀された刀、名は羅刹。
緊那羅は屋根の端に立つと体を前に倒した、頭から落ちると腰で羅刹を構える、そして鬼の頭めがけて抜刀した、鬼は体をずらして避けると隣に一回転して着地する、そして並ぶように立ち鬼を睨んだ。

「迦樓羅、終わつたか？」

「終わったけどよお、お前少しほは緊張感持て」

迦樓羅の鎖は鬼の腕に巻き付いている、そのお陰で緊那羅は殴られずに済んだ、しかしこれは慣れた事、緊那羅を極力戦い易くするのが迦樓羅の役目。

「さあて、久しづぶりにやりますか」

「私の足を引きずりないでよ」

「分かつてゐよ」

緊那羅が鬼の腕に絡まつてゐる鎖を掴んだ、迦樓羅は鎖をほどくと

緊那羅」と引き寄せた。

緊那羅は迦樓羅の隣に行くと腰を低くして構える、迦樓羅は分銅を

回すと緊那羅と鬼の両方の動きをうかがう。

緊那羅は思いつきり地面を蹴るとあつと/or>う間に鬼の懷に潜り込む、

鬼は拳を緊那羅に向かつて放つが迦樓羅が分銅で弾いた。

緊那羅は抜刀の鞘走りを利用して、右の脇腹から左肩にかけて切り上げようとする、しかし羅刹は脇腹を軽く斬ると羅刹は鬼の体に食い込んだまま動かなくなつた。

「……最悪」

鬼は腕を大きく振り上げると緊那羅を殴り飛ばした。

緊那羅は何とか鞘で直接の攻撃を防ぐが体は軽々と宙に浮く、緊那羅の体はあつという間に首切の鎖が巻き付き、迦楼羅の方に引っ張られた。

迦楼羅は飛んで来た緊那羅の体を片手でキャッチすると鬼を睨む、緊那羅は埃を叩き羅刹を納刀した。

「少しばかり考えて行動しようよ」

「不可抗力だ、それにあんたがいるから無茶出来る、信頼してるからな」

「そこまで言われたら死んでも死なせられないな」

緊那羅は口角を上げて上体を起こす、そして羅刹を抜刀すると右手に羅刹、左手に逆手に持った鞘、これが示すのは緊那羅が本気といふ事。

緊那羅は地面を蹴ると再び鬼の懷に潜り込む、鬼はサイドステップで避けると緊那羅を真上から叩き潰そうとする、しかし緊那羅軽々と避けると思いつきり飛び上がった。

緊那羅は羅刹を思いつきり振り上げて鬼の頭に振り下ろした、鬼は右腕で防御するが羅刹が刺さる、鬼は左腕を大きく振り緊那羅を難払うが左腕は空を切った。

緊那羅は鬼が防いだ瞬間に迦楼羅によつて戻されていた、緊那羅が後方に引っ張られてる時に迦楼羅とすれ違う、迦楼羅は首切の鎌で斬りかかつた、首切は鬼の太ももに刺さり止まる。

「そういう事、確かに不可抗力だな」

鬼は首切が刺さつて動けない迦楼羅を右腕で弾き飛ばした、迦楼羅は首切をしつかりと握っていたために緊那羅が鎖を引っ張り迦楼羅

を引き寄せた。

迦樓羅はなんとか緊那羅の隣に着地すると息を整えた、緊那羅の額から先ほど鬼に殴られた時の傷がある、迦樓羅も然り。

「ありえない装甲だな」

「鬼はそんなもんだろ」

「便利な生き物だな」

「憎たらしくだけだ」

迦樓羅は軽く笑うと地面を蹴つた、緊那羅は羅刹を納刀すると腰で構え体制を低くする。

迦樓羅は鬼の5mくらい前で分銅を投げる、鬼は顔の手前で分銅をキヤッヂすりといつの間にか迦樓羅が後ろに回り込んでいた。

迦樓羅は背中に鎌を突き刺した、鎌は例の如く刺さったまま抜けなくなつた、迦樓羅は一旦間合いを取り、体重全部を乗せて鎌を殴る。鎌が深く刺さると声にならない悲鳴を上げて、振り向き様に迦樓羅を殴り吹き飛ばす。

「グフツ！」

「ベロシティ【光速】！」

鬼は緊那羅の攻撃をギリギリで右腕で防御した、羅刹は鬼の右腕の骨で止まる、左腕を振り上げた鬼は苦しみながらも緊那羅は睨む、目があつた緊那羅はにっこりと微笑んだ。

「ヤバめ」

最大まで振り上げた時、鬼の左腕に鎌が絡みつき一瞬止まる、その間に緊那羅は羅刹から手を離し間合いを取る。

鬼は左腕を思いっきり振ると鎌を持った迦樓羅が宙に浮いた。

迦樓羅は人形のように飛ばされると鬼の右手に納まる。
かるら

「迦樓羅！」

「来るな！……………大丈夫だから」

迦樓羅は辛うじて空いていた右手で鎌を持ち、鬼の顔に鎌を投げた、
鎌は真っ直ぐに鬼の左目に刺さり、鬼は迦樓羅を手放した。
迦樓羅は間合いを取ろうとしたが鬼に左腕腕を掴まれる、鬼は左腕
を持つたまま持ち上げる。

バキバキバキバキ！

一
邊
樓
羅
あ
！

迦樓羅の左腕の骨が砕ける音、緊那羅は怒りに歪んだ顔で走り出す、
その間に腕輪に触れて羅刹を抜刀した。
鬼は迦樓羅を離さずに迦樓羅の体を掴んだ。

鬼はそのまま左腕と迦樓羅の体を逆方向に引っ張る、迦樓羅の筋織維が切れる音と共に迦樓羅の左肩から先は引き千切られた。

その瞬間迦樓羅は気を失い、鬼は迦樓羅の体を緊那羅に投げつけた。

緊那羅は迦樓羅を受け止めると勢いで吹き飛ばされた。

「迦樓羅！迦樓羅！」
かるら
かるひ

緊那羅は鬼から間合いを取ると迦樓羅に呼びかけた、しかし迦樓羅は苦悶の表情を浮かべたまま動かない、その間でも迦樓羅の肩から

はとめどなく血が流れ出す。

緊那羅は迦樓羅のポケットから水薬の血止め薬と丸薬の増血剤、丸薬を迦樓羅の口に入れ水薬を流し込むがすぐに吐き出してしまった。

「クソ、高くつくわよ」

緊那羅は自分の水薬と丸薬を口に含み顔を迦樓羅に近付けた、緊那羅は顔を真っ赤にしながら迦樓羅と唇を合わせる、そのまま迦樓羅の口に直接薬を流し込んだ。

緊那羅は顔を離すと顔を真っ赤にして鬼に振り返つた、しかし振り返つた時には怒りに満ち溢れた表情。

鬼は不気味な笑みを浮かべ左腕が無く横たわる迦樓羅と怒りに満ちた緊那羅交互に見る。

「許さない、鬼なんて許さない、私の大切なモノばかり奪う、……
絶好に殺す！」

ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、
ドクンッ、ドクンッ！

「ノハラ」 [共識] 一

ノハシ
共

耳の奥を直接振動させるような高い超音波のような音が響き渡る、
緊那羅は羅刹を抜刀し構える、音は小さいが鳴り続けている。

「あんたには生易しい死の方は提供出来ない、あんたで奏でてやる」

緊那羅は地面を思いつきり蹴つた、懷に飛び込み大きく沈むが鬼の拳が降つてくる、緊那羅は鞘で防ぐと一瞬音が大きくなり拳が弾かれる。

累那蘇は強がれた腹の腹は累殺を突き刺す。累殺はヤーとセー先が

キイイイイイイイン！

音が辺りを支配し地面がビリビリと揺れる、鬼の肘から先が大きく揺れ始め、肘から爆発するように千切れた、鬼は地面を揺らしながら団太い悲鳴を上げる。

「振動で破裂させた、あんたは私に触れる事は出来ない」

鬼は大きく悶えながらもう一方の手を振り上げる、緊那羅は鬼を睨んだまま佇む。

鬼の手が緊那羅の横顔を殴ろうとするとき、羅刹が拳に突き刺され、再び大きな音をさせると拳が破裂する。

緊那羅は徐々に鬼の血で赤く染まるが、表情は全く変えず鬼を睨み続けた。

「それくらいで騒ぐな、迦樓羅は肩から無い、あんたにもその苦痛、提供してあげる」

緊那羅は鬼の肩に飛び付くと羅刹を肩に突き刺した、高音と共に鬼の肩が破裂し血が吹き出す。

緊那羅はそのまま頭を軸にして反対に行くのと同時に、肩に羅刹を突き刺した、肩は同じように破裂し、緊那羅は飛び下りた。

「まだ意識があるの？鬼の生命力の強さもここまで来ると邪魔でしょ？でもまだ殺さない」

悶え苦しむ鬼を嘲笑うかのように緊那羅はゆっくりと鬼に近付く、鬼の表情は恐怖と苦痛に歪み更に醜くしてい。

緊那羅は手を伸ばせば簡単に鬼に届く距離まで近寄った、鬼は恐怖と苦痛から何も出来ずにいる、緊那羅が羅刹を思いつきり太ももに突き刺すと、太もものは簡単に破裂した。

鬼はバランスを崩し横に倒れると冷たい目で睨む緊那羅を見上げる状態になつた、緊那羅は構わずもう一方の足に羅刹を突き刺した、鬼の最後の足も突き刺さるのは切つ先だけだが破裂する。緊那羅は胴体と頭だけの鬼を血まみれな体で嘲笑う。

「可哀想だから殺してあげる、私は鬼じゃないから」

緊那羅が羅刹を鬼の頭に突き刺すと鬼は胴体だけになり息絶えた、
血まみれの緊那羅は羅刹に付いた血を振り落とすと納刀した。

「迦樓羅は頼んだわよ」

そう言って緊那羅が走り出すと、どこからともなく救護班が現れ、
迦樓羅を手当しはじめた。

19・共振（後書き）

あり得ないくらい遅れてすみません、色々と用事があり投稿が遅れました。

これからも遅いながらもに投稿します、最低でも一つ一回くらいは続編を出します、それまでは頑張りますのでよろしくお願ひします。

Japan shrine

阿修羅と摩和羅女は屋根の上から鬼達を眺めてる、下には大量の鬼の真ん中に真っ白なコートに銀髪のメガネ、一人の上司であるはずの金色孔雀だ。

二人は口頭自分達が頑張っているからお前がやれと鬼の海に付き落とした、阿修羅は金色孔雀を楽しんで見ている、摩和羅女は上から鬼の体に針を投げて遊んでいる。

「阿修羅、頭だ！ 100点だぞ！」

「摩和羅女なら全部100点でしょ？」

「さうでもないぞ、瞳は200点だし海馬は170点だ！」

阿修羅は吐き気を覚えた、しかし摩和羅女も子供、摩和羅女にひとつは走りながらでも1ミリのずれもなく当たられる、呼吸をするくらいに容易な事だ。

「摩和羅女お！ 僕も助けて」

「摩和羅女、助けたら嫌いになるわよ」

「ボス頑張れ！」

摩和羅女はボスを捨て阿修羅を取つた、金色孔雀は泣く真似をしながら鬼に同情を求めた、しかし鬼にとつて金色孔雀はただの敵ですらない。

「頑張つて」

「応援してるぞ！」

「俺は良い部下を持つたな」

金色孔雀は凹みながら腕輪に触れた、金色孔雀の得物は金色孔雀と同じくらいの金棒、名は碎骨。

「「初めて見た」「
初めて見せた」

金色孔雀は大きく碎骨を一振りをする、鬼は上半身だけが無くなり倒れる、碎骨に当たった鬼は異次元に上半身が消えたかのように無くなる、それだけ金色孔雀の一振りが強大という事。

「強いわね」

「…………するい」

「何が？」

「あれなら全部300点だ！あんなのルール違反だぞ！」

阿修羅はまだ鬼でゲームをしていた摩和羅女に呆れた、碎骨の棘には肉片がついている、それに阿修羅は吐き気すら覚えた。
摩和羅女の遊びも酷いが金色孔雀の戦い方も酷い、阿修羅には到底足を踏み入れられない世界だ。

あつという間に下にいた雑魚鬼達は肉片と化した、この圧倒的強さが日本支部の支部長たる理由。

「阿修羅、摩和羅女！終わったよ！」

「頑張ったな！偉い偉い」

「今降りる　！」

阿修羅が気を抜いた一瞬、足下の屋根から太い腕が現れ阿修羅を境

内に引きずりこんだ。

「「阿修羅！」」

中で壮絶な音が鳴り響いている、そして若干建物が傾く、摩和羅女は危険と判断して金色孔雀の隣に降りた。

徐々に境内から埃が立ち込め、境内を覆い隠してきた、その時、大きな爆発のような音と共に阿修羅が壁を突き破つて出てきた。

阿修羅は地面に得物、長刀、夜叉丸を地面に突き刺しブレークを踏んだ、阿修羅は擦り傷がある程度で大きな怪我は無い。

「阿修羅、大丈夫か？」

「大丈夫よ、室内だから戦い難かつただけ」

「あら、出てきちゃつたよ」

金色孔雀の一言で一人が壊れた境内の方を見ると、再び爆発のような音と共に鬼が出てきた、2mくらいの筋肉が浮き上がった鬼、鬼が地面に足を着くと同時に大きな境内は崩れ落ち、小さな瓦礫の山と化した。

鬼は空中に出来た小さな黒い穴に手を突っ込むと何かを掴み引き抜いた、得物は大斧、鬼と同じくらい大きな斧。

「さてと、俺達でボコボコにしちゃいますか」

金色孔雀は肩に碎骨を担ぎ状態を低くする、阿修羅は切つ先を斜め下に向け背筋を伸ばした、摩和羅女は両手の指の間に3本ずつ針鬼を挟んだ。

「鬼に金棒とはこの事だね」

「ボスが鬼ならぬ、間違つてもバンパイアにニンニクと同じような

意味じやないわよ」

「………… そつなんだ」

金色孔雀がダメージを受けていると鬼は、瓦礫の山を大斧で弾くと阿修羅達めがけて木や瓦が弾丸のように飛んできた。

「摩和羅女、頼んだわよ」

「了解！」

摩和羅女は無数の針鬼を投げると全てを打ち抜き碎け散った。

それと同時に阿修羅と金色孔雀が地面を蹴った、阿修羅の方が速く先に鬼に斬りかかる、鬼は軽々と大斧の刃の平面で防いだ。

阿修羅はそのまま押そうとはせず、バックステップで鬼から遠ざかると、阿修羅の頭の上から碎骨を振り上げた金色孔雀鬼の方へ飛んできた。

金色孔雀は碎骨を思いつき振り下ろすと、鬼は阿修羅の時と同じように受け太刀するが、碎骨の重さに押されて片膝を地面に着いた。金色孔雀はジリジリと鬼を追い詰めていく、鬼が粘りピタッと止まつた時、横から針鬼を構えた摩和羅女が両腕を大きく振ると一瞬で鬼の急所を貫いた。

金色孔雀は仕留めたと思い鬼から遠ざかる、しかし鬼は何事も無かつたかのように立っている。

「摩和羅女、本当に急所をついたの？」

「当然だ！一瞬で死んでるハズなのに……」

「まあ鬼だからね、急所が人間と違つても不思議じやないでしょ」

金色孔雀が一人を無理矢理納得させて構えた、阿修羅はため息を吐き再び構える、摩和羅女はそんな事はあり得ないとブーブー文句を言いながら構えた。

「はあ、急所が無いなんて、……でも、急所が無くても斬り刻めば死ぬわよね？」

「やつぱりグシャクシャでしょ」

「蜂の巣だ！」

先に飛び出したのは金色孔雀、そして摩和羅女は横に走る、阿修羅は切つ先を後ろに向けて深く沈んだ。

金色孔雀は碎骨で横薙に払う、鬼は大斧で防ぐが体制を崩した、金色孔雀も碎骨弾かれる、否、そのまま切り返し上段から振り下ろした。

鬼は持ち堪えたが横からは摩和羅女が構えている、摩和羅女は出来るだけ多くの針鬼を放つ、人間の急所や急所に成り得る場所、その他諸々を貫く、しかし鬼は顔色一つ変えずに碎骨を受け続けた。

「ボス、行くわよ」

「えつ、嘘！？ちょっとヤバいって

「ベロシティ【光速】！」

金色孔雀が横に避けたギリギリの所を阿修羅が横切る、夜叉丸は鬼の腹を捉えると豆腐を切るように綺麗に振り抜いた。

鬼の体は上半身と下半身で綺麗に別れ、上半身は地面に落ちる、下半身は地面に確りと足を突き、断面は天を仰いでいる。

「ちえ、結局阿修羅か」

「摩和羅女はまだマジだよ、俺なんて一発も当たって無いよ

「はあ、倒せたんだから良いで

！」

阿修羅は斬れた鬼を横目で見て固まつた、鬼の下半身の断面は泡が噴いたように膨らみ、泡は徐々に大きくなる。

そしてそれは消えた上半身を形成しはじめた、1分も経たない内に泡は体の形を成す、泡が弾けるのと同時に鬼は元の体に戻った。

「鬼つて便利なんだね」

「今までアタシ達が戦つてきた鬼は違つたぞ」

「はあ、それより、この鬼どうやって殺すの？」

金色孔雀と摩和羅女は真剣な顔付きで考えている、阿修羅は考える前に諦めの方が早かつた、斬つて駄目なら粉々にするしかない。

「何を考えている？」

「喋つた！」

鬼が喋つた事に金色孔雀と摩和羅女はあり得ないくらいビックリしている、しかし阿修羅は冷静だ、人間に化けるのなら喋れてもおかしくはない、緊那羅の鬼が良い例だ。

「私は殺しても死はない、原子単位で粉々したんなら話は別なんだがな」

「じゃあ粉々にするまでね」

「どうやつて？」

「ボスのその金棒で擦り潰すつてのはどう？」

鬼は大口を開けて笑い始めた、太い声は阿修羅達の体をビリビリと振動させる。

「それくらいでは死はない、それに私はまだ力を出しきっていない、私が本気を出せば君達の勝負はゼロだ」

「じゃあ俺達も本気出そつか」

「そうね」

阿修羅は右手で夜叉丸を持ち、腕を力を抜いて垂らす、体を揺らしながら前に倒した、倒れそうになりながら足を前に出し地面蹴る。
阿修羅は鬼の懷に潜り込むと体ごと腕を振る、遠心力を付けて素早く斬りつけた、鬼は避けようとはせずに腕を一本落とした。

「痛くない！それくらいで私を殺せるとと思つな」

鬼は無くなつた左腕を気にせず、大斧を右腕一本で持ち阿修羅を横薙に払う、しかし大斧は阿修羅に触れる前に碎骨に当たつた。

「俺の阿修羅は傷付けさせないよ」

「はあ、いつから私がボスのモノに？」

「出会つた時から」

「おい、それで防いだつもりか？」

鬼は右腕一本で強引に振り抜いた、金色孔雀こんじきくじやくと阿修羅は軽々と吹き飛ばされ、鬼の目は摩和羅女まわらじょに向けられた。

摩和羅女は阿修羅を吹き飛ばした鬼を怒りの目で睨む。

「君は接近戦は苦手だろ？」

摩和羅女は黙つてしまつた、そして一瞬目を反らし、再び鬼に目をやつた瞬間既に鬼はいなくなつていた。

「摩和羅女後ろ！」

摩和羅女は後ろを振り向くと大斧を振り上げた鬼がいる、不適な笑みを浮かべ、そのまま振り下ろした。

若干体を後ろに反らしたお陰で刃先だけが当たつたが危険な事に変

わりない。

「よくも俺の可愛い部下を傷付けてくれたね」

倒れた摩和羅女を眺めてた鬼の後ろにはいつの間にか金色孔雀が周りこんでいた、金色孔雀は碎骨を鬼の頭上から振り下ろす。

鬼は頭と胴体がグチャグチャになり、両腕と両足だけがその場に落ちた。

金色孔雀は急いで摩和羅女を担いで遠ざける、そして鬼から見えない所に置き止血剤を飲ませ阿修羅の基へ向かった。

鬼の体は腕から徐々に体を形成しはじめてきた。

「はあ、これじゃあきりがないわよ」

「あの再生してる質量は何処から来てるんだよ?」

「さあ? 鬼だからね」

「まあ、鬼だもんね」

二人は鬼という事だけで納得した、そして鬼は元壁に体を元に戻すと嘲笑うような目で一人を睨む、それに警戒をして一人が構えた瞬間、目の前から消えて気付いた時には一人の後ろで大斧を振り上げている。

阿修羅は反応しきれなかつた金色孔雀を蹴り飛ばし、鬼の上段からの攻撃を受け太刀した。

しかし力の差は歴然、徐々に押され始めた時、倒れていた金色孔雀が鬼を払おうとした。

「甘い」

鬼は片手で碎骨を止めると大斧を阿修羅から離し、金色孔雀の脇腹めがけて振った、碎骨で防ぐ暇も無く、ギリギリのところで腕輪で防いだがそのまま豪快に吹き飛ばされ、瓦礫の山に埋もれてしまつ

た。

「最後は君だけだ」

「許さない」

「だからどうした?」

「許さない」

「許さないといつなるんだい?」

「許さない」

「鬼の私でも会話が出来るのに人間の君は会話も出来ないのかい?」

ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、
ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、
ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、

「アブソルペーション【吸収】ー」

阿修羅あしゅらは腕をだらんと垂らして、いつものように体を揺らしながら

倒し、地面を蹴った。

あつという間に鬼の懷に潜り込むと素早く斬りつける、鬼は阿修羅の素早さに若干圧されるがギリギリで防いだ。

夜叉丸は弾かれ、阿修羅の背後を通り、右手から左手に移されがら空きの鬼の右腕を斬りつけた。

「まだ分からぬのか？私は不死！」

ズズズズズズズズ

夜叉丸が血をすするような音をたてると、鬼の左腕は徐々に干からびてきた、そしてそれと同時に夜叉丸が黒みを帯てくる。鬼は慌てて阿修羅から離れるが、左腕は干からびたまま。

「何をした！？」

「貴方の靈体を吸つたの、自然に生きるモノや死んで現世をさまるモノ、全てに流れる靈体をね。

いくら貴方でも靈体が無ければ再生は出来ないでしょ？」

鬼は苦虫を噛み潰したような顔をした、それが示すのは図星、そして焦り。

初めて覚えた恐怖というモノに若干たじろいだその時、阿修羅は懷に潜り込み、そのまま腹に夜叉丸を突き刺した。

ズズズズズズズズ

「死というモノに追われるのを楽しみなさい」

「辞めろ！やめる、ヤメロ、…………ヤ…………メ…………」

鬼はミイラのようになり夜叉丸から落ちた、そして阿修羅が一息ついた時、パチパチと手を叩く音が、音の主を捜すと瓦礫の山の上で赤黒いロープを着た男性が一人。

「やはり本物か」
「貴方は……」

阿修羅はこの男性に一度会った事がある、そしてこの男性から阿修羅の全てが狂つた、この男性のせいで天獅子小町という人間が消えた。

「…………帝釈天」

「懐かし名前だ、しかし時代は移ろい行くモノ、お前が天獅子小町から阿修羅になつたように。俺の名前はルシファー、今ココから始まる、お前達ホーリナーへの反逆がね。」

20・再生（後書き）

あと2話で最終回です、当初の意気込みとは裏腹にグダグダになってしましましたが、まだ続きます。

今回の靈鬼編は序章にしか過ぎません、次回から加速して行きます。

Japan shrine

「ルシファー？」

ルシファー、それは悪魔の中でも最上級の悪魔、それに阿修羅と初めて会った時の白いコートもカミウムマーンの刺繡もない、その代わりに血のように赤黒いロープを着ていて、そのロープの色と鋭い目付きで怪しさが増す。

帝釈天もといルシファーは静かに立ち上がった、阿修羅は警戒して構えたが、あつという間に目の前にルシファーが来て腕を掴まれた。

「俺と一緒に来い、お前が必要だ」

「嫌よ」

阿修羅はルシファーの手を振りほどいて間合いを取った、腕の力を抜き構える。

ルシファーはため息をつきロープの下から腕輪を覗かせた、しかしその腕輪はホーリナーのモノとは異なる形をしている。

ルシファーは腕輪に触れた、得物は大剣クレイモア、名は髭切。

「お前の血が必要だ、千切ってでも連れて行く」

「貴方達はバンパイアなの？」

「お前の血のタメならバンパイアも一興だ」

阿修羅は鼻で笑うと倒れるように地面を蹴った、ルシファーは顔色一つ変えずに阿修羅を眺める。

阿修羅

は体全体を使って、ルシフナーの左側から横薙に斬りつける、
ルシフナーは軽々と夜叉丸を弾くが、阿修羅はそのまま左手に持ち
変えルシフナーの右側から斬る。

寸前まで阿修羅は髭切に注意していたが、ルシフナーは左手に持つ
たま、阿修羅が口角を上げて右腕を斬りうとしたが、何故か髭切
に阻まれた。

左手には髭切が握られたまま、しかし右手にも髭切が握られている。

「あり得ない、何で一振りも？」

「神の決めた撰理など悪魔には関係ない」

ルシフナーは左手に持った髭切を振り上げた、阿修羅は逃げようとしたが腕を掴まれ全く動けない。

「ベロシティ【光速】！」

金属音と共に緊那羅が阿修羅と髭切の間に体を入れた。

「ありがとう、助かつた」

「それより何で帝釈天が？」

「久しぶりだな緊那羅、今は帝釈天ではない、ルシフナーだ」

「ルシフナー？ あんた悪魔に堕ちたの？」

「そんなもんだな」

緊那羅は舌打ちをしてルシフナーを蹴つて阿修羅と離れた、緊那羅は羅刹を抜刀して構える、阿修羅は体の力を抜いて構えた。

「俺は緊那羅には興味が無い、阿修羅が欲しい」

「それなら尚更退けないわね、悪魔に墮ちたあんたなんかには絶対に渡さない」

「まあ良い、きんなら緊那羅は殺せば良いだけだ」

大剣を両手に持つて不適に笑うルシファー、不気味の何者でもない、神の造った摂理を全く無視した得物、全てが未知数だ。

「シンパシー【共振】！」

キィイイイイイ

「アブソルペーション【吸収】！」

「面白くなりそうだな」

不気味に唸る羅刹、黒みがかり血に飢えた夜叉丸、先に地面を蹴つたのは緊那羅きんならだつた、その後ろを追うように阿修羅あしゅらが走り出す、ルシファーは全く動じる事なく他人事のように一人を眺める。緊那羅の横薙の斬撃をルシファーは防ぐが、物凄い振動と共に弾かれた。

「面白い神技だな」

ルシファーに出来た若干の同様の隙に夜叉丸がルシファーの右腕を傷付けた。

ズズズズズズズ

ルシファーの腕が干からび夜叉丸が黒みを帯びる、ルシファーは流石に危険と考えバックステップで間合いを取つた。

「なかなかやるな」

「帝釈天も弱くなつたのね、私の全く届かない存在だと思つてたのに」

「私達二人だし」

「強くなつたしね」

「そんなに愉快か？」

ルシファーはクスクスと笑い始めた、そして左腕一本で髭切を持つと怒りに満ち溢れた表情で一人を睨んだ。

「お前ら、調子乗るな」

「負け惜しみか？見苦しいから辞め、ぐふえつ！」

ルシファーは一瞬で消えて、次に現れた時には緊那羅を蹴り飛ばしていた。

二人が全く反応出来ないスピード、緊那羅は地面に倒れるいつの間にルシファーを見上げていた、またあり得ないスピードで移動したきたのだ。

「弱い、弱すぎる」

「緊那羅！」

ルシファーは羅刹を握り緊那羅の肩を貫き地面に突き刺さる。

「グワアアアア！」

先ほどの蹴り一発で体の骨が何本か折れた上に羅刹が突き刺さった肩、痛みなどで意識が飛びそうになるのを堪えるが、今は指一本動かすのもやつじだ。

「そのままでいれば生かしてやる

ルシファーは緊那羅に背を向け阿修羅に向かつて歩きだした、阿修羅は夜叉丸を両手でしつかり握りハ相に構える。

「チヨンジ【転化】 - ハリッシュヨン【放出】 -」

阿修羅あしゅらが夜叉丸を横に払うと真つ黒な刃のがルシファーに向かって飛び、夜叉丸は元の色に戻っている。

ルシファーは髭切で軽々と黒い刃を弾くと阿修羅あしゅらを睨んだ。

「それで終わりか？」

「あり得ない、強すぎる」

ルシファーは口角を上げると一瞬で阿修羅あしゅらの目の前まで移動した、そして阿修羅あしゅらの足に髭切を突き刺す、阿修羅あしゅらは叫びながらその場に倒れた。

「ハア、……ハア」

「腕が動くな」

ルシファーは髭切を振り上げ阿修羅あしゅらの腕に狙いを定めた、阿修羅あしゅらは諦めて目を瞑り覚悟した。

「ベロシティ【光速】！」

閃光がルシファーに襲いかかる、ルシファー振り上げた髪切で何とか防ぐが力で押し負け吹っ飛んだ。

「誰だ！？もう動ける奴はいないハズだ」

「俺ツスか？俺は神選10階、第1階、太陽神のヘリオス、カミウムマーンの命に来たんスけど、大物が釣れたみたいツスね」

神選10階の太陽神ヘリオス、小麦色の肌に金色のハネツ毛で前髪だけは上がっている、真っ白なダウンベストの右側にカミウムマーンの刺繡、紺色のポケットの多いハーフパンツ。

得物は刀身の広い片手剣、名はレーヴァテイン、半身になりレーヴアテインを波打つように動かしている。

「鬼がいるって聞いたんスけど、悪魔がいるとは思わなかつたツスね」

「神選10階か、楽しめそうだな」

「インフェルノ【烈火】」

レーヴァテインが激しく燃え始めた、それと同時にヘリオスは地面を蹴る、素早い動きでルシファーに近付くと素早い剣筋でルシファーに斬りかかる、ルシファーは若干顔をしかめ受け太刀した。

「俺に防御は通用しないツスよ」

レー・ヴァ・テインを受けた髭切が徐々に溶けてレー・ヴァ・テインがめり込んでいく、ルシファーは髭切から手を離しヘリオスから間合いを取り取つた。

「片腕が使えないから不利だ、一旦退かしてもいい?」

「もう来なくて良いツスからね」

ルシファーは空中に出来たら黒い穴に吸い込まれるように入つて行つた、ヘリオスはレー・ヴァ・テインを戻すとそのまま何処かへ走り去つて行つた。

残されたのは瓦礫の山と血まみれのホーリナー達、しかし阿修羅はそんな事より神選10階の強さに惹かれていた、あれ程強く感じたルシファーを軽々と撤退させる異常なまでの力、それが10人もいる、まさに怪物の集まりだ。

Japan center of Tokyo

「「「おいひいー。」」」

口の端にクリームを付けて叫ぶ阿修羅、緊那羅、摩和羅女、任務を早く切り上げて食べ歩きにぐり出していた。

鬼との戦いで勝つたがホーリナーの殆どが重傷、重体に至る者まで出た始末、この事件は全世界のVCSOの耳に入った。
その中でも注目を集めたのが阿修羅と緊那羅、神域の段階2に到達したのが2人もいるということで神選10階も注目している。
しかし一人はあまり喜ばしい事実ではない、悪魔たった一人に一人は惨敗、阿修羅に至っては目の前で神選10階の強さを見せ付けられた、それなのに最強だなんのと言われてもただの苦痛にしかならない。

今田は半田の自由が約束されている、だから3人は滅多に無い休暇を思いつきり楽しんでる。

「阿修羅、団子があるわよ

「ホントだ、この前はろくに食べてもうえ無かつたから今日はしつかりとゴマを食べてもらつわよ

「じゃあアタシが貰つてくるぞー！」

「摩和羅女、分かつてるよね？持つてこれるだけ持つてこい！」

摩和羅女はビシッと敬礼のポーズをして団子屋に入つて行つた、暫

くするとフラフラしている摩和羅女が帰ってきた。

両手と頭に乗せたお盆には山盛りに団子が積まれている、恐らく店

にある団子を殆ど持ってきたのだろう。

阿修羅は見かねて頭のゴマ団子の山を取った、緊那羅は右手のあんこ、摩和羅女に残つたのはみたらしだけ。

「緊那羅があんな事言つからこなに持つてきちゃつたじゃない」

「べふにひいんふかない（別に良いんじやない）」

「阿修羅！ゴマ美味しいぞ！」

「当たり前でしょ」

緊那羅は色々な団子取つ替え引っ替え口に放り込んでる、摩和羅女は食べ終つた串を投げて的当てをして楽しんでいる、阿修羅は静かに着々と食べながら一人の暴走をセーブするので精一杯。

「阿修羅、緊那羅、どーなつって何だ？」

「あんたドーナツも知らないの！？」

「ドーナツは穴の空いた美味しいモノ」

「美味しいのか！？」

「かなりね、だから調達よろしく」

摩和羅女は敬礼してドーナツ調達に走つた、緊那羅はホーリナーの特権と摩和羅女を使うのだけは達人クラスだ。

「阿修羅、それいらないならもうつよ」

「あつーちょっとー」

「いただきまーす」

緊那羅は阿修羅の残していた最後の団子を一口で食べた、阿修羅は泣きそうな目で緊那羅の持つている串を見た。

阿修羅は

阿修羅は阿修羅の残していた最後の団子を一口で食べた、阿修羅は

「悪かつた、ゴメン、な？」

「…………隙あり！」

阿修羅は緊那羅が残していたあんこの団子を奪い一口で食べた、勝利に満ちた表情で緊那羅を見ると緊那羅はうつ向き震えている。

「これでチャラよ」

「返せ！私の団子返せ！」

緊那羅は阿修羅の頬を掴んで引っ張った、阿修羅も緊那羅と同じ事を言いながら緊那羅の頬を掴み引っ張る。

二人が団子団子と言いながら頬を引っ張つてると、再び両手と頭にお盆を乗せ大量のドーナツを持った摩和羅女が出てきた。

「何やつてるんだ？」

「「団子食べられた！」」

泣きそうな顔で両頬を腫らした一人がハモつた、摩和羅女はクスクスと笑い始めると頭のお盆今にも落ちそうになる。

「「危ない！」」

「えつ？うわあー！」

お盆は大きく傾き摩和羅女の頭から滑り落ちた、阿修羅と緊那羅は頭から飛び込む、ドーナツは地面上に落ちるのを免れ阿修羅と緊那羅の体の上に落ちた。

「凄い、凄いぞー！」

「ありがとう」

「はあ、今本当にホーリナーで良かつたと思つてゐる、こんなの人間に見られたら最悪」

二人は体に落ちたドーナツをお盆に乗せてそれを阿修羅が持つ、緊那羅は摩和羅女から一つお盆を貰いドーナツを頬張つた、摩和羅女も恐る恐るドーナツを口に入れた。

「ほう、ふあわわほ？（どう、摩和羅女？）」

「美味しい、美味い、美味！」

摩和羅女は次々にドーナツを口に放り込む。

「うぐつ！」

「摩和羅女、どうした？」

「もしかして詰まらしたの！？」

摩和羅女は苦しそうに首を縦に振つた、緊那羅は阿修羅にお盆を持たせ飲み物を探しに行つた。

1分もしない内に戻つて紙コップを持って戻つて来た、緊那羅はそれを摩和羅女に渡すと摩和羅女は一気に飲み干す。

「ふはあ」

「はあ、焦らせないでよ」

「ひくつ！……ひくつ！」

「摩和羅女、どうしたの？」

「あ、ヤバ」

緊那羅は持ってきた紙コップの匂いをかいで苦笑いを浮かべた、阿修羅は紙コップを受け取り匂いをかぐ。

阿

「ちょっと摩和羅女！これって……」

「ビールだな」

「あひゅらあーきんにゅらあーなんきやたのしいぞー！」

摩和羅女はお盆を投げ出して走り始めた、阿修羅と緊那羅もお盆を投げ捨てて摩和羅女の跡を追う。摩和羅女はスキップするように走りながら腕輪に触れた、得物は暗器の針、名は針鬼。

「阿修羅、もしかして……？」

「はあ、人間で的当て？？」

阿修羅と緊那羅も腕輪に触れる、得物は長刀と納刀された刀、名は夜叉丸と羅刹。

「さいひょはひとみでにひやくちえん！」

「阿修羅！そつち！」

「ベロシティ【光速】！」

阿修羅は針鬼を先回りして弾き飛ばした、酔つても命中力は全く落ちない。

「緊那羅！」

「ベロシティ【光速】！」

今度は緊那羅が針鬼を打ち落とす、たつた一杯飲んだだけでコレだけの殺人鬼と化す摩和羅女、ある意味ビンゴブックSクラスだ。

「阿修羅！」

「ベロシティ【光速】！」

「ベロシティ【光速】！」

「ベロシティ【光速】！」

「ふあいやーわーくす【花火】」

「「無理よ！」」

ベンチにスヤスヤ眠る摩和羅女、その下で死にかけている阿修羅と
緊那羅、辛うじて摩和羅女の針鬼は誰にも当たらなかつたが一人の
疲労は著しい、神技の連発と人を守る事による疲労だ。

「あらら、皆お疲れだね」

「はあ、ボスか、何で此所に？」

「協力者から情報でホーリナー3人が暴れてるって聞いたからさあ、
やつぱりボスとしてこれは始末しなきやいけないだろ？」

「全部摩和羅女のせいだ」

「連帶責任、連帶責任」

金色孔雀（こんじきくくじやく）は車を呼んで3人を車に押し込んだ。

阿修羅達三人は摩和羅女の後始末のタメに多目的スペースの上、以前に緊那羅のせいで連れて来られた場所、拷問スペースと呼ぶ者もいるような所に連れて来られた。

「はあ、またやるの？」
「当たり前でしょ」
「あんたいつか絶対に殺す」「恐いなあ、何もしなきや良いだけなのに」「ゴメンなー、アタシのせいでゴメンなー」

摩和羅女が必死に謝るが一人にはそれをフォローする余裕もない、これから始まる恐怖と増えるトラウマ、それを考えたら他人の事など考える余裕など無くなる。

「それじゃあようしぐね、備蓄倉庫の整理」

金色孔雀は3人を蹴り飛ばすように備蓄倉庫に入れると、扉を閉めて鍵をかけ電気を付けた。

「　　イヤアアアアア　　」

To
be
con-
tinued

Fin・食べ歩き（後書き）

何とか最終回を迎える事が出来ました、この話が基礎になって次回に続きます。

今回幾つかのキャラクターに付加されてる、神徳、無理矢理のこじつけでは無く本当にあります、それも実際の通りにまんます。

次回作も読んでいただけたら幸いです。

評価やアドバイス、コメントやダメ出し等を頂けると次回作の励みになります。
では次もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8454a/>

修羅の巫女1《靈鬼編》

2010年10月28日07時29分発行